

---

# 伝説の勇者の伝説 ～欠片を失った光にうつるもの～

御徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伝説の勇者の伝説      〽欠片を失った光にうつるもの〽

### 【Nコード】

N5974T

### 【作者名】

御徒

### 【あらすじ】

「どうしようもないことに巻き込まれてしまったなあ…」

ただの男子高校生だった青年、美原 蜜葉。

だがある少女に無理矢理伝勇伝世界に転生させられてしまった！

全ては狂った筋書きをぶち壊すため。彼は転生前の記憶を失いながらも世界を、ライナたちを救うために前に進む！

果たして蜜葉は…ミフィア・レル＝エフィリアは筋書きをぶち壊せるのだろうか？

主人公は穏やかで突っ込み役ですが強いです。初めての小説で、け

っ　こ　う　滅　茶　苦　茶　で　す　が　…　楽　し　ん　で　く　れ　ば　幸　い　で　す。

（　最　近、更　新　不　定　期　と　な　っ　て　お　り　ま　す。私　情　な　ど　の　事　情　に　よ　り、あ　ま　り　更　新　で　き　な　く　な　っ　て　き　ま　し　た。で　す　が　打　ち　切　る　気　は　無　い　の　で、ど　う　か　お　許　し　く　だ　さ　い。お　気　に　入　り　し　て　く　れ　た　方、評　価　し　て　下　さ　っ　た　方、励　ま　し　の　言　葉　を　下　さ　っ　た　方　に　心　か　ら　感　謝　申　し　上　げ　ま　す）

## プロローグ

### 全てが始まる、その瞬間（前書き）

まずは主人公が転生する話

まだ原作は始まってません

ですがこの話が出発点となります。

文章力皆無ですが…

楽しんでくれればうれしいです。

## プロローグ 全てが始まる、その瞬間

世界はいきなり変わるものだ。

ちよつと前までは。

ちよつと前までは平凡な人生だったのに……

事はある日の夜。

僕——、美原<sup>みはら</sup> 蜜葉<sup>みつば</sup>が部活動から帰る、そのときにおこった。

「ふんふーん、ふーん♪」

そのときの僕はもちろんのことなにもしらず、鼻歌を歌っていた。  
もう、スキップなんかしていた。

そこに他の人がいたら、間違えなく痛い人……なんて目で見られていたと思う。

しかし僕はそんなことを気にしないくらい浮かれていたんだ。

——だからこんなめにあってしまったのかもなあ、なんて、  
今さらながらに思う。

時間が戻るなら戻したいと。

……だが時間は戻ってくれなかった。

気付いたときにはすでに――

――歯車は狂っていたのかもしれない。

「……っ!？」

僕の人生は、なんの変哲もないことで大きく歪んでしまったんだ。

それはとても有りがちなこと。

居眠り運転のトラックが自分めがけて突っ込んできたという、ひどく有りがちな。

だがそんな有りがちなことで簡単に終わるのが人生なんだ。

……というか、この後に起こることもひどく有りがちなことだっ  
たが。

へ？ 人生終わった!! 死んだ君に後もなくそも無いって？

はは。

だから有りがちなんじゃないか？

だって何処かで聞いたことあるもの。ここまででもうすでにわか

つてる人もいるんじゃないかな？

……僕は目が覚めたらまず、白——……を、見つけた。  
というよりも、いるところ自体が真っ白だったんだ。  
もちろんこんないきなりな事態に慌てる僕。

他人の目から見たらさぞ愉快だっただろう。一人なのにどんだけ慌ててるんだって。

だが僕はそこまで出来た人間じゃない。  
当たり前だよ。普通の高校生だったんだから。  
動揺しないはずじゃないか？

まあさすがにあの慌てようは恥ずかしかったので言わないけどね。

さて、慌てまくる……という恥ずかしい状態から回復した僕は改めて辺りを見回した。

辺りは相変わらず真っ白だ。

「此処は何処だ？」

今更だけどそんな反応をする。なんかお約束だね。  
とりあえず辺りをうろつろしてみろ。

うろつろ、うろつろ……  
うろつろつろつろつろつろ……  
……すると。

——鬱陶しい!!

「!？」

……声が、響いた。

これが頭に落ちてくる声——とでもいうのだろうか？  
非科学的すぎる。

もしか、これは…夢かな？  
そう考えるのが普通だろう。  
そしてまたもお約束。  
ぎゅうう。

「痛!？」

どうやら夢じゃない様子。

ま、夢でつねったことなんてないから本当なのかはわかんないけどねえ。

じゃ、これ、何？

> 此处は虚と現の狭間ですよく  
「読まれてるっ!？」

思わず叫んでしまった。

それに何者かが応える。

> 私は《神姫》<sup>エルファ</sup>ですから。どんなことでもお見通しなんですよ<

そんな意味不明な言葉に僕は、

「……………えらは？」

> エルフアですう！！<

「……………何、ソレ？」

女の声は戸惑ったように言葉に詰まる。  
少し間が空き、

> ま、まあソレは後で。言つの面倒いです！<

女は気持ちいいくらい言いきった。僕は呆れたけど。  
と、とりあえず、気を取り直して。

「……………ええと、じゃあ僕はなんで、その……………<sup>うつろ</sup>虚と現<sup>うつろ</sup>の狭間？ にいるのかな？」

すると女は待ってました！と言わんばかりにはずんだ雰囲気をか

もしだす。

わかりやすいやつだな…って思う。

>私と呼んだんです！<

「はあ？ 呼んだら人は知らぬ間に移動したりするの？」

>移動なんかしてませんよ。魂抜いただけです<

「……は？」

>お願いがあつてですね、魂だけ呼んだんです。<

「……ええと、やつぱ、夢？」

>んでそのお願いはですね？<

「いや聞いてよ」

僕を無視して話はどんどん進んでいく。

てか聞いてよほんと！

>貴方には転生してもらいます<

……………。

は？

どーゆー話でこんなに……

>だから貴方トラックに跳ねられたしょう？      なんかええっと、ア  
レですよアレ<

……言わなくても伝わるという。

つか……跳ねられた↓ 謎の場所↓ 落ちてくる声↓ 転生？

「有りがちな話？」

とゆー構図が……

有りがちな話だとしたら落ちてくる声「神様だけだよ」。

> まー、手違いで、とは違いますけど<

だとしたら何……

> ……私の友達があつちにいまして……あの筋書き通りは可哀想な  
のです< シナリオ

へえ。人助けなんだ…？あつちってことは外国？

> 異世界です<

……は？

遠いところの騒ぎじゃない。（いやいやそおいう問題じゃないだ  
ろ……）

つかさ？ こんな世界で異世界？ やっぱ夢？

> 残念ながら夢ではないのです！ さー、私を助けるのです！<

「わー、微妙に上から目線だー」

> よーやく喋ったと思っただけなんですかあ！　まあ、何を言われようが問答無用なので別に問題はありませんが。　<

「ひどっ！？　悪魔か！　お前は悪魔で悪魔ですからあーなんて言うやつだったのか！」

> ソレどつかで聞いたことありますう！　自重して下さいっ！　あと間違ってますしい！<

「間違ってるのは一種の自重です」

> なんですかそれええええええええ<

……と、くだらない話が続きひときしり叫んだところで。

> ううう。やりづらいですう……。降りますか<

女が上から降ってきた！

わずかに波うつ水鏡色の髪。吸い込まれそうな光を宿す紫の瞳。そして、どこか気品漂う整った顔立ちとそのただずまい。

容姿端麗ともいえる少女に、僕は驚き戸惑っていた。

……しゃべり方と姿のギャップに。

> そこですか！？<

「そう。そこです。どきっぱりっ」

> それひどくないですか！？<

「いやいや。問答無用よりはまだひどくないです　ふあっふあっはっ」

> ふあっふあっはっじゃないでしょう！？あうもお……なんでこい

つななんだろう……<

「ん？何？」

>……いや、なんでもないです<

その後、女はエルファとよんでと言った。エルファとは名前ではないのだが、自分には名前がないからと言っていた。

僕は言う。

「で？ 異世界って、どゆところ？」

エルファはそれに少し困ったような顔をするが、すぐにその表情は消える。

>ええと、伝説の勇者の伝説の世界……です。<

……つてえ！？ 伝勇伝って……僕のお気に入りの小説じゃないか！

僕は少し喜んだ。

まあ確かにレムルスの筋書き通りにはさせたくないと思うな。  
シナリオ

「んうゝ、行くのはいいとして、僕、すぐ死んじやいそうなんだけどぞ……」

僕は少なくとも標準よりも運動能力はあるけどさ、あんな世界で通じるわけないじゃん。

>ふふ。あちらに転生させるときに全て倍以上の能力に設定してたりします。欲しい能力とかがありますか？<

わあ話早。んじゃてきとーに凄いの。あー、でも魔眼は欲しい。いくら忌み嫌われてても筋書きの中にいるライナとあえないとどうしようもないしね。

>そうですか。ならやっときます。あと……言わなければならないのがありますが<

ん？ 何かあるの？

>……あつちに行くための忘却欠片ルールフラグメの副作用で記憶が消えてしまうんです。なんせ次に転生する云いつてやつを捻じ曲げるのですから。副作用も面倒なのです<

……大丈夫なのか、それ。

> 大丈夫です。別にその他の副作用は無いですし。失くした記憶は魂に刻まれてるもの、なにかのきっかけで戻ってしまうのです。それに貴方は私によって転生されたのです。戻りやすいですよ<

エルファは言って天を仰ぐ。

> ……天よ。我はこの者、蜜葉の輪廻転生を捻じ曲げ、違う世に転生させる。我に力を……恵みのあらんことを<

瞬間、僕の下から柔らかい光が溢れだす。

「わ

> 頼みましたよ、蜜葉。いや…… “ミフィア・レル＝エフィリア” <

そんな意味不明な言葉を聞きながら僕の意識は遠のいてゆく。

息が……

苦しい。

転生する、ということとは一度死ぬということだ。

つまり……僕は今、死んで——……

そこまで考えたところで意識がとんだ。

伝勇伝世界の方へと。

そして全ては終わり、また、全てが始まる――

狂った化け物たちが奏でる狂想曲の舞台が、今、幕を開けた。

## ブローグ

全てが始まる、その瞬間（後書き）

ええと、始めましたね。（や。言わなくてもわかるだろ）  
彼の人生はいつたいどうなってしまうのでしょうか？

なんかもう難しいです（汗）

次は一気に時間が経ちます。

その間はいずれ書きたいと思ってます

変なところがあったら教えてくれるとうれしいです。

## 第一話 伝説は動きだす（前書き）

第一話です。

前回の後書きでだいぶ経つとか書いていて全然経ってないです…

主人公が転生した直後の話です。

記憶が無いというまいち転生した感がない話ですが…

## 第一話 伝説は動きだす

>蜜葉は無事にあつちにたどり着いたでしょうか……<

……と、不思議な少女、エルファ《神姫》は呟いた。

彼——、蜜葉を伝説伝世界あつちに送った『忘却欠片』を強く握りしめて。

何故そんなことをしているのかと言うと……

……言うまでもなく心配しているのだ。

ちなみに此処は全ての魂に道を示す、『天界』の一部である。

エルファはこの部屋の主であり、天界の主である者の娘だ。

この部屋は世界の輪廻転生を司り、魂を転生させる道とも言える場所だった。

>……此処がいくら転生の場合としても無理があるのですよね……<

そう。世界の輪廻転生を司っているとすると、異世界に転生させるというのは不可能に近いのだ。

ルールラゲメだから忘却欠片の力を借りて転生の術式を使用した。

つまりは無理矢理不可能なことを可能にしたのだ。

何があってもおかしくない。

彼女はうんうんと悩む。

そして。

>..... 此処で悩んだってどうしようも無いですね..... はあく

結局悩むのを諦めた。

> …… 凄い能力についてはできましたが、魔眼については決めよう  
 がなかったことも悩みの種ですね…… 後は転生の渦に任せるほかな  
 いです…… リューの言ういーのずーえ？ ってやつじゃなければ良い  
 のですが…… <

だがその願いは届かない。

世界がそこまで甘くないことを、彼女は知る由も無かった。

\*  
•  
\*  
•  
\*

一方その頃。

ローランド帝国のある村では

「がつ、頑張つて！ルカ！？」

そんな声が大きく響いていた。  
ずっと戦争が続くこの国で新たにいのちが生まれようとしていたのだ。

夫は無理矢理出兵させられ、貴族の気まぐれで友達も殺されて数人しかいないので、今この場に立ち会っているのはルカと呼ばれた女性とその友人一人だけだった。

女性……ルカ・レルは夫との大事な遺産とも言える子をその腹に宿し、必死に痛みに耐えていた。

自分の腹の中で、ある異常なことが起こっていたともしらずに。

\*  
・  
\*  
・  
\*

……ここはどこだろう？

あつたかいところだなあ

あれえ？なんでぼくはみえてるんだろお？

——と、ルカの腹の中にいる子はおもった。

まだ産まれてすらいらないというのに、色々と思い浮かぶものがある。

それはとても奇妙なものだった。

まあ彼は神の子が自ら転生させた青年……蜜葉の生まれ変わりなので、当たり前といえば当たり前なのだが……

彼は、記憶を失っていた。

だが、わずかには残っていたようで、わかることもあった。  
此処は多分母親の腹の中なのだと。

そう、思った、刹那。

声が聞こえた。

『——最初のエサをやろう。その下等人間を、喰らえ』

——いや、堕<sup>ふ</sup>ってきた、の方が正しいだろうか。

声は命令する。母親を喰らえと。

命令を実行するのは容易い。やり方は知っているのだから。  
しかし何かが邪魔をする。それは前世の記憶の欠片だった。  
なのでまだほとんどなにも知らない彼は後者に従うことにした。

そして彼は何事もなかったかのように生まれ——

「生まれてきてくれて、有難う。私の、可愛い坊や」

「……良かった。無事で良かった」

「……ええ。そうだ……この子の名は、ミフィア。彼と似てる名前

……ミフィア・レルよ……」

伝説は、  
今、  
静かに動きだす。

## 第一話 伝説は動きだす（後書き）

まず…

すいませんでしたっ？

前書きにも書きましたが、全然経ってません…

次こそはめっちゃ時間が経った話にしたいと思います！  
十七年くらい？

経ちすぎですね……（…うん）

あとわかりでしょうが彼の魔眼は殲滅眼ですね。

早く原作に入りたい！

てかライナとあわせたいです。

誤字、脱字などがあつたら教えてください。

## 第二話 開始のベルは鳴り響く（前書き）

第二話です。

今回は予告通りだいぶ時間が経ちました。

ルビ多くて読みづらいかもしれませんが…

…すいません。

## 第二話 開始のベルは鳴り響く

——誰か来た。

そう、ミフィア・レル・エフィリアは感じた。

此処は牢獄。それも一級戦犯や連続殺人犯が集められた危険な牢獄だ。

一般人がくるはずもない。

つまり、極悪な犯罪者がやって来たのだ。

看守の可能性もあったが、それは無いと断言できた。

雰囲気が違うからだ。

どこか眠そうな感じだが、わずかだが少し何かを警戒しているのが分かる。

あと他の奴らの中でまた我らの道連れになる者が増えた、などと言っているのがいた。変な話だが、それもやって来たのが犯罪者としてののを確信に導いた。

気怠げな足音に遅れて他の足音も近づいて来る。多分、後の方が看守の足音だろう。

やがて足音は右隣りの部屋を通り過ぎ、こちらへやって来た。

檻の隙間から見たのは——

黒髪、黒眼の青年だった。

歳は自分と同じくらいで背も自分と同じくらいだった。  
身体からは覇気というものが感じられず、足音と同様気怠げだった。

しかしミフィアはそんな姿を見て、あることに気付く。

……なんだろう？

彼は何処が違う。他の囚人たちとは……

そう。青年には違和感があった。  
他の囚人たちから感じるどす黒い悪意とは似てもに付かないものが。

彼が黒髪の青年から感じたのは……

諦め。

悲しみ。

そして、絶望。

普通ならそんなものは感じることはできない。  
だが彼は観察力が凄まじく高く、わずかな違和感でさえも感じとってしまう。

それが彼がローランドに『凄まじき才能を持つ者』と呼ばれる理

由のひとつだった。

また変わったやつがきたもんだ、と心の中で呟いているうちに2人は通り過ぎて行く。

……と思ったら、彼のすぐ左隣の独房の前で足音が止まる。

あそこには確か、赤髪の少女がついこの間入って来たばかりのはずだが……

まあいつも通り、あんな変わったやつもいつかは……と思いながら、気にせず横になる。

こうゆうときは寝てしまった方が楽だからだ。

観察力が凄まじく高い天才は結局、すぐ近くにいる魔術の天才と気が合いそうだった……

\*  
・  
\*  
・  
\*

それから何ヶ月も経ち、やはり牢獄は静まりかえっていた。

聞こえるのは隣の部屋にいる男と看守の仲がいい会話だけだった。ときにいびきが聞こえたり、何かを書くような音がしたり、看守と何かを話していたり。

様々だった。

だがミフィアは永遠に彼とは話すことは無いと思っていた。

しかしある以外なことで話すようになる。

\* ・ ・ ・ \*

ミフィアはそこら辺に落ちていたものを拾って看守がいるであろう所に投げた。

机にコツンとあたる。

それは合図だ。

物心ついたときからいたミフィアからの合図。

それは……

看守は立ち上がって彼の部屋へ近づいて来る。

そして、

「はいはいトイレな。縄をくくりつけるから柵から腕出せ」

トイレの合図だった……

一人一部屋というちよっぴり贅沢なこの牢屋だが、流石に一部屋ずつにはトイレは無かったのだ。

ミフィアは腕をがちりと縄で縛られ、そのまま看守とともに歩きます。

そしてようを済まし、戻ろうとした、その時。

「侵入者だッ!？」

牢獄の見張りの兵らしき者の声が、薄暗い牢獄にこだました。看守は一瞬うるたえ、平静を取り戻してから彼に告げた。

「お前は牢屋に戻ってろ。緊急事態だ」

そう早口で言うと、看守は走って行った。普通ならそんな対応はしないだろう。だが、今回はちがった。それほど切羽詰まっていたようだ。

ローランド  
この国はもうすでに国民を見放しているが、流石に牢獄には軍の者がいる。

看守だって一応は軍人だ。

だがその兵……しかも極悪な犯罪者ばかりが集められた牢獄の見張りの兵が悲痛な声を上げたのだ。

敵は強い……ということだ……

（これは…ヤバイかな？）

ミフィアはそう思った。

ここの兵は光燐くろうりんをえるくらいの兵が多数いるはずなのに――  
出口の方からうめき声が聞こえる。

ミフィアは確信した。

「これはマズいなあ」

それから腕を縄抜けで解放し、臨戦体制をとる。

「どうやら敵は一人ではなさそうだ」

眩き、彼は顔を歪めた。

## 第二話 開始のベルは鳴り響く（後書き）

えつとまず…微妙な疑問解決。

主人公の名前は前回、ミフィア・レルと言われてましたよね？  
さて疑問。

何故後に『エフィリア』がついているのか？

回答。

エフィリアⅡ『凄まじき才能を持つ者』で、それは称号みたいなものの。

それをつけてるのです。

さて、ようやく第二話です。

長かった…

オリジナル多いですがどうかお付き合いください。

次はライナがちゃんと話す予定です。

あと、いつかこの十七年のことも書くつもりです。

誤字、脱字などがあつたら教えてください。

### 第三話 伝説と現実が交差する時化け物たちは出会う（前書き）

第三話です！

今回もオリジナル炸裂です。

あと無駄に長いです！

微妙にずれてますけどね…

### 第三話 伝説と現実が交差する時化け物たちは出会う

ライナ side

それはミフィアが看守とともにトイレにむかって歩いているとき。  
ライナ・リユートは緩んだ眼を檻の外に向けた。

寝癖のついた黒髪は牢獄に来たときよりも長く、肩ぐらゐにまで  
伸びている。

それだけで此処に来てからだいぶ時が過ぎたということを実感さ  
せる。

此処には窓がなく、日の光もなければ月の光もないため、どれだ  
け過ぎたかはわからないが、少なくとも半年は過ぎたのではないか  
と思う。

ちなみに今、彼はある古文書を解読したばかりだった。

大帝・黒叡の伝説。

一昨日の夜、ようやく解読が進み始めた古文書。

何故か読もうと古文書に視線を戻した時、眼に激痛が走ったのだ  
が、それ以降はなんともないまま解読し終えた。

そして先ほど昼寝をし始めようとしたところで。  
なにかがコツン、と看守の机にあたった。

（ああ、お隣さんね）

此処に来て約半年、その意味はとうの昔にわかっていた。

言うのはちよつとアレだが、まあ……生きるためには必要なことだししょうがないことなので。

自分は看守と仲が良いので言えば普通に大丈夫だが、他の者たちはそうはいかないだろう。

というか、お隣さんと自分以外はこういう方法をとっているのか、がそもそもの疑問である。

そんなことを考えていた最中、

見張りをしているはずの兵の聲が牢屋にこだました。

「侵入者だッ!？」

……それは悲鳴だった。

兵は強い。光燐くろうりを放てるほどの実力者なのだ。

光燐は習得難度が高い。ほとんどの一般兵は光燐の術式を読もうともしないほどに。

なのに今の悲痛な叫び声は——？

ライナは思う

これはなんかヤバいんじゃない？……？と。

と、そこで、

「わっ!？」

ライナが入ってる部屋の檻になにかがぶつかる。

「というかぶつかる……」どころの騒ぎじゃない勢いで吹っ飛んできた！

なにか、とは自分と同じくらいの歳の青年である。

濃紺の長い黒髪をひとつにまとめた中肉中背の男。

首には長さが余りまくっている紺のチョーカーが巻かれている。

青年は地面に倒れ伏したまま動かない。

ライナは、

「だ、大丈夫か……？」

思わずそう聞いていた。

動かない——、と思ったら青年はむくりと立ち上がる。

……青年は驚くことに無傷だった。

ライナが驚いていると青年がひよいとこちらをむき、

「あ、君この前来たお隣さん？手伝ってくれない？」

なんて言う。

「この前って…半年前だろ？」

「え、うそお。ってそんな場合じゃないよね!？」

青年は看守の席の上ののっていた鍵を手に取り、ライナの牢屋の鍵を開ける。

どうやら強制参加らしい。

ライナが、

「めんどくさい……」

なんてぼやいていると、

足音が聞こえてくる。

かなり訓練された感じの雰囲気だった。

というか、もの凄い殺気があふれ出ている……

それが数個。

直後、黒い戦闘服を身にまとった者たち……

隠成師の奴らが、眼前に姿を現した。

ミフィア side

隠成師の者たちが自分らを見据えている——……

そんな光景に青年——、ミフィアは顔を歪めた。

それはライナも同様で、彼はめんどくさ……なんて呟いていた。

隠成師……それが何を意味するか、わかる者はどれほどいるだろうか？

彼らはこの国の暗部の者。

ローランドの一番汚い所を担う者たちだ。

そいつらはまさに化け物と言っているほどの力を持っている。

魔法騎士と同等……またはそれ以上の力を。

元隠成師のライナだって、魔法騎士二人ぐらいなら一人で相手できるほどの力を持っている。

本気で……殺すつもりで動いたらきつとそれ以上だろう。

まあライナよりは弱い奴らだが、それでも束になられると厄介どころの騒ぎではなかった。

だからミフィアは攻撃されて吹っ飛んだように見せかけ、自ら跳んで他の者たちがいる所まで行ったのだが……  
こんな時まで気だるそうなライナに不安を感じる。

本当に強いのかなんて知りようもない話であるし。

正直人選ミスかな？なんて思ってしまったほど緊張感がなかった。

隠成師たちが嫌味な笑みを浮かべて口ぐちに言う。

「ははは。けっこうおもしろいな？ 弱い者いじめは」

「普通の奴らとはやり応えが違うな。」

「いい退屈しのぎだ。任務ばかりじゃ疲れるもんなー？」

ミフィアがぼそりと「……下衆が」と呟く。

ライナは苦笑いしかできなかった。

本当のことなんだから仕方がないというものである。

続いてライナもぼそりと呟く。

「……こいつら見たことない奴らだな。ってことは俺は関係ないのか？」

ミフィアは頭に？ マークを浮かべる。

「ん？ ってことは……もしかして君、隠成師なの？」  
「元、な。」

ミフィアは意外だな、まあ人選ミスじゃなくてよかった、なんてちよつと失礼なことを考える。

ライナのぼやけた呟き。それが戦闘の合図のようだった。

隠成師の一人がライナにむかってナイフを斬りつける。その切れ味は鋭い。元隠成師のライナを先に始末しようと考えての行動らしい。だがライナはひらりと避ける。眠そうな雰囲気からは考えられないほどなめらかな動き。あきらかに戦い慣れしている動きに、ミフィアは感心する。

相手は焦ったのか、あわてたか感じでナイフを投げる。空を切る音がし、一直線にミフィアへと飛んでいく。

彼は別段驚くわけでもなく、ナイフをひょいとかむ。投げる。相手の態勢が崩れ、スキができる。

その時にはすでにライナが魔法陣を完成させている。そして、

『求めるは雷鳴>>>・稲光<sup>いしち</sup>』

詠唱する。

すると魔法陣から稲妻が迸り、一人感電。そして気絶する。

しかし残りの奴らも魔法陣を完成させており……

ライナは流石に避けることにした。避けなければクランクのときと同じになりかねない。

だが、ミフィアは違った。

眼を見開く。

すると直後。

彼の眼には朱の十字架が浮いていて。

そして、

「力を喰らい——、」

魔法が、放たれる。

ミフィアは息を小さく吸い、

「……それを放つ」

呟いた。

瞬間、魔法が……

魔法が彼の眼に吸いこまれて……

相手は驚愕する。

相手二人は朱の十字架を見ていない。だからなんのことだかわかってなくてあたふたするばかり……

……ということすら彼らにはかなわなかった。

精霊を吸収したことによって身体能力を上げたミフィアが二人を殴り倒したのだ。

ということ以外とあっさり戦闘は終了した。

……だがあることは終わっていなかった。

ライナは驚いた顔をして、こちらを見つめていた。

ミフィアは何？と言う。

ライナはそれに、

「……お前、今は……それに、その眼は――」

刹那、ミフィアは固まった。

### 第三話 伝説と現実が交差する時化け物たちは出会う(後書き)

さて、出てきました。殲滅眼。

彼の殲滅眼は普通の殲滅眼とは違う予定です。

あとは特殊能力か…二つ案があるけど、どうしよう？  
今は両方にしようかなあと思ってます。

さて、次の更新は…土日かな？

わかりませんが待っていてくれると嬉しいです。

#### 第四話 明かされる過去と闇と光（前書き）

さて！四話です。

土日に更新とか書いといて金曜に投稿とは自分でも考えてなかったです。

というか先週にも似たような感じのが…

こほんこほん。

とりあえずまた変なのになりそうなので省略。

今回もまた無駄に長いです！しかもシリアスになったりコミカルになったりわかりづらいです。

あと少しずれてるような気もしてます。

……。

どうぞ楽しんでってください（オイ。）

## 第四話 明かされる過去と闇と光

ミフィアは固まっていた。

何故？

お隣さんに自分が化け物だと知られてしまったから。

普通の『複写眼』とは違う朱の十字架。  
アルファ・ステイグマ

なんの躊躇もなく使用したのは確かに自分が悪い。

だけど……

やはり化け物、と呼ばれるのは気分がいいものではない。

嫌だとおもってる。

だからなるべく見せたくないと思っていたのだ。

見せないように注意深く動いていた。

だが、彼は見てしまったようだ。

この……元隠成師の青年が……

……かと言ってこのまま固まっているわけにもいけなかった。

ミフィアはきつく結んでいた口を開いて、

「……化け物で、悪かったな……」

また、辺りは静まる。

———と思ったら、こんどは青年……ライナの方が口を開いた。

「……お前もか」

ライナは『アルファ・ステイグマ複写眼』を発動させる。

もちろん、ミフィアは驚く。

まさかこの牢獄の中に似た境遇の人間がいたとは思っていなかったからだ。

だとしたら同じ理由で投獄されたのかもしれない。

「驚いた…まさかお隣さんが『アルファ・ステイグマ複写眼』を持っていたとは」

「うーん、お隣さん、かあ。めんどいからライナでいいよ。ライナ・リユート。お前は？」

「……僕はミフィア・レル」エフィリア。まあお隣どうしよろしく。」

ライナはん？　と言って首をかしげる。

「お前の名前……妙に長いな」

「んー、『エフィリア凄まじき才能を持つ者』は称号でね、くつつけてるだけなんだ」

「なんかややこしいなあ」

なんだか此処が牢屋だと忘れてしまっただけでほんわかな雰囲気垂れ流されている……

だが本人たちはまったく気にしない。

結局はふたりとも、似た者同士だった……

「そついえばお前の眼……なんか違ったような……うん。」  
「ん？ 見せようか？」  
「んなあつさり……でも気になるな。そっちが いいのなら」  
「ほい」  
「わゝほんとあつさり……って、……？？」

さっきの空気はどこへやら、ライナは急に真剣な感じになる。

「……十字架？」  
「そ。僕のは普通のと違うみたい。魔法は複写できないしね」  
「なんだそれ……複写眼じゃないじゃん、名前的にさ」  
「あはは。魔法吸って自分の力に還元できるんだよ。思いっきり違うよねえ」

ミフィアははは、なんて笑う。  
その笑みは何故か自嘲するかのような……  
ライナは首をかしげる。

「……なんかあったのか？」  
「ん……この眼は違うっていったよね？」  
「……おう」  
「でも変わらないところもある」

それは彼の雰囲気から簡単に推測できた。  
アルファ・ステイグマ  
『複写眼』が忌み嫌われる理由。

「……暴走する？」

「違う。でも残る結果は変わらないよ」

「でもさ」

「もちろん殺りたくないなら殺らなくても大丈夫。でもそういう為に造られたんだよ。そういう生き物だってわかってるんだから」

ライナはその意味がわからなかった。

「どういう意味だ、それ……」

ミフィアは一息置いてから話し出す。

「胎児の時、僕には声が聞こえた……母親を喰らえと」

「！？」

「つまり最初からそうするようにできてるんだろ？ だったら結局人を殺すために生まれたんだろ……はあ。そんなの託されても困るだけだよねえ？ なーに考えてんだろ」

「……で、喰ったのか……？」

「いいや？ やってないよ？ やってなんになんのさ。」

暗かった雰囲気少し明るくなった気がした。

いや、一気に全てが変わる。  
暗かった雰囲気がウソみたいに消えて。  
ミフィアは笑顔で聞いてくる。

「んでなんで此処に来たの？」  
「笑顔で言うことじゃないだろそれ……」

さっきまでの雰囲気が急に変わったので、ライナはちょっとのりきれしていない。  
なので引きつった笑顔が無駄に変わった。

「なんで？」  
「いやさ、さっきまでシリアスだったのに不自然だろ」  
「それって馬車置き場に馬車、馬車、馬車、箒、馬車みたいな？」  
「なんだそのたとえ……」  
「魔女が乗ってたほーき！って感じ。いや、此処で魔女がいるってことが証明されるとは」  
「何故箒で魔女……」  
「子供を崩してはいかんよ、ライナクン。フオフオフオ。」  
「って誰だよお前……」  
「ミフィアでーす」  
「答えんでいいわっ！」

そんなこんなで緊張がほぐれたところで。

「で？実際のところなんなの？」

ミフィアがようやく話に戻ってくる。

「……ん、ペットみたいよ？」

「ああ、やっぱおんなじかあ。他にあったり？」

「？ ないけど」

「ん、やっぱりね」

ライナの頭の上では？ マークが踊っていたりする。

何故わざわざそんなことを聞くのだろうか。

……という思考が、ライナの顔にありありと見えていたのを、ミフィアは少し苦笑いで見据える。

「はは。君ってほんと、わかりやすいなあ」

「……は？」

「顔に書いてあるよ？なんでんなこと聞くんだ？ って感じで」

「バレバレですか」

「そうだよ。まあ君はそんなバラしそうにないし、ばらされたって別に何も無いから教えるよ」

そうしてミフィアは語りだした。

「僕の瞳が魔法を吸う。それはわかったよね？」

「うん」

「まあそれは魔導学で言う精霊を吸ってるんだけど……それは余談だからまたあとで。

この牢屋つて檻に魔法の術式が張り巡らされてるよね？」

それでどんなに強力な凶悪犯だってこの牢獄から出ることはかなわない。

トイレのときだって看守が付いてるしね。

だから鍵がなかったらこの檻の外には出れない」

ミフィアは自分の部屋を指さす。そして何故か苦笑いになる。  
そして、こんなことを言う。

「でも僕の瞳はそれも吸っちゃうんだ。軍にはばれないようにしてるけど、もう何度も魔導罫<sup>マジック・トラップ</sup>を破ってるんだよ」

簡単に、言う。

それはとても驚異的で、奇妙なことだった。

彼の瞳は全ての魔法を吸収し、自分の力としてしまう。

だからそれと同様、全ての魔導罫<sup>マジック・トラップ</sup>も吸収してしまうのだ。

だとしたら……

「だとしたら何故檻の術式を破って外にでない……？ お前なら逃げ切れるだろ」

しかし彼は首をふって、

「可能とは言い切れないのさ。可能性が低いから出ない。あと僕は使えない奴と思われたいから。まあそれは一番の理由じゃないけど。一つは君と同じ感じだよ」

なんて言う。

ライナは戸惑う。そんなこと話してないからだ。  
というよりも話したくない。恥ずかしいし……

でもミフィア<sup>ミフィア</sup>は全て知っているかのような言い方をするのだ。  
さっきだって、顔に書いてあると言っていたが、ライナはそこま  
でわかりやすい人間ではない。

彼は人を騙す術を師匠のジェルメによって伝授されているのだ。  
それによって顔から読み取るのは難しいと言えるだろう。

すくなくとも今は……

ミフィアは言う。

「僕は観察力が高いんだってさ。だからよっぽどの無表情じゃない  
なら読めるんだ。」

また心の中を読まれてしまった……  
流石に此処まで来れば信じるしかない。

「ふうん……ならお前も昼寝してたいって？」

「そっちじゃないのだよ。ま、たしかに此処は昼寝三昧で三食昼寝付きのとこだけど！ そう考えれば幸せだよねえ」

「おう！ その通りだ！ まさかこんなとこに同志がいたとは」  
「だね！ ……ってちがう！」

ライナは何が違うのさ」と呟いてばけぼけしていたが、ミフィアは対照的にしゃきつとしていた。

なんか同じ昼寝好きなのだとは思えない。

ミフィアは軽く空咳をしてから話を強引に元に戻す。

「そんなに言いたくないならいいよ……心ではわかってるだろうし。じゃあもうひとつの、言うよ？」

僕が本当に術式を破れるか実験されてるんだ。

破れたら破れたで次の実験へ。

できないなら用なしなので取り敢えず入れとこうか、ってところかなだから出ようともしわない」

それにライナは半ば呆れたように、

「お前さ、なんでんなこと知ってたよ。普通軍は本人の前では話さねえだろうが。それともまた『読みとった』？」

ミフィアは頭<sup>かぶり</sup>を振った。

「違うよ。見たんだ」

「はあ？　だから本人の前では話さないって」

だが彼はそれを遮って、

「僕はどんなところでもどこでも見えるんだ。普通のところなら。

<sup>ロラント</sup>

……この国の狂った実験でね。これは百人やったら百人死ぬ実験さ。だけど僕は死ななかった。何故だかはわからないけど。

でも体には異変が無かったからなんの効果もないとされたんだ。全結界って成功しても代償として目が見えなくなったり耳が聞こえなくなったりするでしょ？

これは全結界と似てっから代償が無いのはおかしいんだよ。だから軍にばれずにいるんだけど。」

ライナはやっぱり呆れたように言う。

「お前ほんとどこのチート野郎だよ……」

本物なのだから仕方がない。

まあそんなこんなで仲良し（昼寝同志）となった二人はとりあえず看守に疑われないように動いた。

まずライナは自室（？）に戻り、ミフィアは鍵をかけ直す。

そして伸びてる隠成師たちを担いで出口まで行き、看守たちを起こさないように外に出て、森のなかにぽいと捨てる。

そのあと服の袖で鍵の指紋をふき取る。

なんかこれじゃ牢獄にいるということもあり、どっかの犯罪者みたいだが……

別に彼は気にしない。（実際この世界で指紋が鑑定できるかは不明だが、わずかに残っている前世の記憶からやった方がいいかもと思ったようだ）

後は戻って看守たちを待つだけ。

こうして彼（ら）は証拠を隠滅し、後で来た看守に「来たけどさ、つまんないから帰るとか言って帰った！ んでもって暇だからライナと話してたんだよ」などと言い、普通の日々に戻って行った……

それでライナに「お前本当に犯罪者じゃないの？」と言われたのは、また別の話である。

#### 第四話 明かされる過去と闇と光（後書き）

ええと…

すいません。めちゃくちゃです…

うう。

でもまあとりあえず特殊能力の一つ目が出てきましたね。  
もともとなかったハズのものが先にでてしまうとは…！  
どうなってるんだー！

…はい、ごめんなさい…

また変なのになったので主人公の基本的なプロフィールでも載せましょうか。

ミフィア・レル＝エフィリア

今は十七。ライナと同じ歳。

称号は『凄まじき才能を持つ者』（エフィリア）

濃紺の黒髪に水鏡色の瞳。

『殲滅眼』（イーノ・ドゥーエ）保持者。

詳しくはいずれか書きます。

あと、次は番外編になりそうです。

それでは…

## 番外編 『rain』の日は（前書き）

番外編です！

自分的にはちよつと微妙な今回。

本当に大丈夫なのはわかりませんが…

楽しんでもらえたら幸いです。

ちよつと出るかもですけど、これはそんなに物語に関与してないハズなので見なくても大丈夫です。（多分）

余談。

書いては消えたやつなので内容暗記してしまった！

…それではどうぞ！（スルーした！）

番外編 『rain』の日は

今日は雨の日。

それは窓が無く、月日がわからない此処でもわかった。

長い年月のうちに伸びていた髪がわずかにも湿っているからだ。  
看守は「湿っぽい日は好きじゃないな」なんていつていたりするし。

彼はそんな日はのんびりしていた。

彼と言うのはもちろん、ミフィアである。

何故のんびりしているのかと言うと、動くときと湿っている長い髪が触れて、いらいらするから。

だが今日の彼はそんなことも気にならないほど暇だった。

ライナはせっせとレポートを書いていてつまらないし、看守も愛妻弁当を嬉しそうな顔でパクついている。

だから彼はうーむと一つ唸って、

何かを思いついた。

夢の中で見たもの。

それを描けば気がまぎれるのではないか？

思いついたら即実行。

雨の日は人の気分を変える。

なので彼は看守に言う。

「看守さん、紙とペン下さい」

貰ってから彼は何かを書き出す。

それはライナのようなレポートじゃない。

この世界にある小説でもない。

それは……

それは紛れもなく、『漫画』だった。

彼は夢の中で前世の記憶を見る。

この情報はそれで見つけたのだ。

……漫画の記憶を見て、それを描こうなんて考えることは、まだ大事な記憶は見えてないようだが……

ちなみに内容はこんなものである。

主人公・エペは雨が好きな魔導オタク。

そんな彼はローランドの魔法・『崩雨<sup>みすみ</sup>』を日々研究し、改良していった。

そしてついに彼は雨を降らす魔法を創りだすことに成功する。

しかし毎日発動していたせいでローランドは食料危機に見舞われてしまう。

初めは他人なんてどうでもいいと考えていた彼だが、周りの人の

説得により魔法の発動を止めた。

こうして彼は償いのために日々役にたつ魔法を創りだすようになった――

……というお話。

タイトルは『rain』……雨だった。

もちろんフィクションである。

そもそも魔法を創るなんて学者でもないのに、できるはずがない。いたとしてもよっぽどの天才でなければありえない。

それに国全てに雨を降らすなんて大規模魔法でも出来ないだろう。しかも周りの人によって改心するなんて話は、元の世界ではありがちだった。

だが看守に読み方を教えて読ませたところ、

「い、いい話じゃないか〜！」

なんて絶賛された。

そしてなんか本を出すことになってしまった。

理由はこの世界ではありがちではなく、いい話と認識されること。

……だけではない。

この牢獄で、看守の唯一の友達、ライナも面白いと言ったからだ。

なので売ろうなんて案が出てしまった。

ミフィアは呆れたような顔をして、「無い無い。第二王が許すわけじゃないよね？」といったが、看守は無言で走り出す。

看守が帰ってきたのは数分後だった。

その時の看守は何故か嬉しそうな顔をしていた。

……嫌な予感がする。

看守が弾むような声で言う。

「許可取れた！」

瞬間、ミフィアは。

「嘘おおおおお！？」

衝撃の顔で叫んだ。

結果を言うと、本はバカ売れだった。

本屋では「次世代の話題作！ あらたな本がここに誕生する」と帯に書かれていることで注目が集まり売れたようだ。

中身もこの世界ではウケがよく、次の話が期待される。そんなことを考えてもいなかったミフィアはとりあえず、「気が向いたら描く」とコメントした。

だが趣味なのでバンバン描いており、もう少しで一冊完成するとこまで来ていたり。

どうやら次の話はすぐに出そうだった。

おまけ

ライナのレポートとミフィアの漫画で使用される紙。

二人ともよく描く（書く）ので、現在看守は新たな紙たちが来るまで報告書を書けないらしい。

紙が不足しているようだ。

もうひとつおまけ

次の話のタイトルは『cross』らしい。

何故そんなタイトルに走るのだろうか…

それは本人にもわかっていないことらしい。

ちなみに。

漫画の絵がうまい理由は普通に前世で才能があつたからである。

『エフィリア凄まじき才能を持つ者』は関与してなかった。

## 番外編 『rain』の日は（後書き）

さて、番外編、いかがでしたか？

番外編なので短めです。（でも私的には長いです（汗））

今回あまり面白いかどうかは自信ないので、あまりにも不自然だよゝってのがあつたら教えてください。

次はようやく前世のことに触れるかな？ってところになるはずです。

これまでぜんっぜん転生したってことがわかんない話だったので流石にやばいなあ、と思つて。

…まあ、元から考えていたことですが！

あー、話変わりますけれど、早く外伝書きたいなあゝって思つてます。

まだ六個しか書いていないのに！

まあそれは欠片を失つたゝの方が進むにつれて書く話なのでそこまです更新しない予定ですがね。（でもはじめの方は多いかもです）

始める時は連絡します

あ、誤字脱字などがあつたら教えてください！

## 第五話 夢に沈む記憶（前書き）

第五話です！

あー、ついに第五話までいきましたか。

活動報告でも書きましたが、アクセス数が五千、ユニークが千を越えましたし、結構順調です。

これは書いてませんが、お気に入り登録数も二十ですよ！

これも皆さんのお陰です！

有難うございます！

では！本編どうぞ！

## 第五話 夢に沈む記憶

そこは真つ白で、何も無い所だった。

見たことも無い世界。それは異世界という言葉を想像させる。

けど、何処か変だった。

いや、変と言える所はいくらでもあるのだが、自分が感じた『見たことも無い世界』というのに何故か違和感を覚える。

不思議だった。

来たはずのない所なのに、一度来たような気がしてならないのだ。

彼——、ミフィアは周りを見渡す。

やはり周りは真つ白な空間。だが不思議とそれには違和感を感じなかった。

懐かしい気がわずかにした。

自分がいた牢獄とは明らかに違うこの場所で、冷静でいる自分に驚きながら、何処か心地よい気分を味わっていた。

前にもそれを感じたことがあった。

こんな殺風景な所じゃない場所。

皆変な格好をして、長い蛇のような鉄の固まりにのって移動したり、七、八割がガラスで構成されたでかい建物に入っっていたりする、此処ぐらい不思議な世界。

皆が笑って、暗い顔をしている人なんてその半分にも満たない世

界。

少なくとも、ローランドなんかより笑顔が多い所だ。  
それは夢だった。

よく見る夢。

何度も見る、夢。

何故見るのかはわからなかった。

でも、それでもこの夢を見るのは嫌いではなかった。  
そしてそれは此処でも同じのようだった。

彼は独り、呟く。

「……此処は、なんだ……？」

誰もいないはずの世界で呟く。

……すると、

> 此処は現<sup>うつ</sup>と虚<sup>うつ</sup>ろの狭間。 輪廻転生を司りし《世界》。 <

いないはずなのに、声が響く。

いや、墮<sup>ふ</sup>つてくる。

まるで自分が胎児のときに墮<sup>ふ</sup>つてきた声のように――

声は違う。

だけど緊張せずにはいらなかった。

そこでまた、声が頭の中に墮つてきた。

<緊張する必要は無いですよ。私は貴方と逢った、それだけだから>

瞬間、ミフィアは、

「……緊張せずに、いられるか。ようやく『アルファ・ステイグマ複写眼』の手掛かりらしきものに出会えたんだから」

声に向かって言っていた。

すると、一人の少女が上から降ってくる。

わずかに波打つ水鏡色の髪に吸い込まれそうな紫の瞳。

そして整った顔つき。

神々しい、という言葉が似合う美少女だった。

少女は何故か溜め息をつき、

>……前は話し方のギャップとか言っていましたのに……転生して記憶がないと変わるものですね<

なんて言う。

もちろんミフィアにはわからないのも事実だが、転生前の彼を知

っている者がこの場にいれば、その通りとしか言いようがないのも事実だった。

「……？ 何の話を……」

首を傾げるミフィア。

それに少女……《神姫》は呆れたといった表情でなんでもありません、と言う。

そしてエルファは言う。  
堕つてくるような声ではなく、普通の声で。

「それと貴方の眼は『アルファ・ステイグマ複写眼』じゃないですね」

とんでもないことをあつさり言った。  
少なくとも、彼にとってはとんでもないことを。  
いきなり&驚きでうまく言葉がでないミフィアを見据え、エルファは続ける。

「貴方の眼は『イノ・タワー殲滅眼』という眼です。空气中や魔法、人間の中にある精霊を喰らってそれを自分の力に還元できる、『魔眼』です」  
「……魔眼……？」

「そう、『魔眼』。しかも貴方のは特別みたいです」

ミフィアはピクツと反応する。

「五芒星じゃなく十字架というところ？」

しかしエルファは首を振って否定する。

「それは『複写眼』と『殲滅眼』の違いがわかる要素の一つのようなものですから。貴方の眼は他の『殲滅眼』とも違うのです。」

「……ん。つまり、南大陸ではあまり無い眼の中でも特殊な眼を持つてるのが僕、ということか」

「かなりわかりにくいまとめ方ですね……まあ理解したならいいでしょう。じゃ、いいですよ？」

ミフィアは頷く。

「普通の『殲滅眼』<sup>イーノ・ドゥーエ</sup>は常に空気中の精霊を喰らっているので、うまく魔法が発動出来ないのですよ。」

でも貴方の『殲滅眼』<sup>イーノ・ドゥーエ</sup>はその機能のON、OFFが可能なのです」

「へえ。だから僕は魔法が使えるのか……さっきの説明を聞いて疑問に思ったけど、筋が通った」

「あと、貴方は魔法以外のものはある程度生み出せる……まあそれはまた後で。」

魔法について言っときましょう」

……魔法？

僕は魔法については結構理解しているはずだが……  
何を言うのか。

ミフィアの頭の上に？が出現したところで新たな話がはじまる。

「この世界では貴方しか使えない魔法がある。使い方は念じるだけです。

魔法の記憶については思いださせそうだから……

……『天よ、この者の記憶を蘇らせたまえ』……」

彼女が呟くように言うと、ミフィアの周りに光が漂い始め、小さい一つが弾ける。

すると弾けた光から水色の欠片が零れ落ち、消える。

……と、思ったら急になにか……ある魔法の知識が思考の中に生まれて。

いや、生まれるという表現はまちがっている。思い出した、の方が適切だと彼は理解した。

本来は知らないものなのだ。なのに、もともと知っていたような感じがする。

ミフィアはそれについては意味がわからなかった。

少女に問おうとすると、彼女は考えを読んでいたかのように、

「大丈夫。今は知らないことなのです。そして私は教えてはならないもの……それが天との契約だから。さて、もう時間は無いですね。

では、最後に伝えときましようか」  
「ちよっ……何を言っ……」

しかし彼女は聞かない。

「貴方には私がついてます。だから……いざという時は私を呼んで助けるから。」

だからどうか……この、残酷な世界を救う勇者となって」

「だから何を言っ——」

「また逢いましょう、蜜葉」

少女が言った瞬間、世界がドロドロと溶けるように消えていく。  
夢が終わりを告げる。

ミフィアはそれを寂しく思った。

その理由はわかり様が無いが、ともかく寂しく思った。

彼は手を伸ばそうとして——、

……しかし意識が途絶えた。

「……また、逢いましょう。『刻の破壊者』……」

エルファは寂しげに呟いた。

\* ・ \* ・ \*

「ん……」

薄暗い牢屋のベッドの上で、

ミフィアは目を覚ました。

体を起こして周りを見回すと、そこはいつもの牢獄。

やはり、あれは夢だったのか。

けど、

「夢じゃ……ないような……」

そう。現実起こったことだと考えてしまう。

『貴方には私がついてます。だから……いざという時は私を呼んで助けるから』

少女が言った言葉。

「……」

彼は心に受け止め、いつも通りに伸びびをして、

……そしてわずかに笑顔をこぼした。

## 第五話 夢に沈む記憶（後書き）

はい、ようやく主人公の眼が殲滅眼ということができてきましたね。

ま、実際後書きの方では出てきた回から殲滅眼って言っていました。ええと、次は…ついにメインキャラが揃う回となるのかな？

ここまでくるまで結構長かった感じがします…

んゝ、とりあえずエルファさんがまた出てこれたんで、外伝も始動するかもです。

連絡しますのでよろしくです。

あ、オリジナルの話もやる可能性があるので…

活動報告覗いとくとわかりやすいと思いますね。

んと、誤字、脱字、 変な所があったら教え下さい！

## 第六話 転生者と英雄は出会う（前書き）

六話です！

ふあゝ、今日一日をほとんど使って書き上げた回です。  
長い！とにかく長いです。

原作の話セリフを主に使っていて、主人公のセリフは少ないのですが。

あともう一つの特異能力が出てきました。  
ようやく！です。

話もようやくそっちに入るのかゝって感じですが、長いですがどうぞ～

## 第六話 転生者と英雄は出会う

ガチャ、と扉が開く音がする。

深夜に何者かがこの牢獄に入ってきたのだ。

足音から、何者かは一人ということがわかる。

看守は昼間しか此処にはこない。

ならこんなところに来るモノ好きは一体、何者なんだろうか？

その何者かは足音を響かせながら、ある部屋の前で立ち止まる。

そこは汚い部屋だった。

狭い空間に所せましと本が並べられており、人らしき影は見当たらない。

だがそこに、彼は立ち止まる。

——と、ろうそくのわずかな光に照らされ、彼の銀髪が暗闇の中に浮かび上がった。

彼はしゃがみ、檻の中に手をのばす。

鉄さびで汚れた柵に服が触れ、見る人が見ればとんでもなく高級なその服が汚れるのも気にせず、中に散乱している書類の一束をつかみ取った。

銀髪に高級な服。それを着ている高貴な身分の男性……

その条件に当てはまる者は——

彼は檻のむこう側に向かって、感慨深げに呟く。

誰もいないようなところに向かって。

「……なるほどね」

彼は汚い文字で書き連ねてある書類を持ち替える。

「これがお前の選んだ道か」

お前……と、彼は言った。

人がいるような感じがしない、その、空間に向かって。  
だが彼は話しかける。

まるで誰かがそこにいるかのように。

「……こんなところでいつまでも昼寝できると思ったら大間違いだぞ……こっちは苦労してきたっていうのに……お前だけこんなところで楽してるなんて俺は許さない。俺だけが悩むなんてのは許さない。お前は俺のもんだ。俺はお前を使うぞ」

彼は再び、にやりと笑って、

「たとえば、お前が望まなくてもな」

言った。

「……」

返事は帰ってこないがそれでも彼は満足そうに頷き、  
そしてその隣の部屋を見つめる。

紙はあるものの、本まみれの部屋よりは遥かに綺麗だった。  
そこにはベットにもぐりこんでいる青年の姿があつて。  
彼はまた、にやりと笑う。

「……そうだな、君にも手伝ってもらおうか……」

そう言つて、書類を手に持ったまま去つて行つた。  
檻の中の大量の本と紙、それと彼らを残して――

\*  
・  
\*  
・  
\*

何者かが現れた夜の翌日、

「ん……ふあああ」

ミフィアは大きく欠伸をして、体を起こしていた。

看守が朝ごはんを運んでくるまでまだだいぶ時間がある。

ライナもそうだが、この長い牢獄ライフによって培った体内時計により、朝ごはんがいつごろ来るかは正確にわかるようになっていくのだ。

ちなみに彼は此処に来て四年、ライナは二年が経っている。

余談だが、ミフィアは四年経ったというのに、「まだ十六ヶ月しか経ってないかな？」なんてことを言っており、あの『隠成師事件』ら辺でライナが来てから何ヶ月と聞いたところ、「二か月」との返答が返ってきた。

本当は半年が過ぎていたところである。

計算したところ、彼の体内時計は一年を四ヶ月と勘違いしていることが判明した。

……というのは、とりあえずほっとこう。

暇なので、もう少しで完成しそうな漫画の新作を描き始める。

……そうしてどれほどの時間が経っただろうか。

彼の漫画（短編）が完成してまもなく、切羽詰まった男の声が聞こえた。

しかしそれはよくあることなので彼は動じない。  
そして。

「うわあああ！？」

叫び声が聞こえたと思うと、何かが崩れる音がした。  
ミフィアは耳を塞ぎ、はあっとため息をつく。  
すると、壁のむこう側から声が聞こえてくる。  
というかそれは、明らかにこちらに向けたもので。

「てめえ、ミフィア！あんなうめき声出してたのに声もかけないのか？大丈夫か、とかさ」

声……ライナの発言に、やはり彼はため息をつき、

「自業自得だろ？もう慣れてどうも思わないってただだよ」

ちょっと冷たく言う。

ライナはその言葉に、

「……むう」

言葉もなかった。

確かに自業自得だからだ。——と、ぐうううとミフィアの腹から音が鳴る。

「あゝ、腹減ったなあ。もうすぐかな？」

ミフィアは言う。

ライナは、

「今日はなにかなあ……昨日のもまずかったけど、それを越えるま  
ずさだとしたら、ちょっと楽しみだな……」

「ん、たしかに。微妙に楽……って違うだろ。」

ミフィアは多少つられそうになるものの、なんとか突っ込む。  
なんてちよつとアホらしいことをしていると、足音がしてくる。  
朝ごはんを持ってきてくれる、看守の足音だ。

「おっさんおはよう！」

ライナが元気よく、だがいつも通り眠そうな声を上げる。  
いつもなら看守は返事を返すはずだった。

……しかし、返事は返ってこない。

ミフィアが少し心配になって檻の外を見てみると。  
看守は暗い顔をしてゆっくりと歩いていていた。

ライナも心配になったのか、

「おーい？おっさん？どうした？やけに元気がないな？さてはまた

奥さんと喧嘩したか？」

なんて言う。

だが看守は無言。

ライナも廊下をのぞきこむ。

「なんなんだ？」

ライナが呟くと、

「どうしたんですか？」

とミフィアが看守に尋ねる。

やはり無言。

やがて二人の部屋の中間あたりで立ち止り、目を合わそうともしない。

看守はご飯を持ってきていなかった。

つまりはそういうこと。

人の感情を探ることが得意な彼はすぐに看守が考えていることがわかった。

どうせなら彼の好きにさせてやろう、とミフィアは看守が話すまで声を出さないことを決意する。

「……」

看守は黙ったまま。

「……………」

ライナも黙ったまま。

「……………」

ミフィアも黙ったまま。  
そのまま数分。  
ライナが、

「……………」ふあゝ眠くなってきたな……」

なんて言ったとき、

「……………」ああもう!？」

看守は沈黙競争を断ち切った。  
それからなんかいつも通りのくだらないライナと看守の会話が続く。

だが……

看守は暗い顔になる。

こちらもちらりと見て、それから目をそらし……

「……………言いにくいんだが……………」

言葉を止める。

ライナはようやくそれで気付いたようだった。

「そっか。気にすんな。言わなくてもいいよ」

看守はまた黙ったまま。

「あれだろ？ 死刑が決まったんだろ？ 俺の」

ライナはいつも通りの眠そうなかんじで言う。

看守は言いづらそうに、

「……………あの…ミフィアも、なんだが……………」

小さな声で言う。

それもミフィアにはわかっていたことだった。

「あー、うん。僕もわかってたから、気にしないで。」

タメ口だった。

最後だからという感じだった。

それからライナは看守に色々聞いていく。

逃げてもいいか？ と。

このレポートは持って行っていいか？ と。

だがもちろん、そんなものだめだ。

看守はやはり言わずらそうだった。

看守の話によると、死刑は明日だという。

ライナは強い。だから王の部下なんて振り切って、逃げようと考  
えているだろう。

幼馴染と死なないと約束しているらしいから。

ミフィアは別に心残りはない。ただ……あるとしたら、夢の中で  
みた、あの美少女だ。

少女はまた逢おうと言っていた。

また逢おうの後は聞こえなかったが、彼に向けてのものだったの  
は違いない。

彼女は淋しげだった。

だからきつと、彼と会うのを楽しみにしているのだろう。  
なのでライナと一緒に逃亡でもするか、と、考えていた。

こうしてあつという間に贅沢な一日が過ぎ、

……死刑の日がやってきた。

ライナは絶好の死刑日よりだな、なんていう。  
看守はまた暗い顔になるが、別に死ぬ気はないので「気にするな」と言っておいた。

とりあえず、体を整え始める。

ライナも同じことをし始め、そしてまた時間が過ぎる。

そういえば、二人とも戦闘服を支給されていた。

その意図はわからないが、有りがたくもらつとこうと着込んでいる。

ライナのはローランド帝国の魔法騎士団のみに支給される特殊な戦闘服。

ミフィアのは子供の時によく来ていた黒い戦闘用のローブに似た、黒いローブ。

それら二つには魔法処置がされており、どちらも頑丈だった。

あと小さなころにためしてみたのだが、少女が言う……『イノ・ドゥーエ穢滅眼』  
だったか？を使ってみても、術式は消えなかった。

多分そのころは無意識に適度に瞳の力を制御をしていたのだろう。  
まあそんなこんなで王直属の部下とやらが待つところへやってきたわけだが。

そこに待ち受けていたのは――

……絶世の美女だった。

夢に出てきた少女にも負けずと劣らない美貌を持つ、金髪の女。  
看守は思わず、

「女一人……？それもとんでもなく美人……」

……そう呟いていた。

美女はライナとミフィアを無表情で見据え、

「ん。その間抜けづらがライナで、長つたらしいチョコレート巻いてるのがミフィアとかいう犯罪者たちか？」

平坦な声で聞いてくる。

ミフィアはそれに目を瞠る。

美貌に驚く、ということではない。

女の無表情に驚いたのだ。

（この女、感情が無い——？）

そう。まったく感情というものが見当たらない。

わずかには感じるから完全にはないわけではないのだろうが、それでも彼女の感情を読むのは難しそうだった。

観察力がずば抜けて高い彼でも、だ。

女が言う。

「じくろつだった。あとは私がやろつ。帰っていいぞ」

昨日からついてきていた男三人が反応する。

「え、つといや、でも、女性一人に、そんな危険な仕事を押し付けるわけには……」

が。

「言いなおそう。消えろ」

女は容赦なかった……

男三人が消え、看守もライナと会話を交わして去ったあと……

ミフィアは女と対峙する。

ライナは女に向かって、

「や。美人さん」

言うと何故か、

「なんだ色情狂」

とかえされた。

それにライナどころかミフィアも、

「「へ?.....」」

間抜けな声を上げていた。

それはライナに向けてだが、ちよつと驚いてミフィアも言っ  
てしまったのだ。

しばらく沈黙。

それから気を取り直して、  
ライナが尋ねる。

「……その、なんだ。できれば、なんで俺が色情狂なのか、聞かせ  
てもらいたいんだけど.....?」

女は当然とばかりに、こう返す。

「顔だな」

瞬間、

「はあ!??」

ライナは叫ぶ。  
女は続ける。

「それに経歴もだ。すでにおまえのことは聞いている」

「ってちよつと待て。いったいそれはどういう経歴なんだよ？」

「お前が知る必要はない」

ばつさりと言われた。

ライナが違う意味で圧倒されているとき、ミフィアはあく、成程となんか納得していた。

彼は思い出していたのだ。

ライナが話していた、銀髪悪魔のことを。

しかしそう言ってる間にも話は進む。

思考の途中に、ライナの声が響いた。

「俺、悪いんだけどここで逃げさせてもらっわ」

そして一瞬で構築された魔法陣。

ミフィアも戦闘態勢に入る。

するとライナが魔法を詠唱し始める。

「求めるは雷鳴>>>……」

女は無表情で見据え、呟いた。

「ほう。この私と殺る気か」

ライナは無視して呪文を言いきる。

稲光<sup>いじち</sup>

瞬間、轟音とともに激しい稲妻が放たれ――

――なかつた。

女は消えた、と思うと、ライナの魔法陣を斬り裂き、感電する前に剣から雷撃を放つ。

ライナは体をひねってなんとか避けるが、元いた場所は大きくえぐり取られ……

「まじか……」

そんな光景を木の上からずっと見ていながら、ミフィアは思わず声を漏らしていた。

女の動き。見えなくはなかったが、凄まじい速度<sup>スピード</sup>だった。と、ライナがこちらに向かって叫んだ。

「おいミフィア！お前も手伝えよっ」

……まあ、たしかにこれはきつそうだ。

だから彼は木の上から飛び降り、着地する。

彼も訓練はされているので力を使わなくとも強いが、一応。保険というような感じで頼んでみる。

「ん、ライナ、魔法撃つてくんね？」

「はあ！？……って、そうだった……わかった」

ライナは『稲光<sup>いひち</sup>』を撃ってくる。

それに女は、

「ん……？ 仲間割れか？ 男同士、女をめぐって戦うのか」

なんてズレたことを言う。

だがもちろん、そんなものではない。

轟音とともに、今度こそ稲妻が放たれた。  
そして彼は、瞳の力を解放する。

『力を喰らいー』

稲妻が、消える。

ミフィアが吸収したのだ。

女は相変わらずの無表情。

それをちらりと横目で見て、

彼は、呟く。

『——それを放つ』

刹那、彼の体が消えた。

女はやはり無表情——に見えるが、彼の目はわずかに驚いているのをとらえた。

その間にもライナは加速の魔法を唱えている。

ミフィアは木と木の間を縫うようにしてどんどん上の方へ登っていき、ある能力を使う。

この状態では魔法は使えない。自らの魔法を吸収してしまうから。

かといって解除すると喰らった意味が無い。OFFにすると喰らった精霊が霧散して消えてしまう。

実は贅沢な一日の中で、一度ライナに協力してもらって実験していたのだ。

なので少女が言ってた『ある程度のものは生み出せる』を実行する。

（念じれば、できる）

出したいものをイメージし、念じる。

瞬間、何かが出てきているような、そんな感覚に襲われる。

そして現れたのは……

水鏡色の、双剣。

彼は訓練されていたとき、双剣を武器として訓練に励んでいた。なのでそれは得意な武器なのだ。

そしてこの世界ではあまり使われていない武器でもある。

彼は双剣を手に、跳んだ。

とんでもない速さで剣を振り下ろす。

女は結構余裕のある顔で避ける。

まあそれも当然だ。全力を出せない彼の速さだ。

先ほどまで魔法で加速したはずのライナに追いついていた彼女な

ら、難なく避けるだろう。  
全力を出せば勝てるだろうが……  
それでは殺しかねない。

求めるは水雲>>>・崩雨<sup>みすみ</sup>！

隙ができたところでライナが魔法を放つ。  
魔法陣の中心に、圧縮された液体が集まり、それが弾け、激流と  
なつて女に襲いかかる。

しかし……

女は地面に剣を突き立て、それを軸に体を跳ね上げると空中を舞  
い……

水しぶきを避ける。

そのままくると宙返りをし、ライナの懷に飛び込んでくる。  
ライナは尻もちをつき、女はそこで剣を首筋に突き付け……

「ん。これで終わりだな。そっちのも仲間が人質にとられているの  
だ。あきらめろ」

言われてしまった。

「……ああ、うん」

ミフィアは手を上げて降参した。  
ライナも同じく。  
と、女が聞いてくる。

「お前ら今、手加減したな」

ライナは、

「へ、なんでそう思う？」

言う。女はそれに答える。

「さっきの魔法……水じゃなくて広範囲攻撃できる系統の、炎術魔法を使っていれば、私をとらえることができる可能性があったはずだ。おまえくらいの動きができるものなら、とっさに判断がついただろう。それにそこのお前、完全に全力を出していないといった感じだったが……なぜそうしなかった？」

的確なことをきっちり言われた。  
その通りである。

ライナは、

「うーん、そしたらお前死んじやうかもしれないじゃあないか。それに、綺麗な顔をヤケドさせるのもなんか悪いしなあ……」

ミフィアは、

「ヤケドじゃないけど似たような感じがな。」

という。

女は頷き、

「ふむ。なるほどな。私の、世界が崩壊するほどの美人っぷりに、色情狂のお前としては、戦闘中によからぬことばかりが頭にむぐつて適正な判断がくだせなかったと……そういうことだな」

真顔でライナの方をむいて言いきってくる。

どうやら色情狂の話にはミフィアは入っていないらしい。  
一方ライナは。

「……………は？　世界が崩壊……………？　って……」

言葉を微妙に失っていたようだ。  
女はそれを無視し、

「立て。さあもういくぞ。王が待ってる」

「って、いくぞって言われて素直に行く死刑囚はいないと思うよ?」

ミフィアはちょっと言葉を失っているライナのかわりに答える。  
だが女は、

「こないならなくていい。ただ、お前らはひどく後悔することになるだろう」

なんて後味の悪い言葉をかけ、さっさと行ってしまふ。

二人はただ啞然とするばかり。

その後二人は悩みに悩んだあげく、

「……ちよつと待つてつて! それ卑怯だよ!？」

「そんなの言われたら逃げるに逃げられないだろう」

叫んだ

女は振りかえり、

「後悔は後悔だ。眠そうな男、おまえがこのまま逃げるといふなら、王からすでに聞いているお前の恥ずかしい経歴を世間にばらす」

「……恥ずかしい経歴?なんだそりゃ?俺は別段、誰かに聞かれて恥ずかしいようなことをした覚えが……」

そこで女の、小馬鹿にしたような笑い声が遮る。

「ふふ。そうかな？ 六歳にして年増好き。マダムキラーというのが、恥ずかしくない過去だとお前が言うのならそうだろう。さあいくぞ。あとはお前が決める」

ライナはそう言っただけでさっさと行ってしまふ女を見て、ただ茫然としていた。

ミフィアは「ああやっぱりか……」と呟いていて……  
ライナは気が付いた。  
あの悪魔が王ということを……

「ちょ、ちょっと待てよ！」

ライナは女の後を追ひ、走って行った。  
ミフィアはそんなライナを見据え、

「はあ……まあ、王様がそれならついて行ってもいいか。」

彼もライナに続いた。

\*  
・  
\*  
・  
\*

此処はとんでもなく広い部屋だった。

高い天井に、きらびやかな装飾が多く施された壁。

それでもこの国で一番お金がかかっている場所の一部だ。  
此処は王が住まう場所。

王宮だった。

そこで声がかかる。

「きたな。ようこそライナとミフィア。我が宮廷へ」

声は玉座からかかっていた。

高貴さを感じる銀髪に、意志の強そうな金色の目。

確かその容姿の人間については、ライナから聞いていた。

シオン・アスタール。

かつてライナに『ついてこい』と言った人物であり、王となってこの国を変えると saying っていた青年。

ライナにとっては悪魔で、国民にとっては英雄。牢獄の中で実験でもらった力を使い、国を見たところ民がみんなそう saying っていた。

そして彼はライナの知り合い。

つまり死刑はなし……ということ。

「……なんか俺疲れたから、今日は寝るわ。おやすみ」

ライナがそう saying 言って寝つ転がった。

そのあとはミフィアに関係ないので省略するが、

……その後、関係のある話がでてきた。

シオンがライナの書いたレポートを気に言っ た という話。

一見、彼には関係がないような話だが。

ぼーっとしていたミフィアの頭の中に、声が届く。

「しかしライナだけじゃ、なまけそう で心配だし……そこで、フェリスとミフィアにはライナの補佐役として saying いてもらいたい」

そんな、声が。  
もちろん二人とも抗議する。  
そして彼も……

「何故僕まで行かなければならないのですか？」

抗議の視線を送る。  
するとシオンは苦笑し、

「いや、だって君は強いだろう？ だから君と二人を一緒に旅させたらおもしろそ、」

ミフィアは遮って、

「いくら王の頼みだからって了解はできないですよ。おもしろいで国は務まりますか？僕はなんかやるべきことがあるようなので。それを探さなければ」

だが今度はシオンが遮り、

「探すのなら旅をしていた方が逆にいいとおもっが？」

……言われてしまった。

めんどくさかったので抗議してたのだが、流石にこれを言われたら言い返せない。

ライナは団子屋を人質？にとられたフェリスによって気絶させられており、すでに外にいて、ミフィアを待っていた。

……というわけで、三人の『勇者の遺物』探しの旅が今、幕を開けたのだった。

## 第六話 転生者と英雄は出会う（後書き）

えゝ、

長いです。

七千文字越しました。

外伝とは大違いですね！

えー、魔法以外は能力でたのでそろそろキャラ紹介やろうかな…

主人公の主要武器も『双剣』決まったことですし。

えー、誤字脱字、変なところがあったら教えてください。

では！

## 第七話 急ぎ行く旅路

色々とバタバタしながら『勇者の遺物』を見つけに旅に出たミフィアたち一行。

金髪、無表情美人のフェリスが団子をあの王から救うのだ！と叫んだ日から、四日が過ぎた。

そろそろ国境というあたりで、ミフィアはあることをライナたちに言う。

彼にとつては「言い忘れていたけど別にそんな重要じゃないもの」だが、ライナたちにとつては爆弾と 言ってもいい発言を。

ミフィアはそういえば、なんて呟いてからライナたちに言う。

「僕はシオンさんから遺物探しはしなくていいって言われてるんだけど」

爆弾投下。

ライナ、フェリスは固まった。

そしてだんだん顔が怒りの形相へと変化する。（フェリスは無表情のままに見えたが、彼はちよっぴり わかるため、地獄を見た……）

ライナがあきらかに裏切り者ー！ と言わんばかりの雰囲気で、ミフィアを揺らす。

「てめえー！ ずるい！ なんかずるい！ お前はこっち側だと思

「つてたのにー!？」

なんか雰囲気から感じるのと似たことを言われた。  
フェリスは。

「……………」

無言で剣を抜き放そうと……

「つてちよい待ったあ!？ その怒りは僕にぶつけるものじゃない！ ほら、シオンさんにぶつけるべきものだよね!？ 僕君らの味方だから! ね、ね?」

今にも自分を斬ろうとしそうなフェリスをなんとかなだめ、彼らは道を進む。

ミフィアは内心、た、助かった…と胸をなでおろす。そして今後、その話題に触れないと決意したのだった……

そうこうしているうちに、ネルファとの国境の門に辿りつく。  
もちろんそこには兵たちがいて。

兵たちがミフィアたちをじーつと見つめ、なにか思案する顔を、ひとつ頷く。

そして、

「こいつらは忌破りだーッ！！ 魔法を放てえええ！！」  
「はああああー!?」

彼らは思わず、叫んでいた。

『忌破り』……それは王の許可なく国を越えようとするものたちのこと。

王の許可をもらわず国を出奔した者たちは『忌破り』追撃部隊に追われ、厳しく罰せられる。

何故そんなことをするのか。

それは、国の魔法の情報を漏らさせないためだ。

魔法は各国によって発動方法や構造など、まるで違う。

他国に魔法の情報を漏らすということは、国を崩壊にもたらすということなのだ。

……だが、彼らは違う。

ミフィアたちはローランドの王、シオン・アスタールの勅命によって此処まで来たのだ。

よって『忌破り』呼ばれるはずはない。

……はずなのだが。

「撃て撃て撃て———!」

兵たちは容赦なく魔法を撃ってくる。

わけもわからず避け続ける彼らだが。  
後ろにはネルファへと延びる道を遮る巨大な門がそびえたっている  
ので、後ろには逃げることはできない。  
そして周りには自分らを取り囲んでいる兵たち。  
ミファイアたちは追い詰められていた……  
まあ、人間とは思えないほど強い彼らはこんな事態なんか、もの  
ともしないが。

破滅的な稲妻の雨が降る中、彼らはのんきだった。  
フェリスは団子を頬張っていて、ライナは投げやりにもその場に横  
になろうとしている。

普通と言えるのは、ミファイア一人だけ。  
ちなみにミファイアも上の空だったり。

結局は此処に常識人なんて言葉は存在しなかった。

……と、ライナがフェリスに、

「もうまじでキレた！ 俺はもう帰る！！ んで寝る！ じゃあそ  
ういうことだから！」

そう言った。

しかも兵の元へと歩いていく。

自殺行為としか言いようの無い行動。

もちろん兵たちは戸惑う。

これが作戦だとしたら、完全に成功だろう。  
だが、ライナは本心から言っただけであり、騙す気などサラサラ  
ない。

だからちよつと勿体無い時間だった。

そんなときでも上の空のミフィアはなまじ顔が結構美形ということもあり、違う意味で勿体なかった。

フェリスは何も刺さってない串をそつと懷に仕舞い、ひとつ頷く。そして兵たちの方へ向って歩いていったライナと上の空のミフィアを見据え、

「よし。だんご休憩は終わりだ。さて」

剣を引き抜いた。

瞬間、

「「「あ……」」」

兵たちは、思わずそんな声をあげていた。

フェリスは華麗な動きで剣を振りかぶり、ライナをそれで叩き伏せていたのだ。

ライナには立ち上がる気力も無く。

兵たちはただ、戸惑うだけだった。

と、フェリスは剣を手に持ったまま鉄製の門へと向かう。

そして、

「ん」

彼女の姿が、霞んだ。

いや、消えた。

そう思った瞬間、音が響く。

ゴト、ゴトン！という音。

兵たちは慌てて見ると、

門が真つ二つになつていた……

側には満足気に頷き、剣を仕舞うフェリスの姿があつて。

門は鉄製の。

斬れるはずも無い。

だが、気持ちいいほどに真つ二つ。

兵たちはこんな門を見て、顔を青くした。

こんな人間離れた奴相手に、勝てるはずが無い……

絶対、殺される……

つか考えてみたらさっきの攻撃簡単にかわしてたし……

そう思ったのだろう。

そこでライナがボソリと……

「性格悪いし……うつ……まじでこんな奴と旅しなきゃならないなんて……」

瞬間、フェリスがライナを剣で殴る。

ライナがぎゃああああと吹っ飛んでいく中、ミフィアはいまだに上の空だった。

何を考えていたのかと言うと、

……あの少女のことだ。

夢の中の出来事とはいえ、とても重要なことのような気がする。念じれば魔法以外ならほぼ生み出せるというのも本当だったし。自分のことを、自分以上に知っているであろう少女。

とても珍しい、自分の目と同じ色をしている髪を持つ少女。

父は自分の目と同じ色をした髪と目で、それは『水鏡色』だと言っていたらしい。

実際あんま聞いた事のない色だ。

というか、初めて会った人たちには必ずと言ってもいいほど驚かれる。

つまりあんまない色ってことなんだろう。

……とそこで、ボロボロになったライナを引きずっているフェリスの声が思考を遮る。

「おい、ミフィア。突っ立ってないで行くぞ」

ミフィアは。

「……うん。そうだね」

曖昧に頷き、彼女らを追った。

\*  
・  
\*  
・  
\*

それから時と場所は変わって、ネルファの王立図書館前。  
そこにミフィアたちは来ていた。

「ふあゝ、おつき」

図書館とは思えないほど大きい建物を前に、ミフィアは感嘆の声を上げる。

ライナの目も輝いていた。

二人とも、この巨大な知識の泉を前に考えていることは同じのようだ。

他の人の目で見れば、新しいゲームが来るのが待ちきれない子供たちのような感じに映る。

だが、ミフィアは悲しそうな顔になる。  
それに気付いたライナが、声をかけた。

「？ なにかあったのか？」

「うゝ、僕が探してるのは絶対此処にはないんだよ……そもそも何すればいいのかわかんないし」

「それってさ、探すの不可能じゃないか？」

「うううう。でもさ、あの子は何かを伝えたいんだと思うんだ。  
だから諦めちゃダメなんだよ」

「あの子？ 幼馴染でもいんのか？」

「違……」

そこで、フェリスが遮って、

「何を話している。幼女誘拐の話か？」

「「違あうー！」」

だがフェリスは無視する。

「ん！ 私は騙されないぞ！ 貴様らは子供の話をしていた。そしてライナは、幼女誘拐、婦女暴行。マスター変質者だ。よって何かやらしい話でもしていたのだと予想する。して私は、スーパー美少女天使・フェリス・エリスちゃんだ。世界を害なす変態どもめ！このスーパー美少女天使・フェリスちゃんがそんな奴らを成敗してくれるわー！」

彼女は、そんな長いセリフを、だんごをビシッと掲げるポーズをとりながら、スラスラと言う。

あらかじめ用意していたかの様な……

まあ、彼女はなんの用意をしていなくても言うのが日常なので、別にそこには反応しない彼らである。

ミフィアはだんごを見上げながらちよっぴり呟く。

「スーパー美少女天使って……」

そこでわざと止める。

そうしたらだんだんフェリスの顔が赤く赤く染まって行き……

「って、赤くなるなら自分で言うなよ。」

ライナが突っ込む。

フェリスはさらに顔を赤くさせ、

「黙れこの色情狂めが！」

ライナをどーんと殴り飛ばした。

人が簡単に吹っ飛んでいくという珍しい光景を尻目に、ミフィアはフェリスに向かって言う。

「あゝ、ということでき、僕此処にいたいけど探さなきゃなんないのあるから、行くね」

最後にライナに言っというてと付け足してから、彼は踵を返す。  
フェリスから、うむ。伝えておこうか、という声が返ってきた。  
こうして、彼は一人でなんとか手掛かりをつかもうと動き出した。  
そして、この頃からもう一つ……

前世の世界の裏側の者たちも動き始めていたことを、彼は知る由もなかった。

第七話 急ぎ行く旅路（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第八話 記憶と、希望と

「ミフィア！」

彼は声をかけられ、ふりむいた。

まだあどけなさが残る顔を彼女に向ける。

そこには、大事な人がいた。

友達や、相棒と言える、唯一の存在が。

彼女は自分と同じくらいの少女だ。

だが、その瞳には子供とは思えない強い光が宿っている。

十歳とは思えほどの決意や、強さが。

少女がまた、声をかける。

「ミフィア！ なに突っ立ってるんだよ？ 此処は敵の本拠地なんだよ！ 急がないと見つかったら！」

少女の声は、焦っている感じだった。

当然だろう。本拠地で、救いに来た仲間がぼーっとしているのだ。時は待ってくれない。そのうち、ばれてしまうだろう。

だから、彼は頷いて走る。

そして彼女のもとに辿り着き、手を取った。

若干彼女の顔が赤くなった気がするが、そこら辺は定かではない。

「行くよ！」

それに彼は小さく頷いて、

「……うん、レストア！」

少女——レストアとともに走り出した。

\* . \* . \*

——と、そこで目が覚めた。

どうやら小さい時の夢を見ていたようだ。

「……レストア、か」

ミフィアはかつての相棒……いや、戦友を思い出す。

戦友というのは少し大げさだが、そんな環境で出会い、ともに生きていたのだから間違っではないと思う。

いつの日だったか、別れた時のことは今でもすぐに思い出せる。だが、彼女と別れたことはライナと出会ってから少し、薄れ始めていた記憶だった。

思い出そうとすれば、すぐに思い出せる。だが、ここ最近は思い出す気が無かった。

「また、懐かしい人を夢で見たもんだなあ……」

小さく、呟く。

ちなみに、此処はネルファの小さな宿だった。  
その一室を彼は貸りたのだ。

ネルファでは、此処を拠点に探そうと思っていた。  
だが、

「ほんと、手掛かり少ないし……」

そう。完全に手掛かり不足だった。  
というか、何を探すのか、自体わかっていない。  
まさにライナの言うとおり。

「…………ど、どうしよ、マジでやることわかんない。あゝ、わかんないっ！ どうすればいいのさ、少女さんっ！」

その、叫んだ瞬間。  
頭の中に響く声が……

<私は少女って名前じゃないですよ!>

ど、怒鳴られた!?

ミフィアはたじろく。

ってか、驚いてベットから跳び退く。

「っ!?! 君、いつ来たの!?!」

<いつ来たも何も、私移動してないですよ! 見ればわかるでしょう!?!>

「あ、そっか……で、君はなんで出てきたの?もしかして何やるべきかを教えに来てくれたの?」

<へ? 貴方が用があるから呼んだんじゃないんですか?>

「??? 呼んだ? 確かにどうすればいいんだって叫んだけれど」

<他にはなんか叫びました? 叫んだ内容を言ってみて>

彼は数秒、思い出すようにうつむき、その後顔を上げて、

「『…………ど、どうしょ。マジでやることわかんない。あゝ、わかんないっ! どうすればいいのさ、少女さんっ!』…………だったかな」  
<完全にそのまんま覚えてましたか…………凄い記憶力ですね。んゝ、貴方が言った、『少女さん』で私は呼ばれたようです。>

「あゝ、そうか。だったらゴメン…………故意はなかったんだけど」

<でも暇でしたし。それに結局は聞きたいことがあったでしょう? 私も夢では伝えきれなかったんでいい機会です。言いましょうか>  
「あ、そか。なら教えて」

<ええ。じゃ、言いますよ？>  
「うん。」

<……本当は、レムルスの筋書き（シナリオ）をぶち壊してもらいたかったのですが……思わぬ敵が現れたのでそちらに。今は……>

そこで、ミフィアは遮って、

「ちょ、ちょっと待て。レムルス？ シナリオ？ わかんないって」

<……それは教えられませんが。そのことについては貴方自身が思い出せば……続けますよ？>

「だーから、わかんないやど……」

<つーづーけーまーすーよ？>

「……うう、わかったよ……」

コホン、と一つ、空咳をして、彼女は言う。

<えっと……私の世界には、裏がありまして。そこにいる者たちが何か不穏な動きをしているのです——そしてそれはこつちの世界にも影響を及ぼしている。その者たちはこつちに自分らの仲間を送り込んだのです>

「あえて私の世界とかこつちの世界とか裏とかには触れないけれど、とりあえずなんで送るの？ 因縁でもあるのかな？」

<因縁、ですか。……私の父にはあるでしょうね。ですがこれには関係ないです。……えっと、なんで送るのかはわかりません。なにがあるのは間違いないですがね。だからそいつを見つけて私に知ら

せてもらいたいです。そういう奴らは危険だから……ヒントはきつと貴方が持つていると思うんですよ。貴方が関与すると未来の欠片の映像がブレるから>

「へえ。色々気になることはあるけど、取りあえず聞いとこっか。」  
<????>

疑問疑問って言うような雰囲気醸し出す彼女。

首をかしげている、というのが容易に想像できた。

ミフィアは少し笑い、

「名前。まだ名乗られてないし。君は僕のは知ってるみたいだね。雰囲気的にね」

<!!> そうでした……私は、《<sup>エルファ</sup>神姫》。確かに私は貴方の名前を知ってます>

少し嬉しそうな声が頭の中で響く。

……とそこでエルファがあ、と声を漏らした。

どうしたのかと聞こうと思った時、エルファが言った。

<もう時間ですね……私は一応、天界の中で力が強い方ですが……呼ばれないとこうやって声を届けることすら叶わないのですよ。ですからまた、何かあったら呼んでください。実はまだ、そちらに行くことはできないのですが……助けるくらいはできます。頑張つて力をつけて行けるようにしますからそこら辺は……って、ほんとにもう途絶え……あう、これは二時間に一回しかできないのです!>  
ではっ>

早口で言って、ブツリと彼女の声は途絶えた。

なにやら色々と自分が知らないことを言われて少し思考が止まるが、それでもやるべきことはわかった。

ようするに……見つけてとっ捕まえて、報告するということだろう。

「そう思ったら早速実行——と行きたいけど、やっぱり難しいなあ。

うーん、僕が関与してる……？ わっかんないなあ。そんな記憶ない……

……取りあえずライナたちのどこにでも行くかな」

そう呟き、彼は立ちあがった。

そういえば起きた時のままで、なんの準備もしていなかった。お腹からくうくうと音が鳴る。

「あゝ、どつりでお腹が空くわけだ。って、普通はわかるか。よし、食べよ」

ミフィアは服を着替えたり長い髪を結ったりチョーカーを巻いたりしてから、宿の階段をおりて行った。

\* ・ \* ・ \*

そこはとある家。

ネルファの皇の孫が住む家。

街の人々から聞いた話によると、眠そうな男と美人な女はトアレ・ネルフィとその兄弟たちに連れられて彼の家に入って行ったらしい。

なんでライナたちが皇の孫と連れだつて家に入って行ったのかはわからないが、まあなんらかの形で知り合つたのだろう。

おまけにトアレは優しくて賢明であると聞くし。

ついでに言うトライナもめんどくさいめんどくさい言いながら結局はお人よしだ。

なんか助けたんじゃないか？と彼は推測する。

にしても、人が多い。

確かシオンがネルファ訪問したらしいが、その影響なのだろうか？

まあ、今のネルファは大きくなったローランドに攻められたらひとたまりもないと思っっているらしいから、仕方ないことだろうと思う。

実際はまだ、元エスタブルの兵たちはローランドに従っていないのだが。

だから今のローランドは以前のローランドときつと変わらないくらいに強さだろう。

そう、考えていたら。

「よっ。ミフィア」

名前を呼ばれた。

気配は察知していたが、まさかその一人が自分を知っているとは思っていなかったからだ。

殺気は感じない。

ミフィアは振り向く。

するとそこにいたのは――

\*  
・  
\*  
・  
\*

ライナはトアレの兄弟たちに無理やり起こされ、朝早く起きていた。

「ふぁあうあ〜」

彼は眠そうに欠伸をし、食堂の扉を開ける。  
瞬間、彼は。

「……って、はあ？」

間拔けな声を上げていた。

そこには一日会ってないミフィアの姿と、凄い勢いで料理を食べ  
ているシオンとイリスの姿が。

そう。あのときミフィアを呼びとめたのはシオンだったのだ。

ミフィアの前には、ブラックのコーヒーが置いてある。

食事はとくに済ませてあるから出ていない。といっても、彼が  
食べた量は限りなく少なかったが。

シオンが顔を上げて、

「よおライナ。久しぶりだな。ちゃんと仕事やってたか？」

言う。

続いてイリスが顔を上げた。その瞬間、ライナの後ろにいた子供  
たちが勢いよく飛び出して、ライナを踏み倒す。

子供たちが全員イリスの元へ走って行ったところで、ライナはな  
れた感じで立ち上がる。

そして、

「……はあ……とりあえずなんかめんどくさそうだから、俺はもっか  
い上に戻って寝るわ。んじゃ……」

と、戻ろうとした時、フェリスがライナを蹴り飛ばし、彼は吹っ飛ぶ。

ライナはフェリスに色々と文句を言い、しかしフェリスに反撃される。

それはある意味、

「……ライナはきつい試練を受けてるんだなあ……」

ミフィアは珍しい光景を見て、ライナを軽く憐れんだ。  
そんなこんなで全員が食事の席に戻る。

やはりがやがやと騒がしいなか、トアレがライナたちの分の食べ物を持ってきて、

「なんでも、シオンさんはライナさんの従兄弟なのだそうで……」

それに、フェリスとライナは顔を見合わせる。

ミフィアはわかっていたので特にリアクションはせず、苦いコーヒーを静かに啜っていたが……

「なーにあってんだよトアレ。こいつはローランドの……」

ライナが言おうとした瞬間、シオンが足を踏みつける。  
彼……シオンの目は、こう伝えていた。

空気読めよ、と。

抗論しようとして、フェリスにも足を踏まれるライナ。

ミフィアはそんな光景を目にして、再びライナを憐れんだのだっ  
た

第八話 記憶と、希望と（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第九話 天界の姫

時はミフィアとエルファが夢の中で出会った時に遡る。

「ーやつと逢えた」

…と、《神姫》<sup>エルファ</sup>は呟いた。

美しい、水鏡色の髪をなびかせながら。

彼女がいるのはいつもと同じ、まっ白い空間だった。  
何もない空間。

だが此処は世界の輪廻転生をつかさどる、現<sup>うつ</sup>と虚<sup>うつ</sup>の狭間だった。  
天界の一部である、重要なところ。

そんな場所を、彼女はいつも独りで過ごしていた。

父は天界の主…神であり、母は世界を守護する女神だ。

女神と言っても、蜜葉を送った伝勇伝世界での女神ではない。さっき言ったように、母は世界を守護しているのだ。

彼女は孤独だった。

そんな二人の間に生まれた子だから。

神と女神は世界を守るために、毎日動いているのだ。  
こどもなんかに構う余裕はないだろう。

わかってる。

わかっているけど、どうしても割り切れなかった。

ずっと前までは兄がいて、孤独だったエルファと遊んでくれたのだ  
が…

ちなみに、兄と言っても本当の兄ではなく、再従兄弟。

兄曰く、自分は『先々代弟の子供の妹の子供の子供』らしく、赤の  
他人とも思えるほど遠縁だった。

だが、彼女はいつも優しい彼を慕っていたので『兄』と呼んでいた  
のだ。

けど今は…

彼は、いない。

「……」

いつだっただろうか。彼は消えたのだ。

天界は広くない。いや、普通の人間からしたら十分広い、どこかの騒ぎじゃないが。（国二つ分くらいか。）

しかし、神たちからしたらすぐに天界を見渡せられるので、狭いらしい。

その狭い天界で、兄は簡単に見つかるはずだった。けれど。

彼は見つからなかったのだ。

「……兄様……」

だから、またミフィアと逢えたのは嬉しかった。

兄がいなくなってから知り合った伝勇伝世界の男が可哀想だからと、転生させた彼と逢うのが、楽しみになっていた。

それに、転生する前のときも、転生後も兄に似ている顔をしているし。

本当は異世界に転生させることは、『禁忌』なのだが。

この世の裏の奴らの方が禁忌を犯しまくってるので、別に気にしない。

というか、神自体禁忌の存在のような気もするし。

正直、規格外なのだと思う。

自分自身も…

ーと。

「っ！？」

何か、急に違和感を感じた。

それも、自分のま後ろに。

この部屋に入るには、とても特殊な術を使用する以外はない。

そしてその術が使えるのは神だけだ。

つまり、神の一人がやって来たということになるが、この気配は会

ったことのある神たちには当てはまらない。

禍々しい。そんな言葉が似合う気配だった。

一瞬で術を使えるような状態にし、彼女は振り向く。

するとそこにいたのは――

黒い、何かだった。

その何かは丸く、大人の女のにぎりぎり入るかぐらいの大きさで、光を反射しているはずなのに、していなかった。

物質は必ず反射している。なのに、その何かは光なんて拒絶しているかのように闇色一色。

簡単に言ってみればまん丸いカプセルの中に、世界の闇が渦巻いているような……

そんな感じた。

なんにせよ、この天界のものではないのには間違いない。

彼女は知っていた。

かつて兄に教えてもらった話の中に出てきた物質。

「――黒水晶……」

それは、闇の力の結晶体だった。

この世界の裏……『カルデア暗黒世界』の深遠でしか生まれない、決して光が交わらない物質。

天界の結界にはじかれてしまう存在だ。

一説には、ダークマターとも言われている。

黒水晶は、暗黒世界では使い魔のようなものとされているらしい。あっちの者は使役することができ、色々と使われているようだ。力量は契約者の力によって左右され、場合によっては天界の結界を破るものもあるという。

だが、それは天空神と対になる存在の暗黒神以外にはありえない。そして此処にあるのは……

まさしく、結界を破って来た黒水晶。

何故そんなものが此処にあるのかはわからないが、用があるようなので尋ねてみる。

「……ええと、私に何か用がお有りです…よね？なんですか？」

瞬間、このまっ白い空間に妖しい声が響く。

お初にお目にかかります、《神姫》<sup>エルファ</sup>。私は暗黒神。伝えたいことがあつて黒水晶をよこしました

丁寧な口調ではあるものの、もの凄い威圧感を感じる。正直、伝勇伝のαにも引けをとらない…どころの騒ぎじゃないな、と思った。

この現実世界の外側ではこんな化け物たちが動いているだなんて、皆夢にも思わないだろう。彼女は心の中で呟いた。

「そうですか。では教えてください」

話が早くて助かります。では、言いましょう  
まず、これは忠告です。先に言っときますね。

…貴女が知り合った異世界の者の世界。そこにも我らの者がいます  
そして貴女はその者を助けたいと思っっているようですが、その者  
は我らにとって大きな障害となるでしょう。

だから貴女は悲しむことになる。その理由は唯一の友達が消える  
からです。

貴女の言う、『リユー』はそれほどまでに強いのですよ。  
ですから決して消えたとしても我らに一人で立ち向かおうとしな  
いように。

まだ、貴女程度の神では私には勝てませんからね。  
伝えるべきことはこれだけです。敵にこれ以上情報を与えるのは  
良くないですからね？

なんて、小馬鹿にしたように言う。

エルファはカチンとくるより先に、内心ほっとしていた。

蜜葉ー……ミフィアのことは知られていないようだったからだ。  
ミフィアさえ消されなければ、その暗黒神がよこした者も捕まえら  
れる可能性がある。

それに心の中が読めるのは天空の者たちのみなので、ばれる可能性  
もないに等しい。

だからホッとしていた。

だからといって、状況はそれほど良いとは言えないのだが。

「……それはつまり、宣戦布告なのですか？」

忠告兼宣戦布告のようなものです。それでは私はこれで。

…いつか、またお目にかかりましょう

そう言って、黒水晶は消えた。

エルファは、

「……これはちょっとまずいかもですね……父様にも言っわけにもいけませんし……」

ミフィアが呼んでくれるのを待つ他はないです……」

そう言って、頭を軽く抱えた。

第九話 天界の姫（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十話 闇を担う者との邂逅

ライナたちと一日ぶりに出会い、シオンやイリスと出会った、その夜。

彼はネルファの王宮に来ていた。

何故そんなところにいるのかと言うと……

（回想）

「いやあ、俺は国王思いの部下を持って嬉しいよ」

「いつか絶対、ローランドの王は色情狂だの変態だの、喋っただけで子供ができる野獣だのって噂を流して、お前を殺してやるからな！」

「ん。私が帰ったときに支店が完成していなかったら、貴様の首は宙を舞うと思えよ王」

ライナとフェリスが同時にシオンに言い放った後、彼はミフィアの方に向いて言った。

「ああ、君は俺と一緒にパーティーに出席してくれないかな。ミフィアはローブだし、変な感じしないから出席してもらって護衛してもらいたいんだよ。貴族って感じもしないでもないし」

ミフィアは黙っていた。

貴族……自分はあんな嫌味な人間に見えるのだろうか？

その考えを見透かしたかのようにシオンは言う。

「はは、ローランドの貴族にも一応良い方の貴族はあるよ？君はそっちの方って言いたかったんだけど……違う方に行っちゃったのか

な。それだったら違うと言っておこうか。  
つてか君を見てそう言う人はいないと思うんだけど……」

ミフィアは目を丸くする。

むしろ良い方ってことに驚きだ、という表情。

彼は自分のことについてはかなり鈍感だった。

「僕が……そう見えてるとは思わないのですが」

「なんでそう思う？じゃあ君は自分がどう見えてると思ってるんだい？」

「薄汚くて全然高貴さのない囚人」

即答だった……

どんだけ自分のことについて悪い方向へもってくんだよ。

ライナは半眼で聞こえないくらいの声で呟いた。

それに今は囚人じゃないし。

高貴さと言ったら、シオンには劣るが申し分ない。

シオンもこれは苦笑をせざるを得なかった。

「……君は自分のことが嫌いなのかな？」

「？自分のこと好きな人なんているんですか？自意識過剰な人は論外で……」

僕はあんまりそうは思わないです」

違う意味で自意識過剰なのかと。

自意識過剰に自分の外見が悪いと過剰に思うことを含むなら彼はまさしくそれだろう。

謙虚なのかなんなのか。

というか外見はいいのに主張しないのが勿体ない限りである。

「……ああ、まあ……とにかく大丈夫そうだから出席して。それでいいね？」

ミフィアは頷く。

一方ライナとフェリスは。

小声で、

「お、おい。シオンが言葉に詰まってるぞ」

「そうだな。シオンに言葉を詰まらせる人間がこんなにも近くにいたとは……これは後に使えそうだ」

「ああ。弱点とまでは言えないだろうが、なんか後で使えそうな感じがするぞ……」

「うむ。ミフィアを加えた王殺人計画を新たに練り直さなければ……」

少し物騒なことを呟いていたのだった。

ミフィアはそんな二人を見て、心の中で呟く。

（……二人とも、何考えてるのかわかるんだけど。本当に大丈夫なのかな、護衛なのに……）

して、回想終了。

わかりにくいが、まあローランドの貴族とみせかけて護衛をして欲しい……と、頼まれたわけだ。

ちなみにローブのことを言われたのに、シンプルだがもの凄く高い服に着替えさせられた。

会話の時に言葉に詰まるなど、シオンにとってミフィアはやりずらい相手のようで、なんとなくローブの話を入れたようだ。

別に彼はそんなことを言われても言われなくても引き受けようと思っていたのだが。

シオンにとってはあまり話したことがない未知の相手なので、仕方のないことなのかもしれない。

今は一人で設けられた部屋にいる。

一人だけ部下を連れて来たらしく、そいつと話すので席をはずして欲しいとのこと。

何故わざわざはさなくてはいけないのかはわからないが……

「ふああ、ライナたち勝ったみたいだし、暇だなあ。殺気消えたし。ま、もういないことにこしたことはないんだけど」

独り呟いて、ベットにぼすんと倒れ込む。

今のところ、ライナたちがやつつけてくれたようで暗殺者が来るようすはない。

だから休もう、そう思って寝転がる。

なんか、高いのはなんとなく慣れない。

だが貴族だらけの王宮にいると疲れるので、取り合えず休もうとする。

けれど……

「あー、寝れない。今何時？……まだ八時……そりゃ眠くないよ。」

お休みモードに入っただはずなのに、なかなか入りきれない彼は立ち

あがつてドアを開ける。

「あまりお腹は減っていないけどなにか入れれば眠くなるよね……」

長い廊下を歩いていく。

遠い会場まで、彼ならば二分もかからないだろうが……

刹那。

「……………」

かなりたくさん、もの凄い殺気を感じた。

それも後ろから。

誰かいたのは気付いていた。だが、こんな殺気を出せる者が複数もいたとは……

しかしさっきかんじたのは一人。

なのにこの殺気は……

彼はそれに変なものを感ずる。

それは生まれた時からある謎の記憶。

複数の殺気だが、それは一人から発せられる殺気という、不思議な知識。

それが何故かあてはまる。

あつたこともないはずなのに……

とりあえず彼は、気にせず歩くふりをする。

殺気に気圧されはしない。

攻撃する直前のスキをみて、相手を攻撃しようと考えてのことだ。

……だが、殺気の主は攻撃を仕掛けようとはしなかった。

暗い、声が響く。

「……ほう、この殺気を受けて平然としてますか……貴族にはそんな者は剣の一族と槍の一族しかいないと思っていましたか。」

冷たい声だった。

ミフィアは自然な動きで振り返る。

そこには複数ではなく、一人の男がいた。

漆黒の長い髪に、底冷のしそうな冷たい濃紺の瞳。

きつちりとしたダークスーツを身にまとった男だ。

殺気と言い、この男にはなにか違和感がある。

ミフィアはなるべくシオンに似たような表情になるよう、努力しながら微笑を向けて、

「何か用ですか？私は貴方を存じませんが。」

（敬語が難しい……

存じる？わざわざそんなことを言わなきゃいけないなんて

めんどくさい……）

彼は心の中でぶつぶつ文句を言いながら、しかしそのことは表情には見せない。

ちなみに笑顔の話は、シオンに「俺の笑顔まねてれば多分大丈夫」といわれたから似せるように努力。

けど心の中は、

（……難しい。どうしたらシオンさんはあんな顔を……貴族の前じゃひくつくから無表情にしてたけど。

今は敵っぱいしひくついてないかな？

……やっぱ無理。）

そんなことを呟いていたりする。

男は何故か口先を釣り上げるが。

ミフィアは内心びくついていたりした。

殺気より笑顔や言葉づかいの話だが。

男は、

「用、ですか。貴方はローランドの貴族だと陛下から聞きました。でも貴族の中には貴方はいなかったはずだ。貴方は何者ですか？」

ああ、成程。

ミフィアは納得した。

この人はシオンの部下なのか、と。もの凄く強いようだが、何故シオンはミフィアを城内での護衛にしたのか。そういう疑問は浮かぶが。

「……何者……ですか。

簡単ですよ。

僕は陛下……いや、シオンさんの護衛です」

思い切ってバラしてみた。

そもそもローランドの貴族は金髪だし、もっと煌びやかな服を着てるのでわかると思うのだが。

男はそうですか、と言って一步前に進む。

だが殺気は消えない。

まだ警戒というか、ミフィアを危険視しているようだ。男は、

「ではもう一つ聞きましょう。

貴方は何処の所属ですか？

貴方の態度は隠成師の者とは思えないので。

エーミレル私設兵団出身の者ですか？」

隠成師にエーミレル私設兵団。

どちらもかつてのローランドが生んだ狂った施設だ。

エーミレル私設兵団ではシオンの側近のクラウ・クロムや、カルネ・カイウエルはそこ出身らしい。

眠そうな顔してめっちゃ強いライナは隠成師に所属していたと言っていたし。

あと、狂った施設と言えばローランド三〇七号特殊施設もある。そこもかつてライナが所属していた。ミフィアは強い。

だから、彼がそこに所属していたと考えるのは妥当だった。

けど、違う。

彼は違うところに入れられていた。

好きで強くなったわけじゃない。

でも、逃げだそうとするたび捕まえられ、殴られる。

なるべく当たらないように。当たるのならダメージを軽減できるように。

そして、逃げ切れるようになる為に、少しずつその術を身につけるようになっていった。

ライナやフェリスのように、強制的に強くさせられるという環境ではなかったが、それでも強くなっていった。

過去を思い出しながら、彼は男に言う。

「どこにも所属してません。エーミレルも、隠成師も、三〇七号特殊施設にもね」

男は驚いた顔をする。

暗く、表情の読みとり難い男だが、ミフィアにはわかる。

まあ、彼ほど強い者が無所属という話を聞いたら、驚くのは仕方のないことだと思うが。

男は、

「……驚きましたね。まさか貴方ほどの方が何処にも所属せず、  
強い……」

こんな方は初めてです。」

言って踵を返す。

(え？帰るのっ)

ミフィアは呆けた顔をして、しかし慌てて普通の表情に戻す。  
というか、君もそうなんじゃ？という考えが浮かぶが、突っ込まな  
いでおく。

いつのまにやら殺気も消えていたので、まあいいか、と思い、その  
まま食堂にむかった。

\* ・ \* ・ \*

その頃、あるところでは。

暗い室内で。

長い銀髪の少女が座っていた。

後髪をゆるく結び、横髪の下ら辺も結んでいる。

そんな、少し変わった髪のかえ方をしている少女は、鏡のようなも  
のを見て、嬉しそうに笑う。

そこに映っているのは彼女ではなく、違うものだった。

「……うん。もういいよ」

そう言うのと綺麗な飾りがつけられた鏡が普通の鏡に戻り、少女の顔が映し出される。

少女の瞳は、少し変わっていた。

右目は銀色、左は翡翠色というオッドアイなのだ。

そんなものはいくらこの世界でも有り得ない。

だが、この少女には何故か合っていた。

少女は立ち上がる。

すると部屋は暗かったことがウソのように明るくなり、少女は本当に嬉しそうに笑う。

「やっと彼はここまで来たんだね……また逢える。彼に……」

一息置いて、少女は言う。

「ミフィアに、会えるんだ！」

輝くばかりの笑顔で、そう言って少女……

レストア・ルカ・リルアは部屋から姿を消した。

第十話 闇を担う者との邂逅（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十一話 闇が過ぎ去った翌日

シオンの護衛をした日の翌日。

ミフィアはシオンとイリスとともにまた、トアレ邸に訪れていた。今回はトアレが用意してくれた朝食を食べ、ぼーっとしている。シオンはと言うと、王だとはれない程度の書類を片づけていた。イリスは元気よく朝食を食べている。

トアレはミフィアの「少ししか食べれない」という発言を聞いた後、本当にこれしか食べないのか……と驚きながらもミフィアが残したものを処理していたり。

いつもの風景だった。

いや、ミフィアたちがいることは通常ではないのだが、それでもこれが日常と言えそうな雰囲気が漂っていた。

「あ、ミフィアさん、コーヒーいかがですか」

トアレが上の空だったミフィアに声をかけ、コーヒーをさし出してくる。

ミフィアはさっきまで世界の彼方までずっとんでいた意識をトアレに向けた。

「あ、有難うございます」

「無糖ブラックでいいですよね？というか、よく飲めますね」

「ああ、まあ。僕は苦いとか辛いだとかは大丈夫なんです。時々味覚がおかしいって言われるのですが……」

「そんなことないと思いますよ、ミフィアさん。シオンさんもい

ります？」

シオンは書類の上で動かしていたペンを止め、顔をあげる。

「僕はいいですよ。でも、紅茶をいただけますか？」

「イリスはいーよー！」

途中でイリスが話に乱入。だけどみんな笑顔だ。イリスだからなのだろうが。

トアレが紅茶を淹れ、シオンのもとに紅茶を置く。

シオンはそれを見て、んーっと伸びをし、ペンを置いた。

「よし。そろそろ休もうか。ライナたちも起きてくるころだろうし」

シオンが言い、書類をどけるとグットタイミングで朝食が運ばれる。

シオンはお礼を言ってから、イリスと同じように凄い勢いで食べ始めた。

トアレが「召し上がれ」と笑顔で言ったとき、トアレの弟や妹たちが、

「それじゃあ僕たちは野獣を倒しに言ってきまあすー！」

ビシッと手を手刀の形にし、額にくつつけるポーズをする。

ミフィアは野獣「ライナを倒しに行く子供たちを見て、ほほ笑んだ。

そつだ。この子たちは幸せなんだ。

昨日の朝、ライナが言っていたように。

『別に、父親や母親がいなくなつて、不幸とは限らないだろ。子供たちは誰かに愛されてるってわかってりゃ、強くなれるし、元気なもんだ』

この子供たちはトアレに、自分以外の兄弟に愛されてる。それだけで十分だ、と言えるほどに。

彼には一応妹がいる。

前世ではなく、この世界でだ。

といっても、一度自由の身になったときに村をのぞいてみたら母が少女に、「貴女は私の愛する娘。遠出はしないでね？怪我するなんて嫌だから」と言っていたから妹がいたのかあと思ったただけなのだが。

母が言うなら間違えないだろう。

優しい母が言うのなら……

と、話がズレたがとにかく彼には妹がいる。

彼の育った村は裕福ではないので、危険も潜んでいる。

だから今、あの村に残っていたとしたら、何としても妹と母を守ろうとしていただろう。

妹や弟をできるだけ幸せにさせようとするトアレのように。

あくまであの村を出ていなかったらの話だが。

……ともかく、人は愛されていると知れば強くなれる。

家族を守るために。仲間を守るために。村を守るために……

人は何かしら守ろうとする。

ほんの些細なことからも、守りたがる。

人間ならば無意識にもそう感じるのだと思う。

例え勇気が無くて、守るために行動できなかったとしても、守り

たいと思う気持ちはあるのだ。

そういう感情を持つのが、人間なのだから。

ミフィアのような強くなり方もあるが、この世界ではトアレやシオンみたいな人の方が圧倒的に多いだろう。

何か守るものが無い彼のようなことは、きっと少ない。

けれど……彼だって守りたいと思ったことは多い。

人間なのだから。

たとえ圧倒的な力を持っていたとしても……

トアレからもらった苦い無糖ブラックのコーヒーを音もたてずに啜りながら、ミフィアはそんなことを考えていた。

（守りたいもの、か……）

実際あの頃は、そんなことを考える余裕なんてなかった。

ただ、生きることについてばかり。

生きるために、努力して、何度も逃げ出して……

しかし、また捕まる。

何故逃げる、と怒鳴られて、殺されかけ……

でも立ち上がる。

生きるために、何度も何度も……

そんな毎日だった。

転生する前の、記憶のある頃の彼だったら「どんだけだよ」と突っ込んでいたであろう。

まあ、過去の時点で死んでたら始まる前に終わってる状態となるので。

そんなことはまずエルファが望まないの、何かしら彼女がやっていたという可能性はある。

けれど現時点では彼はそんなことを知る由もないので、考えるこ

とすらしない。

今彼は、ぼんやりとなにかを考える。  
過去のこと。

先ほど思い出していた施設の話。

そして……

（レストアは、元気かな）

あの施設から連れ出そうとしてくれた少女のこと。

あの後、あることから離れたが……

それでも、今、どう生きているかは気になっていた。

自分と同じくらい強い彼女だ。死んでいる可能性は少ない。

（いつか会えたなら、有難うって言いたい）

彼は心の中で呟いた。

また会えるとも思えないが……

——と。

「ぎゃああああああああああ」

……ライナの悲鳴がトアレ邸に響き渡る。

トアレは困ったような笑みを浮かべ、シオンは楽しそうに微笑する。

ミフィアは二人の反応と、ライナの悲鳴に苦笑してから苦いコーヒーをすすった。

それから数分後、ライナが子供たちに引きずられて食堂に連れこられる。

するとシオンがフォークを握っている腕を止めて、

「よおライナ」

いつもどおりに笑って言う。

ライナはげんりとした表情で、

「……………って、またいんのかよお前は……………暇な奴だなあ……………  
ミフィアはいてもいいんだけどさあ……………んなことで例のあれは勤ま  
んのかね」

やはりげんりした感じで言いながら席に着く。それと入れ替わるようにイリスが「残さず食べたよ！えらい？」的なことを言ったので、ミフィアは「うん、えらいね。」と返しておく。

ライナが微妙にイリスの発言に文句を言……………っう前にイリスがライナを殴り倒し、本当にイリスがフェリスの妹ということを感じさせた。

というか、

「……………あれ？」

シオンとライナがなにやら言いあっているとき、ミフィアは気が付く。

いつもならライナよりも早くか、少し遅めにやってくるフェリスが来るようすが無いのだ。

あのフェリスが？

ライナみたいになんとも寝ているとは思えない。

「ねえ、ライナ。フェリスはどうしたんだ？」

聞くとシオンが「確かに姿が見えないな」と呟く。  
ライナはそんな疑問にあっさり答える。

「ん。あいつはいま、寝てるよ。調子が悪いらしい」

あっさり言われたが、そのわりにはミフィアたちの衝撃は大きかった。

「調子が悪いっ！？フェリスに限って……今日は何か不運なことでも起こるんじゃない……」

失礼なことを言うとシオンがミフィアに「フェリスが人間じゃないみたいに言うなよ」と小声で言う。

その後シオンは一度うーむと唸り、

「暗殺者を撃退したときに負傷した……わけないよな……あいつに限って」

呟く。

「ないな」

ライナもあっさりうなずいた。  
なら何だ……？

ミフィアは少し考える。

シオンも考え込み、一つ呟く。

だがライナはそれも否定し、そこから男のロマンの話になる。

こっそり逃げたミフィア以外の二人は、食堂に降りてきたフェリスの剣の餌食となったのは……

可哀想なので此処には記さないでおこう。

\* ・ \* ・ \*

それから数日後の話。

ミフィアたちはトアレたちに挨拶せずに街道を歩こうとしていた。歩こうとしていた——というのは、まだ街道についていない、というかトアレの家の庭にいるからである。

気配を消しながらも、ライナが寝そうだとかぼやいていたりフェリスがだんごを食べていたりしていた。

そこで話していなければ寝てしまいそうというライナの口から、トアレは王になるのだろうか？という話が出てくる。

確かにトアレは人望も厚いし、性格も良く、面倒見もいいため王になったらスターネルよりも良い王になるのは絶対と言ってもいいのだが……

なるべくそれは避けたい。

それは、この国が良き王に恵まれたらローランドが困ると言うのもあるし、トアレには王という人を数で比べるのになって欲しくないというのもある。

多分、ライナたちもそう考えているだろう。

一番に思うのはやはり、ローランドが困ることよりもトアレが幸せになれるのか、ということだ。

シオンがいい例だ。久々に会った時の表情はどこか、疲れているようだった。

あの様子だとあまり寝ないで仕事をしているのではないか。

このことは、人の感情を読むのが得意なミフィアでなくてもわかることなのだ。

なにかしら苦勞するのが人生なのだが、それでも幸せに過ごして

欲しいという思いはある。

それも人が良いトアレならなおさらな話だった。だがその話をフェリスはかっこいい言い方で締めくくり、いつものアホらしい話に戻っていった。

ミフィアは二人にばれない程度に薄くほほ笑む。

やはりこういう話をしている方が、幸せなのだから。

シオンが来た日、彼はライナの書いたレポートを見せてもらった。それには、ライナの想いが詰まっているようだった。

『みんなが笑って、昼寝出来るような、そんな世界へ』

その文がシオンの……ローランドの王の、目標なのではないか？  
そう感じるような気がした。

だが、そんな考えは誰もが考えるような、甘い考え。

誰もが一度は思う、理想なのだ。

現実はそのはいかない。

シオンならできる、のかわからないが……

ライナの思うような理想郷は、難しい話だった。

だからこの前会ったような暗い男……

……シオンの部下らしき人物がいるのだろう。

シオンのかわりに闇を担うであろう人物が。

そう思った。

（きっとあの男は、ライナが、シオンが思うような世界をつくる  
うとは思っていない。）

キレ者のようだし……あのレポートを見たら、甘い理想だと笑う  
だろう

……本当に笑うのかはわからないけれどね）

心の中で呟き、ようやく出発する二人を追う。

「……ってか、ようやく遺物探しが始まるのか……  
ほんと、ようやくだなあ」

言っとライナがため息をつくが、何故そうなのかは面倒なので考えなかった。

考えればすぐにわかる話だが。

——こうして話の道筋を進んでいく原作の人々と筋書きにはない、転生者。

筋書きにいない転生者たちはこの先、どう世界を揺るがしていくのだろうか……

それはまだ、誰にもわからない。

二人の神が転生者を生み出した、その根本の理由の男ですら。

第十一話 闇が過ぎ去った翌日（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## prelude 少女と少年の繋がり

私には幼馴染がいた。  
大事な幼馴染が。

此処ではない幼馴染。  
本当に小さいころから一緒だった……  
いつでも一緒だった少年。  
でも、でも……

彼は死んでしまった。  
何があったのか。それはわからない。  
彼が死んだと知ったとき、眼の前が真っ白になった気がした。

けれど、その後彼に似た人をみた。  
目の色、髪の色、雰囲気……  
全部違ったけれど、本当に似ていた。  
雰囲気は完全に違ってたほどじゃない。  
少し、彼に似ていた。  
優しげで、穏やかで……人思いな感じが。

人思いだねって以前言ったことがある。  
死んでしまった彼と、その彼に似ているあの人に。  
するとどちらも「そうかなあ」と言っていたんだ。  
そんなところまで似ているなんて思わなかった。  
他の人から見たら完全に別人って思われるだろうけど、私は別人  
とは思じられないと思う。

まるで、死んだ彼の魂が、そのまま似た容姿の体に入っているみたいだった。

此処に来た時、それほど楽しくないだろうと思ったけれど、でも違った。

今は離れてしまったけれど。

いつか再会できればいいなと、いつも考えていた。

私には雇い主みたいなのがいる。

あえて人とは言わないでおこう。

ちゃんと理由はあるけど、話すわけにもいかない。

……取りあえず、私はそいつが嫌いだ。

第一印象は最悪だった。

私を物として考えている、冷酷な眼をしていた。

それだけでそいつが嫌いになった。

彼とは真逆な雰囲気。

そんな奴の命令を聞かなきゃいけないなんて、本当に嫌だった。

あいつは、命令を聞かなければ私を殺すと言っていた。

初めは死んでもいいやと思っていた。その頃は彼に似ている少年に会っていなかったから。

でも、今はあの人に会えなくなるのは嫌だと思って命令を聞いている。

……ただ、このことは彼は知らない。

いや、このことを知っている人間なんて、私しかいないんだ。多分このことをあの人が知ったら、心配するんだろうなあ……

死んでしまった、幼馴染の彼みたいに。

「はあ……ミフィアに会いたいなあ」

そういえば言い忘れていた。

私はレストア・ルカ・リルア。

今は銀髪かな。見ればわかるけど。

目は右目は銀色、左目は翡翠色のオッドアイ。

正直このオッドアイは無駄に思える。

別に目に関係する能力なんかないし、ねえ？

いっつも人目感じるし。鬱陶しいったらありやしない。

ちなみにミフィアと言うのは、ミフィア・レル＝エフィリアのこと。

私の名前の『ルカ』って言うのはセカンドネームなんだけど、彼は違うみたい。

本名はミフィア・レルのみで、『エフィリア』は勝手につけられた称号ってか二つ名らしい。

セカンドネームのこと言ったらちよっぴり悲しそうな顔してたのを思い出す。

なんでも『ルカ』はミフィアのお母さんの名前なんだって。

彼は『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者で、そのことを知ったときに村を一人で出

たと言っていた。

夫を亡くした母親に負担をかけさせないために。

そこも死んでしまった幼馴染の青年と似てる。

常に母親を気遣っている所が。

彼は父親と離婚して、悲しみに暮れていた母親を気遣っていた。本当に似ている。

びつくりするほど……

ミフィアと離れた理由は、彼が望んだこと以外にもある。

あ、ちなみに彼がどうして離れたがったのかは確か……

『僕と一緒にいたら君も巻き添えになっちゃうから……』だったかな。

ほんとに優しいなあ。ってそれよりも一つの原因の方が大事か。もう一つの理由。それはあの嫌な奴からの命令。

私が元から受けていた任務。それは確か、ある人の抹殺らしい。

嫌な任務だけど、それは私の故郷にもなんか影響するのかなんとか。

まあ、なにか色々なこと言われて引き受けさせられた。本当に無理やりな奴。

うざいよねえ。もう。

とにかく、その抹殺の対象が動いたので追跡して攻撃するスキをうかがえとのこと。

だからどうしても彼のもとを離れなきゃならなかった。

というか、対象はいつも動いてるよね……

だから彼に会いにいけなかった。

あいつのせいだっ！

私、その対象を見たことなんてないよ……

や、一応見たか。顔は見れなかったけど。

一度、あの最悪な奴に『ボイコットしてやるやあー！！』って

言ったら、『ライナ・リユートがミラン・フロワードと会ったら少し休暇をやるう……』って言われた。

ライナ・リユート？えと、誰だっけ。って思ったけれど、なんとか思い出した。

そして！ライナ……だけじゃなくて、フェリスも合わせて二人がフロワードに出会い、私はちょっと喜んだ。

「やっとなんかここまで来たんだね……また逢える。彼に……」

最初の彼はライナ。最後の彼はミフィア……  
わかりにくいかな。  
でも一人言だからね。

「ミフィアに、会えるんだ！！」

本当に嬉しくて、一人声をあげる。  
あゝ、誰が見てたら恥ずかしくて死んじゃう。かも。  
立ちあがって、なんとなく気配を消して部屋を出る。

そして外に出てから、あいつがくれた、何処でもみれる鏡を覗く。  
その頃……彼は何をしているのだろうかと思っ  
て。けれど。

「あれ……？」

思わず呆けた声を出してしまう。  
理由は、映像がぶれてまったく言っていないほど見えないから。  
どんなところでも念じればみれたのに……

その後もやってみたけれど、ミフィアに関するものは全て同じ感じになってしまう。

……それは、何故？

それでも、いる場所は特定できるだろう。

彼はライナ・リユートとフェリス・エリスとともに旅しているよ  
うだから。

筋書きが変わってさえいなければ、彼が何処にいるかはわかる。  
だから。

「うーん、取りあえず記憶の中にあるはずのを思い出して場所を  
特定しよ。

ようやく会えるんだ……彼に似ているミフィアに。

あ……、本人じゃないのになんか親近感もてるから、楽なんだ  
よね。

癒されるって言うのかな？いや、違うよなあ……

ま、いいや。早く思い出して会おうとっ」

呟いて、私は思い出そうとする。

なんとしても思い出すって、心の中で誓って。

こうして私は、ミフィアと会うのを心待ちにしていた。  
けど、まさか彼があんなことに巻きこまれていたとは……  
考えてもなかったんだ。

**p r e l u d e 少女と少年の繋がり（後書き）**

H・23・10・3 ずらしました

## 第十二話 遺物探索

場所はネルファ皇国の領地にある、森の中。

そこに三人の男女がいた。

一人は眠そうな黒髪の男。

一人は金髪の絶世の美女。

そして、最後は濃紺の黒髪の男だった。

もちろん、この三人はライナ・フェリス・ミフィアなのだが。

今回はミフィアもライナたちとともに行動していた。

彼は行き詰っていたため、なんとなくライナたちの手伝いをしようと思ったのだ。

いつもどおり眠そうなライナがフェリスとミフィアに問う。

「……で、あそこに見えるの砦だよな？」

「んむ」

「うん。」

その問いに金髪美女、フェリスがだんごを食べながらうなずく。

ミフィアも雪〇大福を食べてから頷いた。

……二人とも何故か三時のおやつの時間状態で、ライナははあつとため息をつく。

ちなみになんでこの世界にあるはずのない雪〇大福があるのかというと、単純に彼の力——取りあえず『式編み』と命名された能力——で生み出したのだ。

前世の記憶（夢で見たの）の欠片でおいしそうと思って生み出した。

あまり食べない彼でも、大好物のこれはいくらでも食べれる。  
もう一つ言うと、雪○大福は前世で好物だった。

ライナはそんな二人をめんどくさそうにみて、また問う。

「見ただけでわかるけど、えらい数のネルファ王国の兵たちに守られてるように見えるのは、俺の目の錯覚じゃないよな？」

「むも」

「うん」

「ってこてとは、警戒厳重ってわけだ。それも兵士に守られてる。まあ、あんなに、この地方に伝わる重要文化遺産が収められてるって噂だから、納得なわけだ。国をあげてあそこを守ってる。そうだな？」

「あむあむ」

「だね」

「で、もう一度聞くぞ。そんな場所に、俺たちたった三人で乗りこんでいって、中の遺産を盗むってのは、無理だったり無謀だったりするんじゃないか？って俺はさっきから聞いてんだが……どうだろうっ？」

「……………」

「……ん、たしかに。でもさ。」

フェリスは何かを考えるかのように目を細めるが、ミフィアはライナに自分の意見を言う。

……口をもぐもぐさせたまま、しかし口を開けないで。

「あそこに遺物があるならさ、どっちにしる行かなきゃならないんですよ。ならそんなこと言ってらんないし。ローランド以外に遺物があるのは色々と危険だからね」

「……その意見はもつともだが、なんでお前は食べながらで口あけてないのに普通に話してんだよ。」

ライナがさつきから微妙に気になっていたことを突っ込む。  
するとミフィアがやはり咀嚼そしゃくしている状態で、いつもど通りに話す。

「腹話術を極めたらできる……多分。僕極めてないけど」

「曖昧だなあ……ってかほんと、お前謎だよなあ……」

ライナは諦めたように息をついた。

フェリスはだんごを食べ終わったのか立ちあがり、

「ふむ。あの極悪非道な王シオンに私の大切なだんご屋の命運がかかっている。そうだ。ミフィアの言う通りだな。わかったな間抜け男。わかったらさっさと行くぞ」

言って颯爽と歩きだす。

ライナが何かを言おうとするが、その瞬間フェリスの姿が消えてライナが吹っ飛ぶ。

いつもどおりフェリスが剣でライナを殴り飛ばしたのだが。

まあそれはやはりいつもどおりなので、ミフィアは二人に並びながら雪○大福を頬張った。

\* ・ \* ・ \*

場所と時間は移って砦の中。

三人は強行突破という計画を立て、文字通り強行突破した。異常ともいえる厳戒態勢をやすやすと突破した三人に、兵たちはどうすることもできなかった。

見つかった瞬間昏倒。

厳戒態勢よりも異常な光景が、此処にあった。

「……僕居なくても大丈夫だったんじゃないのかな……」

「だよなあ……俺さあ、思うんだけど人質ならぬだんご質とられてんのフェリスだけじゃね？つて。だから俺はなんもしなくてもいいんじゃない？つてさあ。だから俺は寝……」

刹那、ライナの首筋にスツと剣が突き付けられる。

もちろん突き付けているのは……

「ほう？貴様の首は空を飛びたいと言っているようだな。いや、此処は空が見えんか。なら、空はとべないな。残念だがお前の首の要望には答えられない。だが、天井には飛ばしてやろう。よろこべ」

……フェリスである。

ライナは完全に降参っ！というような感じで両手を軽くあげて、

「いやそんなこと言っていないしって刃を近づけるな！降参降参…  
っは、はい！謝りますから！謝りますからこれ以上刃を近づけないで……………お前絶対からかってるだろ！」

叫ぶ。その声を聞いて兵が来ないのだから逆に怖い。  
フェリスは満足そうに剣を下ろすと、ひとつ頷く。

「よし」

「よしじゃないだろ……………」

不満げに呟くライナを尻目に、ミフィアは思い出す。  
此処に來た理由を。

簡単に言うと、勇者の遺物の調査である。

ライナがいつになく生き生きとした表情で説明してくれた遺物の  
探索。

冒頭は確か、

『彼方より此方へ。

生み、生まれ、死をまき散らす者。

焰のかがり火。

焼けつく白夜。

遠く、黄昏、嫉妬、悪夢。

豫が世、黄泉、夜半を埋め尽くし、全てを翳ろつ……………』  
だったはず。

途中で切れているのはフェリスがわかりやすくと遮ったから。

まあこんな難しい話はともかく、勇者は騎士グlaus・カルバード、遺物は剣。

その剣はありがちだが、抜けなかったという。そんななら今も残ってるだろう。

けれど、このネルファの地にはそんな話はない。観光地になっていてもおかしくないというのに。

だとしたら、無駄に厳重な警備をしているこの砦が剣を隠すように建っているのでは？

そう考えたのだ。

ライナによれば、剣があったというところはこの砦ら辺だと言う。だから此処にあるんじゃないかね？って話に。

そして話は今に戻るわけだが……

いつの間にやらやってきていたところ。

此処にある可能性が高い。

そう思った理由はこの砦の中で見たところ一番開けたところだと思っただから。

「此処に、勇者の遺物があるといいな」

「なければお前の首が……」

「はいはいもうそれはいいから……」

明らかに敵がいるのに、二人はのんきだった。

警備の兵と思われる気配は八つ。

気付かれてはいないようだが、兵が八人もいるのだ。こんなのにのんきなのはおかしい。

……だけど。

——この二人には常識は通じない。

フェリスの姿が消えたと思った瞬間、  
うめき声が聞こえてきて……

「さあ、さつさと調べろ」

暗闇の奥からフェリスの澄んだ声が響き渡り、ミフィアは苦笑する他なかった。

（本当にこの二人には……いや、実質一人だけだけど……に、常識は通じないなあ……）

心の中で呟いた時、ライナがてきぱきと置いてあつた宝箱を調べ始める。

手慣れた動きで、お前は一体何して生きてきたんだ……と思わせる動きだった。

結局畏らしきものはなかったらしく、全部片っ端から開け始める。

……というかさ。

剣は刺さつたままなんですよ？なら宝箱の時点でないんじゃない？

ミフィアは声には出さないで、呟いた。

そしてその予想は的中。

中に入っていたのは、脱税の記録が書かれた大量の書類のみだった。

「ここんとこの領主はどんだけ悪いんだ……とか、そう言う話ではなく。」

「フェリスは無表情で（いつも通りだが）剣を抜き放ち、ライナを脅す。」

「それにライナは、」

「わああああああ！？剣抜くなって！？ほ、ほらさ、俺にも間違えはあるっていうか……そのお、あ、あれだ。まだ遺物の手掛かりのアテがあるし！だから殺そうとすんなって！？」

「叫んで後ずさる。」

「だが……」

「ん。ならその話を聞かせてもらおうか。」

「フェリス悪魔が剣を掲げてまた脅した。」

「（……うわあ、悪魔が降臨してるっ……？）」

「またもや心の中で呟くミフィア。」

「そんなことを考えながらも決して表に出さないのは、彼が悪魔の餌食になりたくないということを物語っている。」

「そんなことをしている間にも、話は進んでいく。」

「いや、あのさあ。実は此处、資料にあった地図のペケ印から少しずれてたりするんだよねえ。」

「んでそのペケ印の場所は昨日野宿してた森の中……だった。」

「ほお？そしてそのことをお前は黙っていた、と。」

刹那、フェリスの剣の刃がギリリと光った。  
偶然なのだろうが、場面にあっているので恐怖が倍増。  
ライナはだらだらと嫌な汗をかいていることだろう。

「だつてさあ、見たところ、ンなもんなかったじゃん？ってことはさ、あれだ。

誰かがもってっちゃったか、地に埋もれたか。  
そしたら絶対お前掘らせるだろ？

ンなのめんどくせえし、確立も低いじゃん。  
ならこの皆の方がいいかなあゝって……

だ、だから殺さないで……」

完全に怯えているライナの姿。

そこにはかつて、『ローランド最高の魔術師』と呼ばれた天才の  
面影はなかった……

しかし、フェリスは剣を振り上げる。

剣の刃が向いた場所は……

——二つの気配がある場所だったが。

先ほどからあった気配。その気配は殺気を放つでもなく、見てい  
るだけだったので放っておいたのだ。

「で、さっきからそこにいる、お前らはなんだ？」

「そうそう。襲うならさっさとすれば。」

二人が臆するわけでもなくさらりと言う。

ミフィアは横目でちらりと見て、二人の姿を実験で得た能力……『千里眼』と名付けられたものを発動しようとした、その時。

気配が姿を現した。

桃色がかった茶色の髪の毛と、青色の瞳。似たような顔をした二人だった。

兄弟といったような感じ。

その二人が、なにやら言いあい始める。

ミフィアには関係ないのですっ飛ばすが……

とにかく二人は、この砦にあった宝箱……もとい、脱税の記録ばっかの宝箱を狙ってきたらしい。

けど二人は、中身を知らないようで、いまだに宝箱を狙っている。

今にもとびかかってきそうな、しかしごく普通な二人。

けれどミフィアの脳内では二人を見た瞬間、何故か、警鐘が鳴っていた。

理由はわからないが、とにかく危険と感じた。

取りあえず、それを無視して二人を見つめるが……

その時。

「隙ありっ!!」

クウと呼ばれた少女が飛び出して、その兄スイも飛び出す。

宝箱からバサバサと出された書類が嵐となって降ってきて……

「ちよつとおゝ！お宝なんて、一つもないじゃない！？」

クウが叫んだとき、ライナが、

「お宝なんて元からねえし」

「はあ！？ならあんたたちはいったい何をしてるの？」

「そ、それはあ……勇者のいぶ……」

瞬間フェリスが口止めとばかりに剣でライナを殴る。

ミフィアは一言も発していないが、とりあえず安堵したような表情を見せる。

「私たちはネルファの王から直々に特命をさずけられた、査察官なのだ。」

此処の領主の脱税の証拠を見つけようと忍びこんだ。」

するとクウがやれやれとばかりに言う。

「そ。なら関係ないわね。行くわよ、スイ兄ちゃん」

「お騒がせしました」

二人がこの広間を出て行こうとした。  
その時、クウがわずかに、

「ネルファの秘密査察官ねえ……」

と、呟いたのはきつと聞き間違いだろつ。

そうであると願いたい……

ここでの出会いが、最悪の結果に導くとは……

誰も思っていなかっただろう。

二人以外は……

## 第十二話 遺物探索（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

### 第十三話 懐かしい者との遭遇

あの不思議な二人と出会ってから、三日が経つ頃。

ライナたちはせつせと森の地面を掘っていた。

理由はもちろん、遺物を探すためだ。

フェリスはいつも通りだんごをパクっているが、後の二人……ライナとミフィアは掘らされていた。

スコップ片手にものを掘り出すなど、まるでどこかの探検家である。

いや、事実上間違っていない気がするのだが……

この、ライナの怠けようを見るとそう考えるのがばかしくなる。

「はー。昨日と今日、合わせて何個穴開けた？」

気だるげにライナが問うと、フェリスがしらつと答える。

「七つ」

七つ。この深さの穴を七つである。

相当な重労働だ。

しかしミフィアは何も言わず掘っていた。

何故こんなにも静かなのか？

彼の思考の中を覗いてみると。

(……………ぐ……)

寝てた。

体は起きているのだが、意識はほばないような感じらしい。無心、というよりも寝ているというのはある意味凄い。

普通は無理だと思うのだが。

だが。

そんな状態でも彼は気付いていた。

六つの気配に……

もちろん、二人も気づいている。

ライナがフェリスの方を向いて魔法が来ると呟いた。

そのことから気づいていたことがうかがえる。

ライナはミフィアにも伝えようとしたが、どうせ気付いているだろうと放つといた。

刹那。

轟音とともに、稲妻が茂みの方から放たれた。

稲妻……ローランドの魔法、稲光<sup>いづち</sup>だ。

轟音で完全に目ざめたミフィアは、呆れたように半眼で、

（陛下…… どれだけ悪戯好きなんですか。）

心の中で呟いた。

ローランドの魔法。つまり、魔法を放ってきたのは……

考えてみたら、忌破り追撃部隊しかない。

別の可能性もあるが、それは限りなく低いのだ。

ただ、問題は何故王からの勅命だと言うのに来ているかだ。

ネルファの国境でもそうだったが、自分らは何故か忌破りと思われる。

そこからでる答えが、これ。

若き英雄王、シオン・アスタールの悪戯。

ライナはシオンにとって唯一の旧友だ。

そのことはトアレ邸で教えてもらった。

王である日々は仕事だらけだし、あの腐った貴族たちの相手は相当ストレスがたまるだろう。

だからストレス発散？に遊んでいるのかもしれない。

よくよく考えてみればトアレ邸で、忌破り部隊にライナたちが王の勅命で動いていることを言わなければあいつらはお前らを追うだとか何だかの話があったのだし。

だとしたらこれは、シオンの悪戯としか言えない事態なのだ。

まあそんな中で、ライナはあつさり反魔法を展開し、アンチマジック稲妻を防いでしまうが。

「……なっ！？」

動揺の声が上がる。

それは仕方のないことだ。

そもそも反魔法は難易度が高く、しかも不意打ちに対して放てるものではないのだから。

ライナは『ローランド最高の魔術師』とまで言われていたからあつさり展開したのだが。

「き、気付かれてたの！？」

可愛らしい、少女の声。

その声は、どこかで……

その答えに辿りつくよりも早く、フェリスが腰の剣をゆっくりと抜き放った。

それに反応して隊員の一人が慌てた声をあげる。

「まずい！隊長を守……」

しかし声はそこまで。

フェリスが凄まじい勢いで隊員の一人の首筋に剣の腹を叩きこみ、昏倒させる。

すぐに他の隊員のうめき声が聞こえ……

隊長と呼ばれた、一人の少女だけが残った。

少女は亜麻色の髪を一つにまとめた、可愛らしい容姿をしていた。ミフィアにはその姿に見覚えがあつて……

「……ミルク・カード？」

聞こえないくらいの声で呟いた。

一度、あったことがある。

だが少女……ミルクは気付いていないようで、無表情で剣を振り上げるフェリスを前に叫ぶ。

「嫌！ダメ！私は殺されるわけにはいかないのよ！」

もちろん、フェリスには殺す気なんてさらさらない。

けれどこの状況で殺されると思うのはやはり仕方が無いことだ。

しょうがないのでミフィアはミルクのもとに歩いていく。

その姿に、ミルクは驚いたような、呆然としたような表情でこちらを見る。

「み、ミフィアさん……？」

やはり本人のようだ。

フェリスは無表情の中に、わずかに訝しげな表情を見せる。

「ん？知っているのか？」

ミフィアは頷いて見せると、ライナに声をかける。

「おい、ライナ。君も知り合いなんでしょ？出てこないと君が変態色情狂に進化したって言っちゃうぞ」

「はあ！？なんだよそれ！ってか色情狂に進化したってなんだよ！」

けっこう元気な声が聞こえてきた。

ミルクはまたも驚いた表情をする。

フェリスは無表情のままだんごを懷から取り出し、食べ始めたが

……

ライナの姿が現れる。

ミルクはそれに、目に軽く涙を浮かべて呟いた。

「ライ……ナ？ライナなのっ！？ローランド三〇七号特殊施設の！？」

「んあ？なんで俺の名前知ってんの？施設のことも知ってるのか……ってか、お前誰」

（知らないふりするのかよおい。）

ミフィアは軽く呆れた。

おそらく前、彼が言っていた『幼馴染』とはミルクのことなのだろうが、白を切る様子。

ミフィアは感情を読みとるのが得意で真意がすぐにわかるのだが、追及しようとはしなかった。

きつと彼なりの考えがあるのだと思ったからだ。

こうしている間にもミルクは頬を膨らませてライナに迫るが、その途中でフェリスが頷いて縄を手に持つ。

そしてミフィア、フェリス、ライナで頷き合った後、ミルクと他の隊員をぐるぐる巻きにし始めた。

「ちよっ……ライナっ、ミフィアさん！？一体何の冗談でっ……」

ミルクがなにやら言うが、気にせず縄芋虫に。

余談だが、縄とスコップはミフィアの『式編み』によって生み出されたもの。

それだけだが。

呆然としているミルクをよそに、フェリスは二人に質問をする。

「で、結局お前はこの小娘のことを知っているのか？」

「小娘って……まあ、僕は知ってるよ。」

「うーん。だめだ、思い出せない」

ミフィアはyesと答えたが、ライナはyesでもNoでもない曖昧な答えを出した。

フェリスは頷いてミフィアに問う。

「ふむ。ならばお前は何処で小娘と出会ったのだ？今後追われる身となれば、隊員の一人……しかも隊長の情報はもってて損はないだろうしな。きっかけも具体的に答える」

まるで警察の取り調べのような感じだが……

「何処で出会ったって、別に必要な情報じゃないと思うけれど……  
まあいいか。なら言つよ」

こうしてミフィアは説明し始めた。

\* ・ \* ・ \*

時は五年も前の話。

ミフィアが投獄される、一年前の話だ。

相棒と別れ、それから何ヶ月か経った頃。

彼はある道を走っていた。

それも全速力で。

その時彼は、あるものに追われていた。

そのことは話そうとは思わないが。

そんな日に、馬車が走っていた。

豪華な装飾がされた、貴族の馬車が。

彼は走っているうちに貴族が住む場所まで来てしまっていたのだ。  
全速力で走っている彼は、馬車に気付かず走り去ろうとする。  
いや、気づいてはいたが普通の馬車だろうと思っていたのだ。

だが。

「待て、小僧」

いつの間にか止まっていた馬車の御者に腕を掴まれてしまう。

慌てて振り払うが、その頃には兵が自分を囲んでいた。

施設で身に付けた体術で簡単に兵の攻撃を受け流すが、なにしろ数が多い。

此処は貴族が住む地帯。兵がこんなにもいたのは偶然なのだろうが、ともかく分が悪かった。

魔法騎士が一人いたことも関係している。

（まず……わっ、危なっ！……やつ、……う、なんでこんなに兵いるんだよ！？）

一人も殺さずにこの量はきつい。

そんなに貴族は怒りっぽいのか……

頑張つて受け流していると、馬車から初老の男が出てきた。

高そうな、だが他の貴族よりは派手ではない服を着ている男が。

きつと貴族だ。

なんのために出てきたのかは不明だが、男は出てきた。

兵の一人が言った。

「カロード様、こいつ結構強いので一度御者を連れて邸宅に主取りをつ……」

余裕が無いように言う。受け流すのがきつくなってきたミフィアは兵たちを気絶させ始めたのだ。

だが男は返事もせずにミフィアを見据える。

そして、言った。

「止まれ」

制止の声。

兵たちは戸惑いながらも攻撃をやめた。

「……っ？」

動揺する彼を無視して、男は言う。

「小僧。お前の体術はなかなかのものだった。使えそうだから生かしてやろう。だが、その代わりにカレード家に来い。お前には衛兵になってもらう」

「……僕が貴方の言うことを聞く筋合いはない」

「そうか。なら——」

男はスツと兵たちを指さし、

「捕らえろ」

『はっ』

命令した。

いきなりだったもので、少し反応が遅れる。

その隙について、魔法騎士が首筋に剣の柄を叩きこんだ。

「うつ……」

そして、彼は気を失った。

それから三十分が経ち、ミフィアの意識は覚醒した。  
そして一人の少女が彼を覗きこんでいたことに気付く。  
その少女がミルクだ。

「あの……大丈夫ですか？」

彼女はボロボロだった。

所々に擦り傷があり、腕や頭には包帯が巻かれている。

包帯からは血が滲んでおり。

なんとも痛々しい姿だった。

それでも彼女は彼の身を案じている。

本当は自分の身を案じるべきなのに……

ミフィアは頷くと、体を起こした。

大した怪我はないので、そのまま寝かされていたベットから立ちあがる。

少女は心配そうな顔でこちらを見て、どこかおどおどした感じで言った。

「あ、あのっ！新しい衛兵さんですよ……？私はミルクと言います。よろしくお願いします……」

って、買われた私なんかと話す必要なんてないですよ……じゃあ」

哀しそうな色を宿した瞳が扉の方まで向けられ、彼女は出て行くとした。

その時、ミフィアは思わず声をあげる。

「……っ、ねえ！」

ミルクはびくつと体を一瞬震わせ、こちらを振り向く。

ミフィアはなるべくミルクを警戒させないよう、ほほ笑んで見せた。

「そんなこと言わないで。僕も君よりは年上だろうけどさ、一応子供だよ？そんな衛兵って感じじゃない。それに無理やり連れてこられたんだから、心構えもくそもないよ。」

まあ……普通に接してくれればいいよ。僕は気にしないもん。」

その時、ミルクの表情が明るくなったような気がした。

「……うん！」

こうして二人は出会った……

\*  
・  
\*  
・  
\*

「……というわけ。」

ミフィアが本当に具体的に話すと、フェリスはまた一つ頷く。  
ライナはめんどくさいとばかりに欠伸をしていたが……

ミルクは可愛い顔で、頬を膨らませながら、

「もう！ライナってば私のことなんで忘れちゃったの！？」

なんてライナに向かって怒っていたりする。

それはともかく、ライナとフェリスは忘れていた。

任務を……

だからミフィアは呆れた表情で任務のことを教えてあげた。  
したらライナから軽く文句が飛んできたので、フェリスに殴り倒すことを依頼すると快く引き受けてくれた。

しかし、彼らはもう一つ忘れている。

朝、ネルファの部隊を倒していたことに。

もう一つの危険が、かれらに迫ってきていた。

第十三話 懐かしい者との遭遇（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十四話 襲撃される者たちと竜

このろくに舗装もされていない、森の中。

ネルファの大部隊が歩いていったのを、ミフィアは見ていた。

鳥のさえずりが響き渡るこの森林に遠く落ちる彼らの声。

そのことからミフィアは『千里眼』を使用して見張っているような状態なのだが。

「……大部隊？嘘だろ……なんか、今日はアレだなあ。アレアレ。ん？アレってなに……」

そんなことを呟いてしまう。

簡単に言っと、大体は冷静な彼が変なことを呟くときは状況が悪いということを示している……ということなのだが。

ミフィアにライナ、フェリスと豪華なメンツがそろったこの場だが流石にこの人数は……

まずい？

少し焦……りもしない彼らだが、それでも状況はいいよね！なんて言える状況ではないことは確か。

ミフィアのアレは何処かに置いとくとしてもこの呟きの理由は理解できる。

そこで何となく木の下に置いといた『忌破り』部隊（通称ミルク親衛隊）の面々をふり向いて見てみた。

何処かしょんぼりとした様子のミルク。

そして気絶している……ハズなのにすでに目覚めていた隊員たち。縄抜けをしようと必死の表情をしてなにやら騒いでいた。

しょんぼりとしている割には元気な感じのミルクが関節の話をあつさりしたとき、はつきりとネルファ部隊の声が耳に届いた。

「おい。この辺のはずだよな？今朝のローランドの間者が逃げたのは」

「あいつら……ネルファの砦を襲撃して、あげくに巡回警備隊にまで魔法で攻撃してくるとは……俺たちをなめるにもほどがある！」

「ああ。目には物を見せてくれるわ！絶対捕まえて、やつらが何故砦に忍びこんだのか……何故このあたりをうろついているのか、目的を吐かせてやる。そんでもってあの美人も、捕まえて……へ、へへ。そのためにこんな五十人も大部隊をつれてきたんだからな」

明らかによくない会話……

というよりも、こんなに堂々と声を出していいのだろうか？

砦に忍びこんだときの作戦、『強行突破』のように力で押しこむという作戦？

そしたら不利なのは目に見えている。

力としてはミフィアたちの方が上だが、数はあっちの方が上なのだから。

ここらで撤退の方がいいのかもしれない……

と、言いたいところだがもちろんそんなことはフェリスが許すわ

けない。

彼女は人質ならぬだんご質を取られているのだ。

いや、まあミフィアは軽くおまけのような存在と化してきているので逃げて殴られたりはしないだろうが……

もちろん信用はガタ落ち。二人もこの声には気付いているのだし。それは少し良心が傷つくと言うか、なんというかその……まあそんな感じだから避けたい。

けど、どうすればいい？

……勇者の遺物？

そういえば此処にいる理由がそれだった。

忘れていたわけじゃない。完全には忘れてはいなかった。のだが、正直考えようとも思っていなかったので軽くその話が吹っ飛んでいた。

なんか、そのことを知られたらライナに怒られそうな気がする。

取りあえずそのことは置いて、勇者の遺物さえ見つかったければ望みは繋がるかもしれない。

（そのことは様子みてない僕にはわかんないけど……）

その時、ある異変が。

木の下にいたミルクが急にアレな発言を叫んだ。

「ちよつとおー！！あんたたち、女の子をぐるぐる巻きにして恥ずかしくないの！？」

女の子にも、事情つてもんがあるのよー！？」

最後ら辺は涙目だった……

いつたいなにがしたいの！？という表情でミルクを見てみると彼女は顔を伏せる。

何か事情がある様子だ。

思いやりのある彼女が簡単に部下を危険にさらすとは思えない。

ふと、あることが浮かぶ。

『私には幼馴染がいるの。大事な人が……だから、死ぬわけにはいかないんだ』

『ライ……ナ？ライナなのっ！？ローランド三〇七号特殊施設の！？』

過去に聞いた彼女の発言。それと先ほど聞いた言葉。

ミルクはさつき思いっきりライナのことを幼馴染と言っていたことから、あんな発言をした理由は容易に思いつく。

——昔助けてもらった。だから、今度は私がライナを助ける番だ。

そんなことを考えていることに違いない。

顔を伏せる前の彼女の顔は何処か決意に満ちていた気がするし。

そしたらミルクたちは、どうなる？

——助けなきゃいけないのは、こっちか……

一つため息をつき、近づいていく兵たちに備えて双剣の式を編む『式編み』の能力から生み出された、水鏡色の刀身が光を反射して淡く輝いた。

水鏡色……まるで鏡のように全てを反射するその色はミフィアの瞳の色と同色。

もう一つ言えばこの色は夢に出てきた不思議な少女……『エルファ神姫』の髪の色と同じ。

なにかが関係している色なのだろうか。

そんな考えをする前にネルファの兵が駆けてくる。

今朝の奴らじゃない！だがローランドの紋章……という少し頭の悪そうな会話をするネルファの大部隊に、ミフィアは飛び込んだ。

エルファによって思い出した魔法。それを使用する。  
有名なゲームにある魔法だ。

「マヌーサ！」

瞬間、彼の周りに魔法陣が巡って辺りに霧がかかる。

ドラゴンクエストに出てくるマヌーサという魔法だ。

相手を霧に包み、攻撃の命中率を下げるという魔法である。

この魔法は団体戦で役に立ちそうな感じで、敵一グループに対して効果を発揮する。

たまに効かない場合もあるが、その時は運が悪いと思って再度かけない。執拗にかけすぎるとMPが足らなくなるし、かからないと

きはかからないので大体放置。（作者談）

まあこの世界にはMPなんてものはないのだが。

霧がかかったことにネルファの兵たちは気付いていない。

あくまでこれはステータスというか、まあ身体に一時的に異常を引き起こすようなもので、目には見えない、ハズなのだ。

（そりゃ気付かないよね……チートってやつかな）

言うまでもなくチートである。

だがもちろん、この能力にもデメリットはあった。

そのことは後に言うとして、今は戦闘だ。

木の枝を足場にして上に登り、そこから跳躍してネルファの大部隊に落ちようとしているミフィアにようやく気付いた兵たちは、慌てて剣を構える。

ミルクたちは驚いた表情をしてこちらを茫然と見つめていた。

助けにくるとは思っていなかったのだろう。普通ならばそっちの方が当たり前なのだから。

そもそもな話、ミルクが敵である『忌破り』を助ける方が有り得ないのだが。

ミフィアはそんな光景を見て苦笑しながら双剣で薙ぎ払っていく。もちろんみねうちで。

ネルファの兵も攻撃をするが、あまりあたらなく命中しようとしても、その度避けられてしまうのでかなり焦っている。

そしてそんな兵たちに追い打ちをかけるように巨大な光が天に瞬

いた。

刹那、稲妻が空に轟く。

ネルファ兵たちは恐怖の面持ちで空を見て呟いた。

「これはローランドの魔法、『稲光<sup>いじち</sup>』……っ！」

たった一人に圧倒されているネルファの兵たちの脳裏に浮かぶのは『死<sup>スバイ</sup>』。

間者にとつて自分らは邪魔ものでしかないのだから、殺されると思ふのは当たり前だ。

しかももう一人、あの剣士がいる。

勝ち目は薄いとみるのが普通だ。

だがそんな恐怖の現場（？）に鬼畜な攻撃。

音が、消えたのだ。

動揺する兵たちはもつと動揺。

部隊を指揮する者は必死に指示しようとするが、声が届かないためどうしようもない。

その時にフェリスが飛び出し、敵の剣の刃を付け根から切断してしまった。

「……これ、いけるかも……」

音が世界に戻り、ミフィアはぽつりと言った。

フェリスは当然だ、と頷いて敵の間を縫っていく。

ライナも出てきてミルクたちの縄をはずそうとするが、騒いで騒いではずせないようだ。

「もう！ライナったらせつかく逃がしてあげたのにい！？なんで私たちを助けるのー！」

「助けにきたのになんだよそれ……つつか騒ぐな！敵の目をそらしたのに意味がな……」

「もう、遅い。こいつらを守りながらではこの人数は裁ききれない状態になった」

さつきまでこつちが有利だった戦いの流れがわずかにネルファ兵たちの方にそれる。

音が戻りなんとか平静を取り戻した兵たちが反撃を始めたのだ。

おまけにマヌーサの効果も薄れ始めている。

不利となって来た。

（はあ……もう少し魔法の練習した方がいいよね……生き残れただけど）

少し厳しめの思考の割にはのんびりとした感じのミファイアである。

なるべく何度も魔法を使いたくない。理由は前に言ったデメリツトが関係しているから。

けれどそんな余裕はない。多分ない。（多分なのはみんな緊張感があまりないから）

その時、フェリスがこんなことを言った。

「じゃあお前が持っている剣はなんだ？勇者の剣か？ライナ。つまりそれを持っているお前は勇者ということだ。勇者ならなんとか

しろ」

「その理屈はなんだよ。」

「……………へ！？嘘、ほんとに見つかったのか！？」

思わず声をあげるミフィア。

ライナはその声に応える。

「おう。けどまだ動かし方わかんないし……………」

「なら調べる。ミフィアと援護する」

「！？……………まあ手伝っけどね……………」

諦め気味にミフィアはライナを援護する。

敵の武器をはじき、はじいたところをフェリスが切断。

なんとかミルクたちとライナに当たらないように双剣を操作し、防いでいった。

と、ライナがわずかに声をあげたのに気付く。

「お！わかった？」

ミフィアが期待の声を交えて聞くと、ライナは一つ息をついて言った。

「わっから————ん！こんな状況で解析できるわけ……………っ、ないだろお—————が！！！！」

なんと解析できるわけ……………のところで手に持っていた勇者の遺物らしきものを投げつけた！！

刹那、短剣は地に刺さり、ヒューイイイイイイイイイと甲高い音を出しながらどどんめり込んでいく。

「……は？」

ライナが呆けた声をあげたと同時、ゴゴゴゴ……と地鳴りが起こる。

「はあああああああああああ！？」

軽く絶叫したミフィアはその後の光景に目を疑った。  
真っ赤な火柱が地面からあがり、竜が現れたのだ。

「……何をした？」

フェリスの冷たい声を聞き、何故かライナとミフィアは同時に答えた。

「「……さあ？」」

ミルクたちの絶叫をBGMに会話を続けるミフィアたち。  
そのことと竜に怯え、逃げ出すネルファの兵たちが眼の端に映った。

フェリスはうむ。と頷くとまた彼らに問う。

「……すごいな。あれが伝説の勇者か？」

「いや、どう見たって竜だろ。」

「確かに伝説だけど……」

「ふむ。とにかく助かったんだ。もういいぞ、あの無意味に危険あぶなそうな竜は、とりあえずしまえ」

その発言に、二人は思わず顔を見合わせた。

「「……どうやって？」」

またも同時に言う二人の無責任この上ない会話に、フェリスはだんごを取り出そうとしてやめて後ろを振り返った。  
ライナやミフィアもそれに続く。

「本当にあつたとしたら、面倒だなあ……」

「というか放置で良いのかな？害ないよね？」

「お前、自分も何事もなかったようについてきていながらよくいうな。」

「対処のしようがないのさ。で、どうおもう？害あったら」

「過去は振り返らない主義だ」

「あれ？なんか聞いた感じする……何処でだろ。」

「名言だからな。」

「へええ、そうなのかあ……だったら勇者の遺物があつたってい

う事実、忘れて昼寝した方がいいよなあ……」

「それはちょっと違うぞ思うぞライナよ……」

「そうだぞ。だんごを食べる方がいいに決まっている」

「それも違うような。」

「よし。宿に帰るぞ」

「昼寝させろよ……」

「だんごを買ってから考えてやる」

「えと……まあいいよね？」

直後、ミルクたちの絶叫が聞こえたことは無視しておこう。

第十四話 襲撃される者たちと竜（後書き）

H・23・10・3 ずりました

## 第十五話 幼馴染との再会

「ごめん、今日は一緒にいられない」

——と、言ったのはもちろんミフィアである。

場所はトアレ邸を離れてから泊まっている宿屋の一室。

シオンとの情報伝達役のイリスが来るのを待っている所だった。

言うのを忘れていたが、イリスとは無表情美人・フェリスの妹だ。彼女もフェリスと同じく美少女であり、金髪碧眼のインテールをしている。

体術も剣の一族のエリス家の一員であることを示すようにライナに迫るものがある。

ほとんどの点でフェリスに似ているイリスだが、完全に違うと言えるところが一つあるのだ。

それは表情。

無表情であるフェリスとは対照的に、イリスはコロコロと表情がかわるのだ。

彼女はパパっ子ならぬ姉っ子？で、常にフェリスにひつついており、あることないこと吹きこまれていたりする。（例えばシオンやライナは夜になると野獣となり、女性を襲い、一気に荒野を駆け抜けるや、野獣ライナと話すと妊娠させられる、などの嘘八百）

彼女の斜めった知識もフェリスの吹きこんだことによって蓄えられている。

それと彼女はシオンとの情報伝達役以外にフェリスのだんご配達員の役割を果たしている。

これはだんご依存症？のフェリスを喜ばそうとしているための行動で、自主的に行われているものなのだがすでにフェリスには普通のこととされているため、ほぼ強制的な状態だったりする。

ライナはめんどくさそうに顔をあげ、行つてらっしゃいとばかりに手を振る。

素っ気ない行動だが、任務と言う名の地獄に疲れ果てていると言う彼のことはよく知っているので何も言わない。

というか、ライナがなまけ者ということを知っているので、なのだが。

まあそれは放っておくとして、さっきからなにやらライナの方に向けられた視線が少しこっちにも漏れている？ようで、なんかイタイ。

殺気、とも言えない謎の視線。そして、気配。

普通の人間では察知しきれないその視線と気配を、ミフィアはじつと見つめる。

じいつと見つめる。

じ————つと見つめ……

「い、イリス負けないもん！イリスちゃああああん、ぱああああああんち！？」

慌てたように飛び出してくる金髪ツインテール。

どうやらミフィアの視線に負け、出てきてしまったらしい。

上から殴りかかってくるそれをひょいっとなつかみ、そつと地面におろす。

すると少しむっとした、だが恥ずかしそうな表情をした美少女がこちらを見上げてくる。

先ほどの彼女のセリフからもわかるように、この少女がフェリス

の妹、イリスだ。

ライナはこのいきなり殴りかかってくることとか、ハタ迷惑なところが姉に似ている……と言っていて、即座に剣で殴り倒された。

「う……やう……イリス負けたああ！？姉さまあ……うう」

よほどパンチを受けとめられたことがショックだったのか、涙目で姉に助けを求める少女。

フェリスはこちらに視線をやり、そして、

「なんと！ミフィア、お前もイリスを襲おうとする幼女誘拐は…

…」

「違う！？なんでそうなる！」

最後まで言わずに突っ込む。

フェリスは当然ながらむうっとするが、イリスはやはりしゅんとしたまま。

なんか可哀想になってきたので、大丈夫、君は強いよと言いながら頭をなでてやった。

するとイリスの顔が輝き、ほんと！？と聴き返してくるのでほんと。と言っただけ。

結果、イリスは嬉しそうに辺りを飛び回り、ライナにうぜえと言われてしまうはめになるのだが、ライナの言葉に関してはさほど関心を持たないイリスはかまわず飛び回った。

フェリスはイリスが持ってきていたリュックを勝手に漁り、勝手にだんごを取り出してパクつく。

なのでミフィアはお気に入りの雪〇大福を出して食べ始める。そしたらイリスが寄ってきて、

「ミフィアちゃん、その白いのなーに？」

と聞いてくる。

可愛らしい動作に少し微笑し、口をつけていないもう片っぱを皿に移す。

そして雪○大福と答え、それ専用のフォークを添えて食べていいとばかりにあげてみた。

イリスはそのまま一口食べ、おいしい！と叫ぶとフェリスのもとに吹っ飛んでいった。

この風景は平和そのもので、ミフィアは微笑する。

嬉しそうに微笑する。

しかしローランドでは違うことを知っているので複雑な気持ちになる。

朝にローランドの情勢を『千里眼』で覗くのが彼の日課なのだから。

エスタブルの反乱……シオンはその対応に追われている。

だから王ってつくづく損な役回りだなあ、と心の中で呟いた。

そして、

「じゃあ、行ってくるよ」

眠そうな影とだんごを持った影、小さな影に向かって微笑んだのだった。

エルファと名乗る少女を思い出して……

あの表情をわずかに思い出して、少しでも世界を平和にできるならばと歩きだした。

そして、世界は回り始める……

＊ ・ ＊ ・ ＊

「エスタブルが反乱をおこして……ノア姫がローランドに降伏、忠誠を誓う？この世もコロコロとかわるものだなあ」

みずみずしい草が敷き詰められた草原。

爽やかな風がサアッと草を撫でていく。

そんなところに、一人の男が立っていた。

光の当たり具合によって虹色に輝く、水鏡色の髪。

長い前髪が流れるたびに見える知的な翡翠色の瞳。

すらりとのびた背丈と人間離れたその美貌が妙に合う男だった。

何処か遠くを見つめて笑みを浮かべる。

その理由は、本人にしかわからない。

「——さて、と。」

男はそう一つ呟いて前髪に隠れた瞳に手をあてる。

そしてそのまま下に滑らすように手を動かすと、彼の瞳の色は変わっていた。

髪と同じ、水鏡色に。

その瞳は何みかも見透かせるような、そんな光を宿していた。

男はしつとりと微笑むと、ゆっくり歩み始める。

「ほんと、世界は不思議。不思議な歯車で回ってる。だから、あ

んな化け物たちが暗躍しているのだな。明日見たくない光景でも見えるんじゃないかと不安になる」

風がまた、男の前髪を撫でる。

草を踏み、サクツ、サクツ……と音が聞こえる度に何かが変わっていく。

そのことは誰もわからない。

男本人以外には……

人間には、わからない変化が、ここら一帯を包んでいく。

「不安になんか、なっていないが。まあそれはどうでもいい……

今は世界なんかより、化け物どもの行動を重視すべきだ。

リユーラの息子の覚醒はまだのようだが……

そこは気長に待つとしようか。

それでアイツの覚醒も始まるといいのだがな」

意味深な言葉を呟く不思議な男。

また一歩踏み出した———と思ったら、彼の姿は消えてしまう。もう一つの歯車。

規格外の歯車は、あるものを求めて消え去った。

\* . \* . \*

場所はまた変わってネルファの街の中。

大勢の人が行き交う中、ミフィアは眠そうに顔をしかめてその間を縫って行く。

何故そんな表情をしているのかというと、普通に眠いから。

昨日の夜は少ししか眠ることができなかったのだ。

「ふ、ふあゝ……眠う……」

言いながら街を出、街道に出る。

街を出た時、いきなり人がいなくなり、ついには気配すら感じなくなる。

それほど人氣が無いのだ。

……いや、気配が無い、というのは逆に……

「……不自然だな」

呟くすると一つ、気配が現れる。

先ほどまでなかったはずの気配……

少しは感じていたが、此处まで気配が無いとは。

強敵？

いったい何者だろうか。

そう思っていると、気配が急に動き出す。

——来る！

臨戦態勢を取ろうとした、その時。

……気配は攻撃するというより、飛び出してきた！？

「はああ！？何ソレっ」

思わず叫ぶと、気配の影が徐々にあらわとなる。

光が反射していまいち見づらいが、長い銀髪の少女ということはわかる。

……ん？長い、銀髪？

脳が理解するより早く、少女はミフィアの上に落ちてきた。

——ボスンッ！！

「わああああだっ、誰！？」

「ミフィア！久しぶりっっ」

何処か聞き覚えのある声。それに当てはまるのは『長い銀髪の少女』というキーワードで出てきたあの幼馴染。

「……レストア？」

レストア・ルカ・リルア。

かつてあの地獄を共に生きた、戦友ともいえる幼馴染だ。あることがきっかけで離れてしまったが、とにかく彼女と一緒にいる記憶は忘れられない。

なんせずっと一緒にいたのだ。

いつも気にかけてもらっていた、唯一の戦友なのだ。忘れるわけもない。

彼女はなにか事情があり、どうしても離れなければいけないと言っていた。

離れたくない、と言いながら泣いていた。

あの時のローランドは本当にひどかったから、ずっと一緒だった幼馴染と離れるのは不安だったのだろう。

もう一生会えないかも、と大粒の涙で頬を濡らしたあの姿はいまだに鮮明に思い出せる。

しかし、そんな彼女が今、眼の前にいる。

嬉しそうな表情で本当に嬉しそうに笑っている。  
自分を見て。

あの日、人を見たくないと言った自分を見て嬉しそうに微笑んでいる。

「やっと会えた……ずっと合いたかったんだよね。寂しかった。  
寂しかったああ——！？」

急にミフィアの胸の中で泣き始めるレストア。  
感情がコロコロと変わるのも相変わらずだ。  
でも、今この体制でそれはちよつと……

「れ、レストア。泣くのならこの体制は止めよ、ね？」

なだめるように言うも、彼女は、

「今はお断りしますっ！」

あ、相変わらず頑固だ……

言ったらその後の意見は聞かない彼女である。  
見ていると色々楽しい少女だが、この期に及んでこれはこっちが  
お断りしたいものだ。

まあ一人が寂しかったんだな、と思えばしょうがないと思えるし、  
同情の余地ありなので頭をポンポンと撫でてやる。

すると驚いたように顔をあげ、さっきの涙は何処へやら。イリス  
のように無邪気な笑みを浮かべた。

「へへへ」と嬉しそうに言う彼女に、「犬か」と突っ込むと「  
何ソレ酷い！」と怒られる。  
なんか懐かしい。

「そう言えば合えないかもって言ってたのにどうしてこれたの？」

「ミフィアほんと記憶力いいねえ。まあ、なんたるな。休暇貰ったって言った方がいいかも？」

「休暇じゃないような言い回しだなあ。ま、いいや。」

立ちあがってレストアに手をさしのばすと、またも微笑んで手を重ねる。

どうしてこんなにも嬉しそうなのか……

鈍感であるミフィアには難問だ。

それはともかく、ミフィアはまたレストアに問う。

「今後どうするつもりなの？」

「一緒にいーなあー。一人つまんないし。一人じゃなくてもアイツウザイし。ウザイしウザイしウザイし。」

「酷い言われよう……なんかその人が可哀想になってきた」

「ええ！？アイツの味方するの！？さいてーなんだよ！？もお。」

「

なんかこんな喋り方だと彼女の本質がわからない。

この喋り方だと思いつきりお馬鹿さんに思える。

だが、本当はミフィアとともに地獄を乗り越えてきた少女なのだ。戦闘となればあつという間に敵を蹴散らし、欺いていく……

そんな彼女についた二つ名が『闇の欺き姫』。

たいそうな名前だが、伊達ではない。

彼女は本当に全てを欺いて生きてきたのだから……  
今はそんなもの、微塵も感じられないが。

そしてなんだかんだで一日が過ぎたという事件。

## 第十五話 幼馴染との再会（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十六話 雷獣使いと転生者

小鳥が一日の始まりを告げる、早朝。

そんな時間に、銀髪の少女が独り立っていた。  
レストアである。

場所は草花が鬱葱と茂る森だ。

そんな大自然の中、少女は憂いの表情で呟く。

「……また離れなきゃならない。

……そんなのは、嫌だなあ……

独りは淋しいよ……ミフィア。

私は全部、自分のこと全部明かせないのに。だからみんなに避けられてたのに……

君だけが手を差し伸べてくれた。だから私は……っ！」

最後には悲痛な表情で叫ぶのをこらえる。

今にも泣きそうな面持ちで地面に座り込んだ。

「……っ、私は……裏切らないといけないのかなあ……

なんで、私はこんな目にあってるんだろうね……

はは、アイツを殺さないと終わらないってことなのかなあ。

だったら……つらいよ、ミフィア。

私は……アイツを殺せないから……どうしようもないんだ……」

新鮮な空気。

だが今は湿っていることが気になるほどに、しっとりとした空気と化していた。

レストアが言っていたアイツとは、精神面でも、戦闘についても強いレストアを負かすほどの相手なのだ。

「……………」

こうして、時はゆっくりと過ぎていく……

\* ・ \* ・ \*

場所は移って宿屋の一室。

そこにいるのは、胸にまで届いた濃紺の黒髪を一つに束ねた青年である。

もちろんその青年とはミフィアのことなのだが……

「ふああ。眠い……この眠気、どうにかする方法知らない？……  
って、誰に言ってるんだろ。」

一人で突っ込むその姿は、少し悲しいものがある。  
なまじ美形なだけに。

ミフィアは眠気をどうにかするために、取りあえず伸びをした。

「……最近はコーヒ一杯で朝ごはんが済むんだよねえ。不健康生活らしいけど。」

別段気にすることもないし。不健康な生活って思えないことが怖いなあ。」

呟いて、食堂に降りると顔馴染みのあるおばちゃんに出会う。そして少し話をしたところでコーヒを受け取り、座って一口飲む。

するとコーヒの苦みやカフェインが眠気をふっ飛ばし、彼は一つ頷いた。

別に頷いた意味はないのだが、そこはノリでとだけ言っておこう。

「んん。今日は少しでも調べるかな……レストアも今日からまた動かないととか言ってるじゃないし。」

……二日経つけどライナとフェリスは遺物探し、何処まで進んだんだろ。なんか気になった。」

ちなみにこの頃二人はようやく遺物探しに向かったところである。だが、イリスからのあやふやな報告と色々な誤解のせいで、まずいことが起こりそうなのを彼は知る由もない。

ミフィアはしっかし手掛かりがないなとか呟いたが、もちろんそんなことで情報は入ってこない。

エルファを呼ぼうにもなんか異常事態が起こったとか。

二回目と呼んだとき、いきなりそのことを言われて言い終わった

瞬間に通信？が切れてしまった。

というわけで二回目の時はなんの情報も得なかったのだが。

「どうしようもないな……」

コーヒーを飲み終わり、食器を片づけると荷物を持って宿を出た。  
もちろん、お金を払って。

\*  
・  
\*  
・  
\*

まっすぐに延びる街道を、ミフィアはとぼとぼと歩く。

「あーあーあー。どうしようもないよー。暇とも忙しいとも言えないこの状況は一体何なのだろう」

少しアホらしいことを呟きながら歩く。歩く。歩く。

というか、一応彼は『エフィリア凄まじき才能を持つ者』と呼ばれた天才なのだが……

こんなにもアホらしく見えるこの状況は、こっちの方が一体何なのだろうか。

——だが、そんなのんびりムードも束の間。

ミフィアは足を止める。

理由は、急に現れた気配。

……殺気だ。

隠す気が無いらしく、まっすぐとミフィアに向けられている。

それも強大な殺気——常人なら気付くことすら叶わないかもしれない。

そこら辺は彼にはわからないが、とにかく敵は強いようだ。

……どこで恨みを買ったかはわからないけれど。

彼は苦笑してから、スイッチを切り替えた。

瞬間、彼のまわりに漂っていた穏やかな雰囲気は鋭いものと変わる。

そして敵がこっちを警戒し、完全に戦闘の態勢になったのがわかった。

気配が動く。走り出す。

と思ったら新たな気配を感じ、ミフィアはとっさに跳躍した。そして自分がいたところにはバチバチと音を立てる雷の獣が。

「……雷獣？」

その謎の雷獣はミフィアめがけて跳ぶ。

バチバチと音を立てながら鋭い高電圧な牙をむき出しにして。こんなのに噛まれたらひとたまりもないだろう。

「ちいつ、『ベタン』！」

空中で呪文を唱え、魔法文字が連なった魔法陣が巡ったと思うとすぐに弾ける。

すると雷獣は急に地面へと落ち、潰れて消えた。

『ベタン』……強力な重力を発生させ、相手を押しつぶす魔法だ。これもドラゴンクエストの魔法である。これを使えばフェリスでさえも苦戦する雷獣を簡単に倒すことができる。

デメリットがあるので何回も何回も使用は出来ないのだが。

そう考えているうちに地面へと落ち、着地。したら何故か拍手が聞こえた。

殺気の主だ。

いつの間にか距離を縮められていた。

その、殺気の主が言う。

「いやあ、雷獣を簡単に倒す人間がいたとは思わなかった。驚いた。あれ、一匹だったとはいえ強いんだぜ？」

そいつは変わった髪の色をしていた。

桃色がかった茶髪に青色の瞳————皆で出会った二人組兄弟と似ているという印象。

あの二人とは雰囲気が全然違うが。

……雷獣に桃色がかった茶髪。そして兄弟にもう一人——

何かが引つかかる。

二人に出会った時もそうだったが、心の中で警鐘が鳴り響くのだ。  
が……がす……たー、く……？

そうだ。あの三人はガスタークという国所属の……っ！

「貴方は……ガスタークの刺客……？」

「！お前、そんなことも知ってるのか？国外にこの情報は出てるはずはないはずなんだけどなっと。

まあどっちにしる殺すからいいや。ミフィア・レル＝エフィリア  
？」

「……何故僕の名を」

「少し、聞いたことがあるんだよなあ。『忘却欠片』<sup>レルフラグメ</sup>を所持して  
いた化け物がいると」

「『忘却欠片』<sup>レルフラグメ</sup>……ライナが言う、『勇者の遺物』？ああ、アレ  
っぽいのなら小さいころに拾ったつけ。四角い虹色に輝く宝石みた  
いの」

「そう。それなんだよ、俺らが探してるのは……『円命の女神』  
の痕跡であるその『忘却欠片』<sup>レルフラグメ</sup>なんだよ、っと。余計なこと喋りす  
ぎちゃった。まあ、殺すんだからいいか」

「どんだけ殺す気なんだ……」

ミフィアは心の中で呟きため息をつく、ピンク髪（省略）は珍  
しい金色の指輪をはめた腕を振るう。

「來のかたの獣よ、有れ！」

そして生まれたのは先ほどの雷獣、……たち。

『けっこう強い』という雷獣がいち……にい……三匹。

（殺す気満々な人発見っ……！？）

取りあえず地を蹴って後退。

やはりその後を雷獣は追ってくる。

「わあああつ、そんなに追ってこられたら対応しきれない！？」

「それを狙ってたから仕方ないだろ？」

「ずるっ！？」

凄まじい<sup>スピード</sup>速さで迫りくる雷の獣。

「くそっ」

——これはあれを使わないと駄目かもしれない。

心の中で呟くと、顔をしかめる。

使用する能力は『式編み』だ。

『式編み』は無限ともいえるものの式を編み、生み出す能力だ。流石に生きた人間を生み出したり、クローンをつくったり、死んだ人間を蘇らせるようなことは出来ないが……

それでも、ほとんどのものを生み出せる。

けれどももちろんそんな強い能力にはそれ相応の代償が必要なのだ。

魔法の展開速さ<sup>スピード</sup>をあげると魔法の精度が落ちたり、大きくするとそれだけ展開スピードが落ちるなどと同じように。

この世は等価交換で構成されているものが多く存在しているのだから。

『千里眼』は謎なのだが、そこは置いておくとして話に戻ろう。

『式編み』を使用する時に必要とする代償は自らの体力だ。

生みだすものが大きいほど、削られる体力は量を増していく。

体力は使用中断時辺りで削られる。

しかも長い時間使用しているとそれ相応の体力を使うので、あまり継続して使うことは出来ない。

『勇者の遺物』……『忘却欠片』<sup>ルルフラグス</sup>を生み出すことも可能だが、それは出したときに一瞬意識がとぶ。なので一瞬一瞬が生死を分ける状況ではあまり使えないのだ。

知っている者は少ないが、『忘却神器』<sup>ルルファジール</sup>も生み出すことは可能である。しかしその時は一瞬ではなく、生み出した瞬間気絶してしまうというところがある。

つまりあまり重要じゃないものを生み出すときは便利な四次元ポケット<sup>↑</sup>、重要なものを生み出すときは諸刃の剣という能力なのだ。

一方、ドラクエの魔法にも体力を消費する。

ドラクエの魔法にはまず、MPを使用するだろう。

だが、この世界にはMPというものはない。

魔力<sup>イメージ</sup>というのはあるが、この世界で言う魔力とは魔法を生み出すときの想像力の値を言う。

だとしたらこの消費MPをどうするのか？

前にも言ったが世の中は等価交換で構成されている者が多い。

つまり、なんの代償もなしに強力な魔法……それも展開速度が一瞬の魔法を使わせるわけにはいかないのだ。

なのでMPの代わりにHP……体力を消費させるということになったのだろう。

だから魔法も『式編み』もあまり使いたくないのだ。

ちなみにミフィアの場合、ローランドや魔法自体の理論は理解しているが、特殊な魔法を持っているため習得は不可という状態である。

……そういうデメリットがある中、それでも彼は『式編み』や魔法を使用する。

生き残るために、そうせざるを得ないのだから。

「……こんなにもたくさんいるのなら……」

——『式編み』を解放……

材質は『鉄』、大きさは『横長に巨大』。

この情報と想像を元に式を編む

突如、なにか大きなものが生み出される感覚。  
……そして。

「……一気に潰しちゃえばっ、良いんだよねえ!」

出てきたのは横に長い鉄の塊。

それが固まって自分を追ってきている雷獣たちの上から落とされる。

なにしろ鉄だ。それも巨大な鉄の塊だ。

重量があり、しかも真上からそのまま落とされたならば。

……猛スピードで落ちてくるのは当たり前だろう。

『……………！』

雷獣たちは塊に気付いてよけようと動くが、間に合わない。

巨大な鉄の塊にそのまま押しつぶされ、消滅する。

ズツ、……………シイイイイイイイン！

二人以外の気配が皆無である街道に響き渡る地鳴りのような音。もちろんピンク髪男？は驚いた表情をする。

「おっと。その鉄の塊は何処から出したんだ？見たところ『アイルクローノの鎌』と似た原理のようだが……

これで殺すワケが増えたか減ったか。

まあ、生かしという様子見って方が適作だと思うがな。ってわけで俺は帰る」

そのまま踵を返し歩いていく男。

そんな男にミフィアはあまり反応しなかった。

様子見なら大丈夫だと思ったからだ。

……と、いきなり男がふり向いた。

ミフィアはまた戦闘態勢に入る。

そして、男は口を開き、

「あ、俺はリル・オルラ。リルってよびな。俺はお前のこと普通にミフィアって呼ぶからそっちも普通によびな。っつーわけで、またな！」

……なんでフレンドリーなんだよ。

ミフィアは呆れた表情でそう答えた。

男……リルはそのまま行ってしまったが、そのことに文句はない。  
むしろ逝っ……行ってほしいものだ。  
↑

まあ取りあえずその後、今日は何事もなく過ごせた。……ミフィアは。

第十六話 雷獣使いと転生者（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 番外編？ 前世の夢と

——それは十年も前のこと。

『蜜葉』が命を落とし、『ミフィア』が生まれてちょうど十年が経ったころ。

彼の瞳に映ったのは、ある光景だった——

\* ・ \* ・ \*

「……此処は何処だ？」

肩まで伸びた濃紺の黒髪を束ねずに放置している少年、ミフィア・レル＝エフィリア。

背丈は十歳の平均身長より高く、その表情にも何処か大人っぽさが見える。

だが今、その姿は……

転生者でありながらも前世の記憶を失くし、筋書きの『す』の字すら知らない少年は、今見たことのない所に立っていた。

天を突くように建っているガラス張りの建物や、鉄の塊が空を飛んでいたり地を駆けているという不思議な所に。

……それは存在しないはずの”過去”。

そこはまさしくミフィアの前世、『美原 蜜葉』の生きる世界。  
今はいない『蜜葉』が住んでいた——現実の世界だった。

コンクリートの硬い地面に座り込んだ彼は、しばし遠くを見つめていた。

軽く現実逃避をしていたのである。

だがもちろん、そんなことでは状況は変わるはずもなく。

「……、僕は何をしてたんだっけ……」

思い出せっ…… 記憶を辿ればなんとか此処にいる理由もわかるはず。

まず、あれでしょ？ レストランと話して…… 二人で戦って力を確認してさ、

それでいつも通り微妙な味のご飯食べて……

……寝た、よね。なのに僕はどうしてここに？」

結局疑問は解決しなかった。

もしかして、僕 夢遊病なの？ いや、それで逃げ出せるんだっ  
たら苦労しないし……

なんてぶつくさ呟きながら、なんとなく地面を見つめる。  
すると服が少し見えて。

彼はその服を見て、ん？ と小さく声を漏らした。  
理由は簡単。

明らかに昨日着ていた服じゃなかったから。

しかも自分の体にはなにやら違和感があるし、手も見てみると大きかった。

「……っ何が起こってるんだ？」

人気がない路地裏で驚きを隠せないミフィア。

周りを見渡してみるとひび割れている部分が少ない鏡の板が放置されており、彼は足早にそちらへ向かった。

自分の姿を確認するためだ。

そして鏡に映ったその、姿は。

見たことのない人間だった。

顔立ちは自分に似ている感じがする。だが、違う部分は多い。

髪は濃紺に近い、というよりも普通に漆黒、と言う方が合っているだろう。

瞳も水鏡色ではなく漆黒の瞳。

背丈は十歳の平均身長を越えていた時よりも高く、167cmくらいと思われる。

髪の長さは肩よりも少し短い。

顔立ちはさっき言ったようにミフィアの面影はあるものの、本人だ！と言いきることは難しい感じ。

服装は見たことのない変わった服で、紺色の上着をはおった下に白いシャツ、そしてリボンのようなリボンじゃないような奇妙な平べったいひもが結ばれており、ズボンも上着と同じく紺。

動きにくい服装だった。

ちなみにこの服装について問えばすぐに『ブレザー』や、『制服』という答えが返ってくるだろうが前世の記憶をほぼ失ってしまっている彼にはわからない。

「……一体何が起こってる？」

厳しさを含ませた声が、静かに響き渡る。

—— 人気の少ない路地裏に加え、夜と言うこの環境。  
ミフィアは辺りを警戒しながら足を動かした。

見かけた人々はローランドの人々とは違い、そこまで暗い顔をしている者はほとんどいなかった。

スーツを着た中年の男一人以外は（これは単にリストラされた不幸絵図なので放っておく）。

何処へ行けばいいのかわからずそこら辺を歩きまわる。

（体をどう動かせば速く動けるだとかはわかるけど、この体はなまってる。

強敵相手にこれはきついな……）

大丈夫。強敵なんていないから。

誰かが行ってくれそうなセリフは流石に出てこなかった。（当たり前だが。）

……と、そこで一つ気配があらわれる。

普通の気配。

その気配は自分に近寄り、なにか行おうとする雰囲気を感じる。

何者だ——

言おうとした、その時。

「蜜葉！こんなところで何ほつつき歩いてんの？」

後ろの気配が自分に言葉を発した。

『蜜葉』？

何故蜜葉と自分と呼んだのだろうか。

そして、何故自分を知っているかのような――

しかも、なんでか『蜜葉』という名前らしきものに反応してしま  
う。

それは本当になんなのだろうか？

ミフィアは後ろを振り向く。

するとそこにはちよつと怒ったような表情の少女が。

少女は背中まで伸びた漆黒の髪に同色の瞳、シンプルな……だが  
見たことのない変わった服装をしていた。

この少女の顔には見覚えがある。しかも最近見たような気がして  
ならない。

その理由はやはり彼には分からないが。

「蜜葉！反応してよっ、もう。君の幼馴染が心配してるんだよ

！？……こらっ、反応しなさい！」

ゴンっ、と鈍い音が鳴りミフィアは思わず頭を押さえた。

言うまでもなく、殴られたのである。

「いつ！？何するのさ！」

「蜜葉が私を無視したからなんだよ！自覚するの！」

「だからって殴ることないじゃん！？それにき……」

「ああもう、なんでもいいから家に帰るの！お母さんとお父さん心配してるんだから！」

「う、わちよつと！」

引きずられるように連れて行かれる。  
そしてミフィアは……

\* ・ \* ・ \*

これは夢だ。

いつの日にか見た、夢。

これは前世の記憶の欠片だった。

しかしそんなことわからないミフィアにとっては、意味のわからない話であった。

けれど前世の世界のことは好きだ。

前世の世界でもあるし、なにより人が死ぬことは転生後世界より少ないのだから。

そして懐かしい、前世での幼馴染。

彼を引き取ってくれた、幼馴染の両親。

記憶はないとしても、大事な人というのは変わらない。

だからミフィアはこの夢が好きだった。

この体験を、実際にしていたことを知ることにはなかったが……

そのことを、彼は知ることになる。

欠片を失った記憶が戻るとき。

伝説の中で筋書きは動き出す

シナリオ

番外編？ 前世の夢と（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十七話 悪魔の村にて出会う闇

夕暮れ時。

真つ赤な日が、彼らを照らしていた。

夕日に照らされながらミフィア、ライナ、フェリスはルーナの街道を歩いていく。

魔法のことや、この夕日のことについて話しながら。

「だから、俺はルーナの魔法を『複写』はできても、『使っ』ことはできないんだ」

「へえ、信仰心が無いと使えないって不便だね。」

「だから無能だというのだ。」

「お前なあ……もうちょっとやる気が出るようなセリフは出てこないのかよ？　って前言ったけど」

「変態にかける言葉など無い」

「はあ……」

ライナがため息をついたとき、ミフィアはある看板を見つけた。右を指す看板には『レジット村』と書かれ、左には『ヤッシュバツク教会』と書かれている。

「見て、看板がある」

「ん？ …… レジット村にヤツシユバック教会…… 俺としては教会に泊まらせてもらった方がタダで泊まれると思うけどなあ。ルーナとローランドは同盟国だから紋章見せれば泊めてもらえんだろ」

ライナが言った。確かにそっちの方がお得だ。

だが、すでにあるものを見つけてしまったミフィアは何も言わない。

このことをフェリスに知らせればどうなるかは眼に見えている。

……と、フェリスも見つけたようであった。

「ん…… 確かにそうだな。ルーナとしてもエスタブルと併合したローランドとは争いたくないだろう。

だが……」

「だが、つてなんだよ。」

「その看板の下、見てみて。それできつとわかる」

ミフィアが指さした看板の下。そこには釘が刺さったままの板が落ちている。

余程急いで打ったのだろうか？ 追加の看板のようだが落ちてしまったようだ。

落ちた看板にはこう、書いてあった。

レジット村には、悪魔の呪いがかけられてしまいました。

よって、神による浄化がなされるまで、立ち入りを禁じます。

悪が払われるまで、近づかないように。

ネルファ皇国の国境を越えてこられた旅人の方は、

レジット村には向かわず、ヤツシュバック教会のほうへと、足をお運びください。

ルーナ帝国軍

「悪魔の……」

「……呪い？」

ライナとフェリスは顔を見合わせた。

相変わらず仲が良いなあ、とかミフィアは思っが口に出さない。

魔法によって身体強化をしたミフィアでなければフェリスにはかなわないのだから。

言ったら殴られるのはオチなので、心の中で言うだけにしておく。

「そういうわけらしい。ということで教会へGO……」

「お前、本気で言っているのか？ 神をも恐れぬ奴が、悪魔を恐れるわけがないだろう」

「……あゝ、やっぱりこういう展開になるんだね」

「ミフィア、お前ならわかるよな？ 俺たち国境超えたばっかで  
ちゃんとした休み取ってなくて……疲れてるだろ？ なのにこいつ  
はこんなこというんだ。どうにかして止め……」

「ごめん、パス！」

「裏切り者おおおおおおおおお……！」

「ん。というわけだ。行くぞ。」

こうしてミフィアたちはあっさり、悪魔の呪いがかかっていると  
いう『レジット村』に入ったのだった。

\* ・ \* ・ \*

「……ねえ、ライナ、フェリス」

「ふあゝ、なんだ？」

「つむ。」

「僕、今すぐダッシュで助けに行ってくる」

「何を？」

「あれ！ 早く行かないとまずい」

ミフィアが指さしたのは村の奥の方から駆けてくる少女。

まだ十歳にも満たない、子供だった。

ライナたちも気づいていたが、なにやら怒声しか聞こえなかった  
ので放っておいたのだ。

しかし、ミフィアには『千里眼』がある。

気になった彼は『千里眼』を使用した。

そして、起こっていることを知ったのだ。

さつきまではわからなかったことが、少女が近づいていくにつれ  
明らかにっていく。

「……………っ！」

二人同時に息を呑む。

当然の反応だろう。

少女は大人たちに囲まれ、殴られていたのだから……

手加減のない大人の一撃は、少女にとって凶器でしかなかった。

大きく吹っ飛んで、地に伏せる。

それを見た三人は立ち上がり、また走り出そうとしていた少女の  
もとに走り寄った。

「おっさん、こんな子供にグーで殴るんのは洒落になんねえだろ？」

「ああ！？ よそもんは関係ねえだろ！ あんまり邪魔すると、てめえらもぶちのめすぞ！ 俺たちがこいつのせいでどんな目に遭っているかも知らないくせに……ぐあ！？」

男の言葉は止まる。

ライナ男のが腕をひねったのだ。

明らかに起こっているであろう彼を、咎めようとする者はいなかった。

他の者たちはすでにミフィアとフェリスが気絶させていたからだ。

「あらら、痛かったか？ そりゃごめんな。俺らがあの子のせいでどんな目に遭ったかは知らない。けど……」

ライナはアザだらけの、栗色の髪をした年端も行っていない少女を見て……

声のトーンを落とした声で言う。

「……あの子のアザの方がもつと痛いだろうなあ。こんな腕の痛みより。」

なあ、答えるよ。殴っていた理由。

くだらない理由だったら腕が折れるかもな……」

いつも眠そうでやる気のないライナが声のトーンを少し落とし、そういうものの凄い恐怖だ。

そんなことを知らない男は仲間を呼ぶが、気絶しているその仲間たちに届くはずもない。

理由を聞くライナだがただわめくだけで何の情報も出さない男を

手刀で気絶させ、はふつと息をついた。

「というわけで、こいつらからも何も聞き出せなかったぞ？」

「うむ、予定通りだ。」

「さつきとなんら変わらなかった……」

気絶しているわめいていた男。

そのような姿を、この村に来てから何回も見ていた。

悪魔のことについて聞こうとすると、死にたくないくだとか山の悪魔に取り付かれたんだくだとかわめくだけわめいて逃げ去ってしまふのだ。

今回も同じケース。

似たようなことを言って何の情報も得られなかった。

そこで、先ほどの少女と眼が合う。

「……ええと、あ、あの………ありがとう」

少女がお礼を述べると、フェリスはこういう。

「ふむ。そう思うなら相応の礼を……」

「っってお金請求してるわけじゃないからね！？ フェリスが言っているとそう聞こえる……」

あのさ、泊まる場所どこかない？ って話なんだ。この国に着いたばっかで困ってて……」

「え、つてことは……あの、あなたたちつてこの国の人じゃないんですか？」

少女は驚いたように問う。

何かおかしいことでもあるのだろうか？

「ん。とある事情で諸国を旅している者だ。泊めてくれればそれ相応の対価を支払……」

「た、助けてください！？」

少女はアザだらけの腕でライナの足にしがみついた。  
悲痛な顔で叫んで……

「わ、私の幼馴染が殺されそうなの……だから助けてっ！？」

「幼馴染……？ まさか悪魔だとかいう……」

「違う……アルアは悪魔なんかじゃない！　なのにルーナ兵に捕まって……きつとこのままじゃ殺されちゃう……」

「悪魔……そうか。もうちょっと詳しく聞きたいな。何処か、楽なところで話してもらえる？　その方が君も楽でしょ」

「……………は、はい！」

こうしてミフィアたちは家へ招待された。

\*  
・  
\*  
・  
\*

招待された家は、酷い有り様だった。

食器は地面にたたきつけられたかのように割れたままだし、机はひっくりかえっている。

本棚なども倒され、中にあつたはずの本は散乱していた。

「……これは」

ミフィアが一つ声を発する。

すると少女はその部屋を見て茫然と呟いた。

「……二日前に、片づけたばかりなのに……」

「二日前？　ということは此処は君の家じゃない？」

「……うん。此処は前にアルアが住んだ家で……返ってきたときに汚なかつたら嫌だろうなって思っただけ……片づけたんだけど……すぐ荒らされて」

暗い顔で教えてくれる。

その顔を見ているとなんだかミフィアも悲しい気持ちになつてくる。

ライナが言った。

「ええと……取りあえず名前を聞かせてもらえないか？俺はライナ。でこっちの無表情なのがフェリスで、こっちが……」

「ミフィア。取りあえずよろしくね」

少女は聞くと、かしこまった感じで応える。

「えつとえつと、私はククと言います。ライナさん、フェリスさん、ミフィアさんよろしくお願いします」

「ん。なら本題に入ろうか」

フェリスが言ったところから、ククの話は始まった。

「……前、この村はいい村で……お母さんもお父さんも、アルアのお母さんとお父さんもみんな仲良しで……私とアルア毎日一緒に遊んでたんです。

平和な、良い村だった。本当に……なのに。」

ククは何処か寂しげだった。

今のこの村を見ても話に出てくるような良い村の欠片は見当たらない。

陰湿で、暗く、非道で狂っている。

廃れた村……

なのに、この幼い少女は言うのだ。

寂しげな、泣きそうな表情で言うのだ。

この村はかつて、良い村だったと。  
みんな仲良しだったと。

ミフィアはこの村の雰囲気を知っていた。  
恐れと、絶望と、猜疑心で覆われているこの雰囲気を……

一度、子供のころに『アルファ・ステージマ複写眼』保持者が出たという隣の村に立ち  
寄ったことがある。

そこはひどかった。

誰もが『複写眼』保持者だという、自分と同じくらいの少年を嫌  
っていた。

化け物だと、蔑んでいた。

それが、この村にもあった。

悪魔……

断言はできないが、そのアルファという少年はもしか……

ククは続ける。

「あの日から、この村は変わってしまったんです。

急に税が引き上げられて……これまででもつらかったのに、それ  
でも必死に税を納めてた。

でも、ついに収められなくなって……貴族……此処の領主さまが  
来て……」

ククの表情は話しているうちに暗くなっていった。恐怖の表情。  
恐ろしかったのだろう。

どの国でも、貴族は狂っている……

この歳でこんな表情をしているのを見たことがあるミフィアは、

思わず顔をそむけてしまふ。

……自分を見ているようだった。

正確には自分と、あの少女だが。

貴族に虐げられていて強かったが恐怖を感じていた彼女と。

『複写眼』……いや、『イノ・ドワーエ殲滅眼』を持っていたことで少なからず

自分自身に恐怖していた表情を……

違う少女されるとは思っていなかった。

「たくさんの兵たちを連れてきて……私の家だけが税を払えなかっただけなのに、いっぱい、いっぱい連れてきた。

まず、お父さんが殺された。

魔法で一瞬で上半分が無くなって……血がいっぱい出てきて……それに、わ、私頭が真っ白になって……」

ひつく……と声が聞こえ、ふり向いて見るとククは泣いていた。よく聞く話だった。

少なくとも、ローランドではよくある話だった。

よくあるが、聞くに堪えない話だ。

貴族がただ、快樂の為だけに民を殺す。

子供の前で……なんの躊躇とまどいもなしに。

狂ってる。

ミフィアは思った。

この国も、結局昔の狂ったローランドとの同盟国……

狂った貴族たちが生きる国なのだ。

「……吐き気がするな」

ライナが呟く。

神の力を借りているという、この国の魔法。

その神の力を使ってこの幼い少女の前で父親を殺したという。

神は愚かな貴族に手を貸し、人を殺させたという。  
なんて素晴らしい神なんだろうか？

……吐き気がする。

ライナの言うとおりだ。

そんな神、こっちが願ひ下げだ、とミフィアは心の中で呟いた。

ククは泣きながら、一生懸命に教えてくれる。

「それでも終わらなかった……次は私がつかまって、お母さんが  
叫んで……」

領主さまは笑ってた。

お父さんが死んで、お母さんが泣き叫んで、笑ってた。

次はその子供を殺せて笑って……私にも、魔法が……」

聞きたくない。

今すぐ制止の声をかけたかった。

でも、我慢する。

自分は違う。父はいないが、母は生きていて、少女のような地獄  
は味わっていない。

そんな自分がつらい思いをしてでも言う少女を止める資格はな  
かった。

「でもね……不思議なことが起こったの。

アルアが魔法を使った……使えるなんて言ってなかったのに。

あの時のアルアは……アルアじゃないみたいだった。

みんな怯えたような顔して、叫んでた……

それで、アルアの眼に、変な模様が……」

瞬間だった。

ライナの前のテーブルが、ガタンツと跳ねた。  
いや、彼が思わず蹴り飛ばしてしまったのだ。

ミフィアの予想は見事に的中。

アルアは、『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者だ……

模様、というだけだったから自分と同じ『イノ・ドゥーエ殲滅眼』の可能性もあるが魔法を使った時点で違うと言える。

自分以外は絶対に使えないらしいから。

何故、こんなにも自分は特殊なものを持っているのだろうか……

突然テーブルを蹴ってしまったライナに驚きククは聞くが、なんとかはぐらかして説明を続けてもらう。

「私の話は此処までなんです……

みんな化け物だつて、悪魔だつて言つて怯えて、領主さまも怯えていったん帰つたの。

でも今度はもっと多くの兵隊さんたち連れてアルアを連れてつちやつたんだ。

その後、また税が引き上げられて村は酷いことになつちやつた……みんな仲良かつたのに。

領主さまは悪魔を山で実験して、出世したんだつて。

それでまた笑つて……

逃げる人もいた。でも、すぐにその人も殺された。

領主さまはアルアを研究していることを秘密にするために村から出ることを許さなかつた。

それだけじゃない。この村に来た人にそのことを漏らしたら殺される。

たくさんの人が殺されて、税も上がつて……みんなおかしくなつちやつた。

それで全部、こうなつたのは私やアルアのせいだつてみんな言うて……」

「君は殴られていたと、そういうわけか？」

ライナが眼を細めていった。

ククは頷くがその表情は暗く、過去を思い出しているかのようだった。

ライナも『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者。そういう話になると必然的に昔に結びついてしまうのだろう。

それはミフィアも同じ。

彼は母を心配させないようにと村を出たが、結局その後は……と、ククがまた声を発した。

「でも……私を救ったせいでアルアのお母さんとお父さんは連れて行かれちゃった……」

「……聞きたいんだが、アルアが連れていかれたのはどのくらい前だ？」

「え？ えつと……八日くらい、前だけど……」

「両親が連れていかれたのは？」

「それは五日くらい前」

……まずい。

ミフィアは顔をしかめる。

ライナも同じ表情。

アルファ・ステイグマ

『複写眼』は大事な人が眼の前で酷い目に遭っていたりすると、暴走してしまうのだ。

暴走すると、辺りに死をまき散らすだけの悪魔になり下がる……

最も避けたいことだ。

だが、アルアの大事な人……両親は五日も前に連れて行かれたという。

これではもう、間に合わないかもしれない。

とつくに殺され、アルアは暴走し、殺されているかもしれない。そんな思考の中、フェリスの声が聞こえてくる。

思考を辞めさせるように。

「よし、ではいこうか」

「だが……」

ライナが制止の声を出そうとする。

しかしフェリスは動じずに言う。

「時間がないのだろうか？ 違うか？」

「……いや、うん。早くしないとまずい」

ミフィアは応える。

「では行こう。貴族からそのアルアとやらを拉致してきてやる」

「本当ですか！？ 相手は貴族なのに！？」

「うむ。いざとなったらこの二人を罠に使うしな」

「……って俺（僕）が罠かよ！」「」

思わずハモらしてしまった時、フェリスは一つ頷く。

いたずらか……と思うと、彼女は言った。

「ん。二人ともその調子なら大丈夫そうだな」

「……え」

「は……、って」

今は………どういう意味？

聞こうとして、またフェリスが言う。

「では行くぞ。山というのはあの、火が見えた山だろう？ わかっているのなら留まる必要はない」

「……そつか。」

「この時間から山登るのめんどいけどな」

「……私はっ」

ククが何か言おうとするが、ライナが遮る。

「君は此処の掃除でもしといてくれよ。アルアが帰ってきたら、汚いままじゃいやだろう？」

「……！ ですよ、私掃除してます！」

ミフィアはその声に頷きながら、微笑んで部屋を出た。二人も後に続いて出ていく。

目指すは、あの山の篝火がたかれていたところだ。

しかし、ミフィアは気付いていない。  
その微笑みが何処か、寂しげでライナたちを驚かせたことを……

第十七話 悪魔の村にて出会う闇（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十八話 奮闘する世界

木々が茂る、森の中。

そこである、異様なことが行われていた。

篝火に照らされた周辺で、兵たちが控えている様子が見える。それも、熟練の兵たちだ。

その中に奇妙な鎧をその身に纏った兵、魔法騎士もいる。

厳重な警備、どこの騒ぎで無いそこら一帯を。

「……………」

ミフィアは視ていた。

『千里眼』で“悪魔の子”らしき人物を探し、見つけ出す。

そしてこの光景を遠くから遠視していた。

ライナたちはいない。先にあちらへと向かったのだ。

ミフィアは控えということで植物の茂みに隠れていた。

状況を知ろうと、『千里眼』を発動させ、遠視する。

視えたのは、あまりにもひどい光景だった。

「……こんなものが、八日も……」

地獄の一言。

ククが言っていた少年、アルアらしき人物はとっくに見つけていた。

“悪魔の子”と言われた少年を。

その少年は、なにか大きな木に縛り付けられており……

転がされる。

ゴロゴロと、転がる大きな木に縛り付けられた少年は、自分の何倍もある重さに何度も何度も押しつぶされて。

その後、貴族らしき男に蹴りつけられる。

『千里眼』は眼だけで、耳までは強化されない。そのため、音声は聞きとれない。

だから声は聞こえなかった。

今回はそれが好都合だ。苦しそうなうめき声が聞こえてきていたとしたら、彼は怒りにまかせて飛び出していっただろう。

今はなんとか心が引きとめているから良いものの……

「これ以上ひどい仕打ちをされたとしたら……」

自分は自分を抑えきれず、突っ込んでしまうかも、と言う。

『イノ・フェューエ殲滅眼』保持者として生を受けたミフィアは、こういう光景は何度も見たことがある。

……いや、自分が受けていたのだ。その仕打ちを。

転生以前の記憶を持っていたとしても、きっとこの感情は抑えきれないだろう。

ちなみに今、彼はドラゴンクエストの魔法の『モシャス』を使用している。

野兎に変化している状態だ。

長時間使用するときついが、今はそんなことも言ってられない心境だから気にせず使用する。

減っていく体力で弱気になる心に叱咤し、彼は監視を続けた。

しかし、抑えている怒りは次のことで抑えきれなくなる。

「……っ！」

小さく漏れる、驚きと畏怖と怒りの入り混じった声。

彼の瞳が捉えた、その光景こそが感情が溶け込んだ声の理由。

この光景——それは、十歳にも満たない少年にとって地獄としか言えないものだった。

放り出された、血にまみれた一人の女。

傷だらけで、明らかに生氣を感じられない女。

その女を見て、アルアは目を大きく見開いた。

「か、母……うわあああああああああああああつ!？」

絶望の声。そう、悲鳴ではなく絶望の声。

こんな遠くからも聞こえてくる、大きな声だった。

まだ十歳にも満たない少年が叫ぶ、哀しい……

「……なんでこんなめに遭わなきゃならないんだ」

ミフィアは怒りに沈みそうな気持ちの中、絞り出すように呟いた。転生前、このシーンを読んだときに酷いな、と思うことはあった。本当にこの世界に行けたならば、止めたいなと思った。

しかしそう思った記憶は転生するための代償として失われている。あまりにも、皮肉な話だった。

現実としてこの世界にいくことが出来たというのに……記憶を失

い、阻止することは出来なかったのだから……

兵たちが見守る中、また一人連れてこられた男がいた。  
その人は、どこかアルアに似ている。

さつき放り出された女性はアルアの母親……つまり、この男性は。

「——っ!!」

声にならない叫び声。誰が発したのかと一瞬考え、自分が発して  
いたことに気付く。

……連れてこられた男性。きっとこの人はアルアの父親だ……  
まだ生きている。

そのことが、危険を招く。

そして二人は何かを話し出す。

父親の方が言っているのは、きっと最期のことだと自覚しての言  
葉だろう。

ミフィアは遠くの映像を睨みつける。

……見たくない。

無意識のうちに、その言葉が空気とともに漏れていた。

……見たくない。だから、止めに行かなければ。

だが、自分は敵を攪乱させるための役目をおっている。

此処を離れるわけにはいかなかった。

それに、同じ『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者であるライナの方が自分より強く思っているだろうし。

そんな彼が我慢しているのだ。だとしたら、今の自分に怒りを爆発させる権利はない。

自分が出来るのは、援護だ。

様々な魔法が使える自分に割り振られた役目を果たすのみ。

……と、考えている最中に二人が飛び出した。

ライナはエスタブルの魔法を使用し、一気に加速する。

ローランドはルーナと同盟国なので、自国の魔法は使うと危険だ。その理由から今は亡きエスタブルの魔法を使ったのだろう。

フェリスは脳のリミッターをはずし、見えないほどに加速しているライナをも超える速さで敵をなぎ倒していく。スピード

「……なんの作戦も立ててないように見えるけど……」

立てた作戦はミフィアの援護くらいだが、他の作戦は皆無と言えた二人である。

他は強行突破とでもいうようなものだろう。

その作戦（？）は彼らお得意のものであるし。

けど、魔法騎士団もいる中この作戦は駄目なんじゃないかと思う。まあ、それを支えるのがミフィアの役目なのだが。

「はあ、仕方ないなあ。これじゃあさっきまでうじうじしてた僕が馬鹿みたいじゃないか。」

……援護するよ」

正直魔法をダブルで使用するのは気絶するほどにしんどいのだが、これも唯一の作戦のうちだ。しょうがない。

ということでミフィアは兎姿のまま魔法を唱える。

野兎の周りに魔法文字が連なつた魔法陣が巡るというある意味神秘的な光景が一瞬完成し、すぐに力は解き放たれた。

「『ライドイン』っ！」

聖なる力で呼びだされた雷雲がルーナ兵たちの真上に移動し、雷鳴を轟かせ稲妻が全体に落ちる。

敵全体の魔法なのでライナたちには当たらないが、もしものことを考えて避けたようだった。

ルーナ兵たちは感電し、地面に倒れ伏す。

……魔法騎士以外は。

「やっぱり魔法騎士は駄目かあ。きつついなー」

一言つぶやくと、怯えきっている貴族の男が叫ぶ。  
その大声はこちらにも届いた。

「……敵があつちにもいる！  
探し出して殺すか捕らえるかしろっ！？」

言葉とともに一人の魔法騎士がこちらに向かってきた。  
しかしミフィアは動じない。なぜならいまは兎の姿だからだ。  
兎が魔法を使えるわけなどないのだから。

少し経った頃に音もなく魔法騎士のひとりがやってきた。

「野兎……？ くそっ、逃がしたか！ 必ず捕まえて拷問してやるっ」

男はミフィアを見て、そう吐き捨てるように言った。

……本当に聖職者なのかと疑問に思ってしまう。

だってそういう雰囲気が無いというか……思いつきり戦場の人っていうかなんというか。

まあ、この世界の魔法騎士など戦場の化け物なのだからそうなのだが、なんだか納得できなかった。

男は自分に背をむき、走り去ろうとする。

ミフィアはその隙を逃さなかった。

魔法を直で当ててしまうと危険なので、半分人間に戻る。

こんなことできるのか、というと出来る。その分体力の消費が激しくなるのだが、仕方ない。

姿は完全に人そのものだが、能力は半分変化している兎の力も持っている。

すなわち、跳躍などがかなり凄いことになる。

ミフィアは双剣を生み出して構え、結構遠くまで行ってしまった魔法騎士のところまで跳んだ。

さすが魔法騎士、というべきか。気配を感知して避けられた。

「貴様……いつからそこにいた」

「ずっと前から。僕、君に見つかってただけだよ？」

「なっ、そんな人物いなかった」――

言いきる前に男の背後に回り、剣の柄を首に下ろそうとした。しかしまた避けられる。

「……はあ、なんで避けられるんだろ」

独りで呟く。男は顔をしかめ、手を組んだ。

ナニゴト？　と思つて剣を構えると、魔法騎士は呟いた。

『点在する神に請う。憐れな我らに、魔を撃つ光を』

瞬間、光が弾けてこちらに向かつてくる。

光は無数の針のようになっていて、明らかに当たったらずいこ  
とになる。

「……危ないじゃないかっ！」

『ニフラム』

魔法を唱えると、無数の針は光の彼方に消し去られた。

ニフラムという魔法は、一部の魔物やらを光の彼方に消し去る魔法である。

もちろんこの世界には魔物なんて存在しないので、あまり使わないのだが今回は役に立った。

「お前、その魔法は――っ！」

言いきられる前に、ミフィアは剣の柄を首筋にたたき込む。

これで戦闘は終了した。

一気に三回も魔法を展開したので目眩がするくらいに体力が削られた。

それでもその後を見ようと、『千里眼』を使用したところ。

「……なっ」

その映像は年端もいかないう少年にはつらいどころの騒ぎでないものであった。

アルアの父親は自分が戦っている間に……

殺されていた。

背中に突き立てられた槍のようなもの。そこからは大量の血が流れ出しており、その身体の持ち主の表情は息子を守れなかった無念に彩られていた。

地獄。

鮮血で染め上げられた地面。

そして、自分の顔に着いた父親の血……

それらの状況が重なり、混ざり合い少年を絶望のそこまで突き落とした。

鎖で縛られた木が、アルアの身体ごと持ちあがる。

少年は大きく目を見開いた。

涙を流した、その悲しさに塗れる表情で。

瞳には、朱の五方星。五方星。五方星。

増殖し、絡み合い、少年の黒瞳は真っ赤に染まる。

『あ、あ、あああ、あああああああああああああああ

ああああああははは……」

アルファ・ステイグマ  
『複写眼』の暴走。

暴走すると持ち主は壊れたように破壊を繰り返す、大量虐殺者になり下がる。

そのことから、こついわれるのだ。

“化け物”、と……

ミフィアがいる森にもはつきりと聞こえる、悲しさと絶望が混じり合った笑い声。

それに、彼は走り出していた。

「……………つさせない!!」

兎の力で強化された、とんでもない距離を渡る跳躍。

体力の減少に伴い倒れそうになる身体を精神力で支え、ライナたちがいるところへたどり着いた。

ふらつきそうな身体を抑えながら、二人のもとへ駆ける。

「ライナっ、フェリス!!」

アルファ・ステイグマ  
『複写眼』の暴走を止める術<sup>すべ</sup>を知るはずのライナは兵によって足止めさせられている。

フェリスは兵を薙ぎ払うが、感電から回復した兵たちが襲いかかり道を開けない。

ミフィアはその光景を一瞥し、半分を下回っている体力をさらに削った。

『イオラ』！！

爆発する。

凄まじい音をたて、敵の兵たちは地面に伏した。

ぎりぎりですませてはいない。だが、無事とは言えない状態になっている。

偶然当たらなかった兵たちは怯えきった表情を見せ、その隙にフェリスが剣を薙いだ。

「いけ、ライナ！」

フェリスが叫ぶ。

ライナはその声に反応し、笑いつづけるアルアの腹に拳打を叩きこみ、目を閉じさせた。

すると笑い声は消え去り……

ライナは意識を失って倒れるアルアを、そっと支える。

その後ライナがフェリスと自分に言うが、聞こえなかった。

安堵の気持ちで気が緩み、白み始めている意識を引きとめるのに精いっぱいだったからだ。

なんとか二人の後に続くが意識はそこまで持たなかった。

フェリスが何処かへ出かけ、待っているときに彼は意識を失った。

第十八話 奮闘する世界（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第十九話 選ばれた光

誰かに呼ばれた気がした。

まっ白い空間。

なにもなく、寂しい空間。

なのに何処か温かみを感じる、その世界は見たことがあった。

夢の中……だけじゃ、ない。

本当はないはずの記憶。時間。

生まれる前の

—— 生前の、  
“刻<sup>とき</sup>”

「……生まれる前に、来たことがある？」

呟く。

重いはずの身体は、何故か此処では軽い。

確か自分は、アルア救出作戦で魔法を連発しすぎて気を失った。

目覚めるはずの場所は此処ではないはずなのに、自分は今、此処にいる。

……生まれる前に此処に来た、ということを持った理由はわからない。

ただ、此処にいる。誰かに呼ばれて。

いや……誰かじゃない。

《神姫<sup>エルフラ</sup>》だ。

知っているはずなのに、どうしてわからなかったんだろう？

<……それは貴方が思いだし始めているからです>

白い世界に響く、聞き覚えのある少女の声。

なんでだろうか、いつもより淋しげな声に聞こえる。

それに、“思いだし始めている”？

自分はライナと違って全ての記憶を持っている。

決して記憶喪失なんかじゃない……

<違う。違うんです、ミフィア。

貴方の言うことは間違っではない……けれど、違う。

貴方が思いだし始めているのは……思い出し、始めているのは>

ためらうかのように言葉を濁す《神姫》<sup>エルファ</sup>。

その理由がわからず、多くの予想を頭の中に並べる。

並べる前に、頭の中に少女の声が響き渡った。

<……生前。前世の記憶>

「……………前、世……………」

多くの想定を並び終わる前に飛び出た“真実”。

並べきれなかったために驚かないための受け身が出来なかった。

なんで、僕が……僕だけが、そんなことに？ と俯き加減に呟く。

そして、その思考に反応して神の血を引く少女は告げた。

「私が転生させたから……いえ、世界が生前の貴方を選んだ」

「え、そんなに転生前の僕は凄かったの!？」

「> かつて、ええ。そこそういう反応はしないでしよう!？」

「……なんか突っ込まれてしまった。

確かにシリ阿斯な場面でこの質問は少し緊張感を奪ってしまうだろうけど。

普通なら「……嘘」だとか言う場面だろうし。

でも、ミフィアはそれを選ばなかった。

何故なら夢の中で……夢とは思えないほど、自分は温かみを感じていたから。

きっとあの夢が、自分の前世の記憶の一片なのだろう。

だからきつと……記憶を失った心が、わずかながらにも前世の家族だとかを恋しがっていたのかもしれない。

「僕は少しでも予想してたんだ。さっき、生まれる前に来たことがあるって感じた時から」

驚きの気配。

エルファが、驚いたのを感じた。

普通はそんな思考をしない。だから、彼女は驚いたのだろう。

これは転生後の時に生まれ持った勘の鋭さや思考能力によるものだろうか。

ミフィアは続ける。

「転生……そんなことが有り得るのか、って考えももちろんあったよ？ それでもこの世界は魔法だからだからないって言いきれないそれに、勇者の遺物という存在も在った。だから有り得るということも思考の中に入れて予想していた」

<……なるほど。自分が知っていた要素が予想の一つにでも入っていて、答えが要素の一つに当てはまるならば驚くことは少ない……そういうわけですか。だからライナたちに出会う前までの貴方は常に冷静で驚くことはなかった>

「今は別だけどね……まあ、冷静でいられるところも驚いた表情にしてるけど。あまり冷静だと怪しまれるしね」

<……転生前とはまるで違う策士に育ったものですね。かなり天然で馬鹿っぽい人だったのに……いや天然なのは変わりませんが>

「それで、なんで前世で僕が選ばれた？ 天然では……ば、馬鹿っぽい人なら世界が選ぶとやらも適応しないと思うんだけど」

<普通はそう。何の理由もなしに、こういう人間は選ばないでしょうね……けれど違う。>

生前の貴方は既に、普通ではなかった。>

落ちてくる声に、今度は反応しきれなかった。  
穏やかな表情に緊張が走る。

ここは予想きれない世界……領域なのだから。  
世界という大きな存在が持つ“絶対領域”。

その絶対領域に、彼は足を踏み入れることとなる。

—— いや、生前からこの領域には足を踏み入れさせられていたのかもしれないのだ。

そのことを知るために、絶対領域を知る少女の言葉を待った。

<貴方は……光だから。大きな光を秘めた、特別な存在だから。>

光—— 自分は光なのだという。  
何故そうなのか。前世の記憶を失っている今の彼ではわかることはなかった。

それはどういう意味だ—— 問おうとする彼に、別の声が聞こえる。

「ミファイア？ おーい起きろ」

間延びした聞き覚えのある眠そうな声。  
ライナの声だ。

今眠っている状態なのだからきっと外から声をかけられているのだろう。

フェリスがついたのか？  
起きた方が良さだろうか……フェリスに殴られかねないし。

<ふふっ、お迎えが来たようですね？ リューの大事な……いえ、これは関係ないですね。

これ以上の話は話してはいけないんですよ。だからちょうど良かったです。

あ、それと私の力が強くなったのでほんの少しならそちらの世界に行くことが可能になりました。ただし貴方の体をのっとなって、ですけどねっ！>

妙に楽しそうなエルファの声。男の体をのっとなって何が楽しいのだろうかと疑問を持つミフィアである。

後に慌てて「ああいう意味じゃないですからね!？」と弁解してきたが、今は思考の隅に留まらせるのみとした。

「んじゃ、現実に戻るね？ お話はまた今度……ちゃんと話してもらお。じゃね!」

声をかけ、姿の见えないエルファに向かって微笑んだ。

「……ミフィア。起きたくないなら、永遠に眠らせてやろうか」

「わ、ちよっ！ 早く起きろミフィア！？」

慌てるライナをよそに、フェリスは剣を抜いて振り下ろした。  
ターゲットは頭……急所である。

当たったら死んでしまうであろうその場所に、躊躇なく剣を振り下ろす美女がいた。

ヒュゴッ！

風を取り巻いて危なげな音を出す刃。  
その刃を、押さえるものがある。

……もちろんミフィアだ。

現と虚から戻ってきた瞬間に自分に剣が振り下ろされるといふ事態を目撃してしまったため、慌てて防いだ次第だ。

ちなみに押さえ方と言えば、見事な真剣白刃取りである。

フェリスはそれを一瞥すると小さく舌打ちした。

『小さく』と言えど舌打ちなので、聞こえる。

ミフィアはそのことに呆れた表情を見せた。

「いくら起きないからって、刃をこっちに向けての攻撃はなしでし

よ？」

「ふん、私には関係ないからな。起きない奴が悪いのだ。せつかく私が働いてきたというのに……」

「……？ あ、そういえば何しに出かけたの？」

「ふふ。あっちを見る」

フェリスが指さした先には、気だるげな雰囲気のライナ……ではなく、なにやら高そうな装飾がされた馬車があった。

豪華過ぎて、普通の農民なら目を回してしまうくらいなお高い馬車。

……いや、普通なら目を回すなんてことは有り得ないだろうが……  
ともかく、その高そうな馬車が普通に此処にある。

「……その馬車はどっから」

「わざわざ私が調達してきたんだぞ。だんごかあの白い餅のような菓子を出せ」

餅？

そう言われて首をかしげたミフィアだが、すぐに「ああ」と呟いて納得した。

白い餅。きっとそれはミフィアお気に入りの『雪〇大福』のことだろう。

体力も戻ってきて、お腹も減ってきたということでミフィアも食べることにした。

馬車の中でしばし休憩。

ミフィアは魔法を使うと体力が削れるということを既に話してあるので優先的に馬車の中だ。

アルアも寝ているのでライナとフェリスは外でということになる。そこでピクニックシートのようなものを生み出す。

『式編み』はそこまで重要性のないものなら代償はほぼ無いに等しい。

あくまで“ほぼ”なのではいはい使うわけにもいかないのだが。

「ほゞいつとなつ。こんくらいならあんま体力の消費は気にしないで良いから生みだしちゃう」

「便利だなあ……ほんとお前なんだよ」

「ふむ。私もその能力は欲しいな。だんごをたくさん生み出せる」

「話がずれてるぞ……」

「関係ない」

二人が話している間にだんごや雪〇大福を生み出し、配る。  
こうして休憩をとった。

「おお！ これは結構美味いな……これは何という」

「え———つと、雪○大福？」

「ゆきまるだいふくというのか？」

「……違っけど、都合があるので伏せます」

「誰に言っているのだ」

「気にするなフェリス……これは色々と大変なんだ……」

「？ うむ」

それから数分後。

ミフィアは馬車に乗ったまま、シートもろもろを仕舞ってはふつと息をついた。

フェリスが御者の席に座る。

ライナが乗るまで待つのかと思いきや、フェリスがなんでか鞭を振るって叫んだ。

「ゆけ！ シルバー！」



毎日が幸せだと強く思う、光が。

欠片を失った光にうつるものは、幸せか。はたまた絶望か。  
そのことを知るものは、誰一人として存在しなかった。

第十九話 選ばれた光（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第二十話 暗躍する“規格外”の存在”

揺れる馬車。

馬を全力で走らせているかのような、荒っぽい振動が伝わってくる。

……まあ、それもそのはず。

「ふふ。さあ踊れ踊れ罪人め。死の踊りを踊り狂うが……」

「だああああああもう!? って、だからなんの設定なんだよそりゃ!?!」

フェリスが馬車の御者をしているライナを、剣で突っついているのだから。

振動がもの凄いののは綺麗に整備されているとは言えない、でこぼこな道のこともあるのだろうが、きっと御者が<sup>ライナ</sup>必死でいることもあるだろう。

取りあえず、その光景をミフィアは一瞥してすぐに眼を逸らす。

……正直、この光景を他の人に見られたら恥ずかしいとしか言いようのないものだからだ。

ミフィアは他人ではない。が、ローランドの戦力で上から数えられるほど強い二人がこんなアホらしいことをしているのを見る気力は正直なかった。

魔法連発で体力がないのだ。ライナの魔法を殲滅眼で吸収した今

も、身体は本調子ではない。

いまだに目を覚まさないアルアが天井に頭を打ったりしないよう抑えながら、半分寝ていたというところである。

いや、半分ではなく八割は寝ていたと、頭の中で訂正するが……正直あまり意味がない行為であった。

とにかく、フェリスがライナをいじっているせいで馬車は騒がしいが、ミフィアは特に話すこともなく休んでいたところだ。

途中で追手が攻撃を仕掛けてきたものの、あっさりライナが魔法で返り討ちにして終わりだった。

フェリスがアルアの保護を引き受けてくれるというので、預けて一時的に眠りについた。

そして時は、荒っぽく揺れる馬車とともに流れていく……

\*  
・  
\*  
・  
\*

待ち伏せる兵たち。

それを、一人の男は見ていた。

二十代半ばというところだろうか、まだ若い。

雰囲気はどこか異様なものと言える。この世界には何人といない、珍しい水鏡の髪色。転生者<sup>ミソリイダ</sup>の目の色と同じ、存在しないはずの色がその異様さを引き立てているように見える。

長い前髪に隠れ、顔は見えないが覗く口元で顔は相当整っているということがうかがえた。

以前、あふれるような緑の草原に佇んでいたこの男は、何故かルーナの村に訪れていた。

村……悪魔のとりついたという、レジット村に。

その村にある、何の変哲もない家に何人かの兵が待ち伏せるかのように立っていた。

それも軍部で精鋭と言われる魔法騎士団までいる。

とても怪しいこの光景に、妖しさを漂わせる男は足を歩ませた。

「……っ！ 誰だ、貴様……」

「情報では二人の男と一人の女という話だが……」

「此処は現在立ち入り禁止だ！ 立ち去れ。さもなくば、命令により貴様の命を断つこととなるだろう……」

威厳たっぷり、殺気たっぷりの魔法騎士に何故か吹き出しそうになる男。

わずかに見えた翡翠色の瞳が、彼の“天界術式”で色を変えられていることを知る者はいない。

“天界術式”——それは、この世界にはないもの。

決して人間の手ではなしえない、“神”の術式だった。

あつまり使用している彼に、敵う人間など片手の指の数に収まるくらいである。

勝てるかどうかは謎でしかないが、とにかく彼は化け物並みに強かった。

そんな彼に、魔法騎士がまともに戦って敵うはずがない。

普通なら驚愕そのものだ。しかし、《神姫》<sup>エルフデ</sup>が自ら称する“規格外の存在”であるこの男に常識は通じることはないのだ。

「何が可笑しい……我らを何と心得る？ この国の精鋭と謳われる魔法騎士だ。たかが一般人に、我らを笑うほどの権力は無いに等しい。」

無論逆らう権利もだ。忠告を聞き入れず留まるばかりか馬鹿にするその精神を、身体もろとも断ち切ってやろう」

「いやいや、馬鹿にしている気はないさ。俺は少し、待ち伏せはするんじゃないかと思ってるね」

「その言い草が我々を侮辱していると思わせているのだ……そしてお前の意見を聞く理由など我々にはない。残るのは結果のみ。お前は命令の処罰すべき対象だ。此処には何人たりとも近づかせないようにと言われている……悪魔を連れていった以外はな！」

魔法騎士数人が魔法を展開し始める。

手を組み、詠唱を始める魔法騎士たち。

その間に集まる金の粒子は魔法を使えない者たちでも見えるほどに密集し、風を巻き起こそうとしている。

一般人では目で追えないほどの展開速度。早口で詠唱する彼らの

魔法を避けることは不可能としか言えない精密さと速さが宿っていた。

しかし規格外の存在である彼は、気にもせずに……構えもせずに、見ているだけだった。

『点在する神に請う。憐れな我らに、救いの風を』

生みだされた魔法の風が、彼を切り刻まんと迫り来る。

……だが。

「……こんなものが、国の精鋭？ 笑う気にもなれないくらい弱いなあ」

男が払うように手を移動させたかと思ったら、風はあっさり消滅してしまう。

瞬間だった。国で最強と謳われているはずの魔法騎士団の顔が、驚愕と恐怖に彩られたのは。

「……な、何だこいつ」

「そんな、有り得るはずがない。アンチマジック反魔法展開すらしていないのに、打ち消され……」

驚きと恐れ。その二つが混じり合った声を遮って、謎の男は言っ

た。

「“天界術式”。お前らには知り得ない未知の術式だ。これに敵う魔法は、無いと言える」

その声が静かに響き渡ったとき、魔法騎士たちは向こう側にいる仲間に助けを求めようとしていた。

だが男は、させない。

これ以上敵が増えても別に大丈夫だが、目的があるためそうさせるわけにはいかなかった。

「させないよ。……ヒカリニダカレテナムレ」

不思議な声で放たれた呪言<sup>じゆいご</sup>。その声が聞こえた瞬間だった。魔法騎士たちが倒れたのは……

倒れた男たちの周りには、光が生き物のように動いていた。先ほどの呪言によるものだろう。

「……うん、コイツラめんどい。早くミフィアたち来ないか……それじゃないと他の魔法騎士たちにこれがばれてしまうぞ。

取りあえず……シタガエ？　あまり使わないから変なのになるな。」

また呪言を呟くと、倒れたはずの魔法騎士がぐぐつと持ち上がり、

意思を持つように立ち上がる。

男は「おお、成功成功」と言うと、魔法騎士たちをそのまま操って移動させていく。

場所は人が行かないような茂みの奥。

彼は操った魔法騎士たちと、気付いていない残りの魔法騎士を見て、にんまりと笑みを浮かべた。

その時は、ちょうどミフィアたちが馬車を下りる頃だった。

第二十話 暗躍する“規格外”の存在”（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第二十一話 思いを巡らす、その世界で

「うつわ……やっぱ思った通り、ルーナ兵の奴ら、待ち伏せしてるよ……」

眠そうな、青年の声。

もちろんライナである。

ミフィアたち一行は、馬車から下りてククの家に向かっていたところである。

そして、その家の目の前についたところだ。

しかし、家の周りには兵、兵、兵。

しかも魔法騎士までいる。

なんでこんなに厳重警備状態なのか。

その理由は、簡単にわかる。

……『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者である、アルアの幼馴染のククがいる家で待ち伏せ状態。

ルーナ兵は、アルアの大事な人間がククだと知っているのだろう。だから、人質に取る。

こいつが欲しければ、その悪魔を渡せと言いたいのだ。

しかし、その先には“死”しかない。

結果的にアルアは死に、ククはアルアを暴走させるため殺される。

いいことだなんて、一つもないのだ。

だから、ミフィアたちは手を差し伸べに来た。

自分たちは知っているから。『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者がどんな扱いをさせられるか。

フェリスはわからないが、ライナとミフィアは知っている。  
体験、しているのだから……

『暴走して見せるよ、化け物』

『さつさと暴走しろ、化け物』

ばけものバケモノ化け物。

そう、誰もが言った。

そして聞こえるのは研究員たちの卑屈な笑い声。

その声を、その言葉を聞いて、何度泣き叫んだろうか。

そんな体験を、アルアにさせるわけにはいかない。

こんな、十歳とも行かない少年に卑屈な声を聞かせるわけには。

だから、助けるために此処へ来た。

だが、そのことを兵たちがさせてくれない。

だからこそミフィアは、内心怒りの感情でいっぱいだった。

なんとか生まれ持った冷静さで平静を装っているものの、一つ心の皮をめくれば怒りというつきの火山が噴火寸前のところなのである。

「……あれって、俺たちを待ち伏せしちゃってんだよね？　しかも

魔法騎士団いるし」

「そうだな」

「だとしたら、凄く危険じゃね……？」

「だが、助けなきゃいけないのだ」

「おお、お前にしてはやけに自発的だな。どうしたんだ？」

「ククを助けなければ、アルアを助けた礼の金がもらえないだろうが！」

「……フェリス、それはちょっと駄目。」

怒りをセーブするのに苦労していながら、聞こえてきた会話に入るミフィア。

フェリスはミフィアの一言を、理解できていないように言った。

「何故だ？」

「……人間的に」

「人間的に駄目なのは、この変態色情狂マスター・ライナ・リュートのことだろう？」

「ってなんで俺が変態色情狂マスターなんだよ！」

「ん。その背に背負っているアルアの父親のくせに、「お、俺じゃねえぞ！」と叫んで自らの妻を突き放し、妻子を捨てて他の女を襲うというお前をどうすれば変態色情狂マスター以外で呼べる？」

「だああ！俺はそんなことしてないっつ。それにアルアの父親じゃないって何回言えばわかるんだよ！」

「その珍しい星模様が浮く瞳。それはお前から遺伝したとしか考えられ……」

「んなこと言ったら、世界中の『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者を俺が生んだこと

になるぞ……」

「お前は色情狂マスターだからな。吐く息だけで女を妊娠させ、自らの祖先を残していく……それだけでは飽き足らず、お前は女を襲ってまた子供を……」

「だからお前は一体何を……」

「そうかライナ！？ わかったぞ！ 私は騙されやしない……！」

「……今度は一体何の話が始まるんだ？」

「お前は道を歩く女ではさらに飽き足らず、身近にいる美少女天使フェリス・エリスちゃんを襲おうと近づいて……」

「……………」

「……どうしたの、フェリス？」

やけに饒舌なフェリスが、急に言葉を止めたことに不審げにミフィアは訊く。

すると顔を向けたフェリスの頬は赤くなっていた。

「……じよ、冗談だ」

「……またそれか。」

どうやら、いつも通りの様だった。

まあこれは正直彼女の自業自得なので、放っとく。

それよりも兵だ。魔法騎士二人に、魔導兵とみられる兵たちが目的であるククの家の前に立っている。

その対応をどうするか……

「……取りあえず、どうしよう。」

「だよなあ。俺はアルア背負ってるし、誰かさんのせいで寝不足だしなあ。」

ライナがじと目でフェリスを見る。

フェリスはいつもの無表情に戻った状態で、「ふん」と言ったのみだ。

その二人の様子を見て、ミフィアは「はあ」とため息をつくしかなかった……

どうしてこんなにも、呑気なのだろうか。

呆れを通り越して、尊敬すら覚えるミフィアであった。

「とにかく、どうしよう。」

「その、誰かさんが行けばいいんじゃないの？」

「ん？ その誰かさんとは私では……」

「はいはい、そう言う話は終わりっ！ 話が進まないよ！」

「う……」

「むう……」

二人は似た者同士だな……と、思うミフィア。

仲がいいのはいいのだが、その中に何かとものを煩わせるのはやめてもらいたい……と、後に彼はため息交じりに語ったという（ちなみに語った人はシオンだったりして、後でシオンがそれで二人をからかったというのは秘密だ）。

「で、どうすんの？」

心なしか二人に訊くミフィアの言葉に温かさが消えていく気がする。

そのことになんともなくまずい、と感じたのか、ライナは言う。

「あゝ……やっぱね、戦力的にフェリスが行くべきだと思うんだが……これ本音。」

ミフィアはその様子だとまだ本調子じゃないようだし、俺も寝不足とアルアの保護で動きが鈍い。

一番適役なのは疲れてないお前なんだよなあ……」

「ん？ 私だつて疲れているぞ？」

「おいおい。俺が馬に鞭振るつてるときには寝息が聞こえたんだが？」

「きつと変態の空耳だな」

「だから！ 俺は変態じゃな……」

「お前ら何者だ！！」

「「「……………」」」

二人（主にライナ）が大声でしゃべったせいで、ばれてしまった。これは完全に二人（主にライナ）が悪い。

ミフィアは小声で話していたが、二人（主にライナ）は完全にいつも通りの音量だった。

「……なんか、俺だけ酷い悪口言われてる気がしたんだが。」

気にすんな、とミフィアは心でライナに告げたという……

まあ、そんなことは置いて兵に見つかってしまった。

どうするか？ と体と同じく本調子ではない脳を使って考え始める。

……と同時に、フェリスがゴン！ と敵を殴る。

もちろん剣で、だ。

もちろん剣というのはちょっと色々不思議なものだが、それもいつも通りなので放つとく。

ライナも動いた。気だるそうだが、それでも彼に追いつける人間は此処にはいなかった。

魔法騎士を除いて——だが、その魔法騎士はフェリスが対処しているので今はライナに敵うものはいなかった。

しかし今は、だ。

ライナとフェリスが魔導兵を脅している中、ミフィアはある気配を感じていた。

殺気だ。それも、大きいものだ。

しかし最小限にとどめているのが、辛うじてわかった。

その気配は、動く。

ミフィアは警鐘を鳴らそうとする。だが、その前に魔導兵の首が

飛んだ。

「な……」

ライナが言えたのは、そんな声。

本調子ではないミフィアには見えなかったが、何かが魔導兵の首を斬り裂いたのだ。

そしてその何かは、ライナの首へと迫る。

「まず……って……」

よけようとするも、間に合わない。

凄まじい勢いで、何かはライナの首へと――

ミフィアはとっさに、双剣の一つを生み出して何かへ放つ。

するとなんとか何かは剣に弾かれ、軌道を変えた。

フェリスは何かに当たらないように、ライナの髪をつかんで引き倒す。

何かを言おうとするも、その前に信じられない光景が見えた。

ククの家が大きく斬り裂かれたと思うと、そこから氷が音を立てて出てきたのだ。

ミフィアは驚くも、持ち前の精神ですぐに落ち着く。

落ちた双剣をとると、臨戦態勢をとった。

そのまま、何かは魔法騎士の首までも刎ねた。  
首の断面からは、血が出てこない。  
なぜなら凍りついているから……

きっと、これはライナの言う、『勇者の遺物』によるものだろう。  
信じられないほど強いライナですら、追いつけない速度もその遺物の効果ならば納得がいく。  
凍りついた周りを見て、それからライナが言ったのは。

「最悪……」

その一言だった。

「……さて、ここからが本番。少しは思い出せばいいが……ミフィ

ア

“規格外が存在”が、楽しそうに笑った。

第二十一話 思いを巡らす、その世界で（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第二十二話 魔眼狩りの使者

ライナが嫌そうに言った時、破壊された家の壁から真つ青なものが煌めいた。

それは、青い何か。その何かは、見たことのない無機質な物質。

そして、二人の男女がそこから現れる。

珍しい、桃色の髪の男女だ。

一人は、青い物質で構成された大きな鎌を持つ、無表情の少女。  
一人は、長身で、どこか気弱そうな、にこにこ穏やかな表情の男。

いつか見た、兄弟だった。

しかし、表情豊かで饒舌な少女……確か、クウといっただろうか？ は、ずっと喋らず無表情だ。

大きな鎌——恐らく、勇者の遺物——をずっと構えている。

無表情のせい、前はわかりずらかった楚々とした美貌が冷たく際立っていた。

そして、もう一人。

無表情のクウに対し、にこにこしているクウの兄、スイ。  
彼もまた、クウと同じく茶……というよりは、若干桃色がかっている珍しい色合いの髪をしていた。

ミフィアはその色を知っている。

その色の髪を持つ人間がいる、唯一の国。

……ガスターク。

以前、ミフィアに一人の男が接触してきた。

そいつも彼らと同じ、珍しい色合いの髪をしていたのだ。

急に思い出した記憶。それは、彼らがガスタークという国の出身であることを教えてくれた。

その記憶とは、《<sup>エルファ</sup>神姫》が言う自分の前世の記憶だろう。何らかの形で、この世界を知っていたようだ。

取りあえずその、ガスタークという国の者たちは危険らしい。

記憶は告げる。彼らも、危険な人物であると。

自分にも害をなす……倒しておかないとまずいような、相手であると。

「やあ、ライナさん。お久しぶりです」

「俺は会いたくなかったけどな……」

「そうですか？ つれないですねえ。僕たちは貴方に興味がありますが。」

貴方の『<sup>アルファ・ステイグマ</sup>複写眼』……それは、他の『<sup>アルファ・ステイグマ</sup>複写眼』とは違う。あまりに

も強大すぎる力を有している

僕たちはいくつかの『<sup>アルファ・ステイグマ</sup>複写眼』を結晶化して狩ってきましたが、貴方みたいなケースは初めてだ……僕の<sup>ルイルフラグメ</sup>忘却欠片、『エレミーオの櫛』ですがまるで太刀打ちできなかった」

結晶化？ 忘却欠片？ 『エレミーオの櫛』……ライナの、『複  
写眼』？  
アルファ・ステイグマ

何故、そんなことを言うのだろうか。

それに、ライナの『複写眼』アルファ・ステイグマのことは知るはずはない、のに。  
何故知っているのだろうか……

そう、思ったときにフェリスがこっそり教えてくれる。

ミフィアが二人のもとを離れているとき、シオンから手紙が来た。  
イリスが持っていて、その手紙はだんこの箱の裏側に貼ってあつ  
たのだという。

しかし、フェリスは気付かずその箱を、ポイ。

イリスが頑張って内容を思い出した結果、竜がどーんと森の中  
に生えたあの事件関連であることが判明。

その竜が消えてしまったというところまでわかってからライナた  
ちは自己解釈し、消えてしまった理由を調べろという司令だと思っ  
て森へ向かった。

実際はその逆、二度とその森には近づくなというものだったとい  
うのに。

結果、竜を消した人物……スイとクウと出会って、戦闘となった。

ライナは『複写眼』アルファ・ステイグマを使用し、ばれてしまったのだという。

二人は『複写眼』アルファ・ステイグマなどのことをよく知っているようで、『複写眼』アルファ・ステイグマ

の結晶とやらを取り出し、放り投げた。

共鳴しろだと言って……

結晶は光り、ライナの瞳には激痛が走った。

暴走……覚醒させないと、結晶はえぐりだせないとスイは言う。

ライナは暴走し、スイは彼を殺して結晶をえぐりだそうとしたが、  
彼の『複写眼』アルファ・ステイグマを普通の『複写眼』アルファ・ステイグマをとほは違うらしく、スイたち  
は一時撤退。

フェリスがなんとかライナの暴走を止めて取りあえず落ち着いた

らしい。

そうして、今。

スイとクウはここに立っている。

ライナたちですら敵わなかった二人は、まさにライナの言うとおり、「最悪」な人物といえるだろう。

今はミフィアもいるが、本調子でないため勝てるかどうかはわからなかった。

しかし、勝たなければいけないのだ。

アルアを、助けるために……

その思考の中に、あくまで穏やかなスイの声が響く。

「おまけに貴方は、覚醒し、暴走した後でもこうして自我を取り戻している……貴方は一体何者ですか？」

「それがわかれば、苦労しねえんだよ……」

吐き捨てるように、ライナは言った。

スイはおどけたように肩をすくめ、今度はミフィアを見据える。

「ああ、貴方は……昔の時にライナさんたちと一緒にいた方ですか。会った時から思っていたのですが……どうも、兄さんの言う忘却欠片グメを持っている男の容姿に似ていますね」

「いや、言われても……兄さんとは？」

「そこまで言うわけにもいきませんが……まあ、僕たちと同じ髪の色をした雷獣使いです。」

雷獣使い、と言われれば誰しも『？』を浮かべるだろうが、ミフィアは心当たりがあつたのでそんな反応はする事がなかった。

あの時の、男だ。

ライナたちがスイたちと出会った辺りでミフィアが出会った、あの桃色の髪の男である。

『円命の女神』だとかいう、ものの痕跡である忘却欠片ル・ラグメを持っていることでミフィアの名を知っていた。

まあ、ここまで言えば後はわかるだろう。

この二人の、兄なのだ。あの男は……

「……まあ、いいや」

小さく呟き、知っていることをわざと告げない。

何故か？ ……面倒なことになりかねないからである。

今の彼は、何回も言うが本調子ではない。この状態で戦うのは不利としか言えないのだ。

スイはそのことに何も言わず、ライナの方に目を向け怪訝な表情をした。

「さて……話を戻しますが、ライナさん。はたして本当に知らないのでしょうか？ 貴方の背中にいるソレ……アルファ・ステイグマ『複写眼』の子供でしょう？ 貴方は結晶化するでもなく、保護している……それには何か、意味があるのでは？ もしかして、瞳の本当の使い方を知ったとか……」

「ほう？ それは興味深いな。この子供が、アルファ・ステイグマ『複写眼』保持者だと

知っているのか。」

フェリスが口をはさんだ。

スイは顔をしかめるわけでもなく、ただ応える。

「当然でしょう？ 僕は『アルファ・ステイグマ複写眼』を狩りに来てるんですから。

しかし、まいったな……ライナさんが一緒というのは、まずい。これでは無理矢理暴走させて、結晶を抉り取ることができませんからね。覚醒した貴方には、正直今の僕らでは敵いませんし……」

「その上、裏でルーナとお前らの国が繋がっていることもローランドに知られたくない、と。『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者の子供の情報は、ルーナにもらったのだろっ？」

「そうです。ですから、まずい。ライナさんの瞳については興味があつたのですが……残念ながら、貴方を殺さなければならない」

スイはそう言って、笑った。

にこやかな笑みとは違う、人を恐怖させるその、笑み。

桃色の髪をした男は、同じ髪の色をした自らの妹に小さく囁くように言う。

「クウ」

「……うん」

こくりと、無表情の少女は頷いた。

そして忘却欠片ルフラグメと思われる大鎌を振り上げ……

「フェリス、ミフィア！」

「わかつている！」

「僕も手伝うよ」

ライナは避けられない。が、当たる前に不思議な色をした剣が斬<sup>ざん</sup>撃<sup>げき</sup>を防ぐ。

ミフィアの、水鏡色の双剣の一つだ。

力は少女の放つものだと思えないほどに強く、見た目に反して意外に力があるミフィアでさえも押され始める。

ギンツ——派手な音が鳴り、双剣の一つが弾かれた。

ミフィアは自分が吹っ飛ぶ前に、弾かれた剣を手放す。

すると剣は大きく吹っ飛ぶが、ミフィア自身はなんてことないように前へ飛びだした。

「へえ——貴方も、中々強いようですね。クウの『アイルクローノの鎌』の斬撃を防げるとは……」

「強くないと、生きていけない国で育ったもんですから、ね！」

ミフィアは右手を横につきだすと、飛んでいった双剣の一つがくるくと宙を舞い、彼のもとへ戻ってくる。

スイは応えるミフィアを尻目に、空中に光の格子を編み込んでいく。

「西、無、陣の向きから……」

『光輝を生み出す』！

瞬間、光の槍が格子から飛びだした。

ミフィアは瞳を一度閉じると、目を大きく見開く。

「喰らう……効かないよ」

瞳に浮かぶは、朱の十字の紋章。

化け物の刻印だった。

その十字が、光の槍はミフィアの目の前で消滅していしまう。

……いや、吸い込まれたという方が正しいだろう。

光の槍は彼の瞳によって喰らわれ、体力を戻すためのエネルギーに変換される。

それが、彼の特殊な瞳である『イノ・ドゥーエ殲滅眼』。

魔眼の中で最も強いと言われる瞳である。

もちろん、その様子をスイは驚愕の表情で見ていた。

ミフィアが地面に着地すると、スイは緊張した表情でわずかにほほ笑んだ。

「……貴方は、『イノ・ドゥーエ殲滅眼』保持者でしたか……ライナさんに、貴方。どうしてこんなにも魔眼保持者が集まっているのか……」

「はは、僕もわかんないや？ でも、僕は君らを食べたりしないから安心してね！」

ミフィアは応えとともに、逆手に持った剣でスイを斬りつけようとする。

当然のようにクウが割り込んで防ぐが、それは計算の下。ポケットの中から虹色の、七色に輝く四角い石を取り出す。

「彼らを足止めして——『<sup>イーリス</sup>虹の痕跡』」

<sup>エルファ</sup>《神姫》<sup>ルルフラグメ</sup>が教えてくれた通り、『円命の女神』の痕跡らしきこの忘却欠片<sup>ルルフラグメ</sup>を使用する。

この忘却欠片は女神、という謎のものの痕跡ということでもかなりレアらしく、そのレア度と同じくらいの働きをしてくれるという。大きなこと（例えば人を殺せ、と司令すること）は出来ないが、小さいことから中ぐらいまでは出来る。

足止め、防御などの用途に役に立つのだ。

だが残念なことに、一回しか使用できない。数は限られているため、慎重に使用しなければならぬのだが彼は躊躇なく使用した。

スイはその言葉と、七色の石に驚く。

ミフィアはそのことを確認し、ライナたちに訊いた。

「取りあえず別れよう。二手に」

「だな。私はこっちで行く……ライナは本調子でないミフィアの護衛として一緒に行け」

「フェリス、お前大丈夫なのか？ ……あの量だぞ？」

ライナの言う、あの量とは……ルーナ兵のことだ。

スイとクウの二人は足止め出来たものの、いつの間にか多くのルーナ兵がやってきていた。

幸い、魔法騎士はいないが一人ではきついように思える。しかしフェリスは相変わらずの無表情で、彼らに告げた。

「ん、どこぞの変態色情狂や少なからず弱っている残念な奴がいない方が、私もやりやすい」

「誰が変態色情狂だよ！」

「ざ、残念な奴って……」

軽くミフィアはショックを受けるも、身体強化の魔法を使用したルーナに掴まり移動する。

「落ち合う場所はある？」

「馬車を隠した場所で」

「ん。了解した」

そう、フェリスが言うところには二人に分かれた。

その時、忘却欠片に足止めされているスイが声を大きく上げる。  
ルーラフラグメ

「ああ、ルーナさんたち、一つ教えときます！ククという少女その少年の幼馴染は、ルーナの貴族の館に監禁しています！」

ルーナはそのことばに、振り返った。

もうとつくに顔は見えないが、どんな表情をしているかはすぐわ

かった。

そして、またスイの声が聞こえる。

「……そこでお待ちしています。ミフィアさんも、ね」

彼が、ミフィア・レル＝エフィリアということを確認した声音で言った。

ライナは、その言葉に「……くそったね」とうめくように言ったが、ミフィアは。

「……………」

なにも言わなかった。

第二十二話 魔眼狩りの使者（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

## 第二十三話 幼き悪魔と刻の破壊者

優しい風が、頬を撫でる。

閉じかけた瞳を薄っすらと開くと、そこは美しい草原で。

平和そのもの、と思えるような風景で。

ミフィアは本当にこの風景のとおりであってほしい……と、そう思う。

どうやらライナに掴まって移動している少しの間、軽く意識を失っていたようだ。

それほどに、今の彼は体力を消耗している。

スイとクウとの戦闘。たったそれだけで、七割回復していた体力がこれほどにも減ってしまった。

まさかこんなにも魔法の使用と式編み使用を多くすると、体力が減ってしまうとは思ってもいなかったが。

取りあえず、少し休養をとらなければならない。

本当は一日中休む方が良いに決まっているのだが、今はそんなことをしては危険にしかない。なんせ、アルアの幼馴染のククが敵の手にあるのだ。いつ殺されたって、おかしくはない。

だから、彼は現実がこの風景のままであって欲しいと思う。

平和であってほしいと思う。

アルファ・ステイグマ

『複写眼』保持者であるアルアも、幼馴染のククも幸せであってほしい。

まだ、十歳ともいえない子供なのだから。

この世界で大人になって待っているのは、現実という名の絶望なのだ。

せめて小さいうちにも楽しく幸せに過ごして欲しい……  
そう、ぼんやりと考える。

無意識でも置いていかれないようしつかりとライナにつかまっているの、ただぼんやりと空中を眺めいていた。

そこで、ライナが立ち止まる。

ミフィアはなんとか完全に意識を覚醒させ、「着いた？」と訊く。  
ライナはミフィアが目覚めたのに気付き、大きく欠伸をする。

「ふわああ……、んゝまあ着いたな。てか俺さ、フェリス来る前に寝ちやいそうなんだけど」

「……何故に今？」

「あのさあ、このなんか平和そーな風景と暖かい日がありや、誰でも眠くなんだろう？　しかも俺は寝不足。てなわけで、アルアよろしくな」

「って僕に振るの！？」

「……ぐう……」

「もう寝た！　せめて最後まで聞いてよ……」

ちよつとしたショックを受けるも、ずっと徹夜だったライナを起こすのは心が痛むので放つとく。

それよりも、アルアだ。

先ほどまでライナに背負われていた、十歳にも満たない少年。

その姿はどこかライナに似ているような気がして、ミフィアはわずかにほほ笑んだ。

黒髪、黒目と彼の前世の国ではベーシックな姿をしている、その少年は普通の人間と何も変わらないように思える。

しかし、決定的な違いがあるのだ。

それが彼の黒瞳こくどうに薄っすらと浮かんでいるであろう朱の五方星。

アルファ・ステイグマ

『複写眼』と呼ばれる呪われし悪魔の刻印だ。

その紋様が浮かび上がる者には、世界の心理が見えるという。

刻印を宿した瞳で見据えたもの……魔法の構成は、全て一瞬で視通してしまう。

一瞬で構成を理解し、普通は使えないはずの他国の魔法ですら使えてしまう。

そのことだけを見れば、便利に思えるかもしれない。

しかし……違う。

魔法の構成を見透かし、簡単に使用してしまうという点で既に脅威を感じるが、この瞳にある力はそんな生易しいものではないのだ。

アルファ・ステイグマ

『複写眼』保持者が何か……精神的に大きな傷、つまりは大事な人が酷い目に遭う……などを見て、心に大きな傷を負ってしまった時。

保持者の精神は崩壊し、全てを破壊しつくそうとする。

心理の崩壊。目に見えるものを消し去ろうとする、大きな力。

アルファ・ステイグマ

普通の『複写眼』保持者はその状態でも殺せるそうだが……それでも周りの者には“化け物”とみられるのは目に見えることであるう。

だから呼ばれた……“悪魔”、“化け物”、と。

この少年は、その力を瞳に宿していた。

いや、アルファだけではない。ここでぐっすりお休みなライナもその化け物の瞳をもっているのだ。

だからこそ、彼は人とふれあうことに恐怖する。

拒絶して、結局は一人になってしまう……

ミフィアは、牢獄に閉じ込められたとき、『千里眼』で自分の故郷の隣村にいたという“化け物”について調べていた。

そして分かったのはそれがライナということ。

彼は、自分自身を酷く嫌悪していること。

それは、後に彼と偶然出会ったときに確信に変わるものだった。表面上では出したりしないが、彼がとても哀しい人間であることを。

人の心を読むのが得意なミフィアは、あつた瞬間少なからず気付いていた。

それが確信に変わるのはそれから少し後であつたが、間違いないということとはわかる。

今でも、ライナは度々悲しそうな表情をのぞかせるのだから。

ミフィアだつて、呪われた瞳をもっている。

それはライナたちとは違う瞳……『イノ・ドワーエ殲滅眼』。

正直、彼らの瞳よりも化け物なのだ。

その能力は……まさしく悪魔そのもの。

なんせ、人を喰らうのだ。

ミフィアは絶対にそんなことはしないと心に誓っているが、周りには彼が喰らわないという確証がないことを知っているのだ。だから、誰も近づいたりしない。

人を殺さないでいたい、と……そう考えている心は本物だといふのに。

独りという悲しさに、自分が強大な化け物の力を持っていることに、恐怖を抱いている自分がいる。

自己嫌悪……そう言われればそうなのかもしれない。

だが、仕方がないだろう？

自分が異常なのは事実であり、そして……人がそれに恐怖を抱くのは当然のことなのだから。

疲労が襲いかかり、思わず寝てしまいそうになりながらも思考を続ける。

というか、思考を続けなければ起きることが出来ない。

少し立ったりすると、必ずと言えるほどの頻度で立ちくらみが起こるのでそのまま座ってでの思考であった。

しかし、結局は疲れなどによる眠気には勝つことが出来ず、馬車周辺に《神姫》<sup>エルファ</sup>からもらった結界術式の護符を使用してから目を閉じた。

\*  
・  
\*  
・  
\*

目覚めたら、日は高く昇っていた。

先ほどよりかは楽になった身体を起こし、わずかに頭痛を感じて頭を押さえながら周りを見渡した。

風景は寝る前とさほど変わらない。日は高く昇っていたというが、そこまで時間は経っていないようだ。

しかし少しの休養をとったことにより、先ほどよりかは幾分楽になったかのように思える。

見るとライナは寝ているように思える。が、薄く眼を開いているのを見てくすりとミフィアは笑った。

「なんで起きてるのにそんな薄目開けてるのさ」

「んあ？ ああ、眠いけどなんか色々気になって眠れないんだよ……これからのことも色々あるし……うへえ、考えてて色々嫌になってきた」

「あはは、僕もちょっと……そう思っかなあ。で、だからと言って薄目開けて横になってる理由にはならないと思うんだけど？」

「別にどうでもいいだろ？ 子の方が楽なんだよ……ウトウトしてる時が一番至福の時だと思うかも……いや、実際完全に熟睡してる方が幸せな瞬間だな」

「この昼寝愛好家……少しは働こうよ？」

「嫌だ」

「即答っ！？」

なんだかんだで雑談している彼らの声が聞こえたのか、黒髪の少年は声を漏らして薄く目を開けた。

その瞳に薄く浮くは、朱の五方星。

それがこの少年は『複写眼』アルファ・ステイグマ保持者だと教えてくれる。

日の光を直で見てしまったのか一度眩しそうに目を細めたが、彼は起き上る。

きよろきよろと寝起きの子供らしく周りを見渡すと、

「……あ、あれ……ここは……父さんと、母さんは……？」

一人、呟く。

まだ焦点があってない、ぼんやりとした様子で周りを見、そし

てミフィアたちを見つける。

ライナは声をかけようとしますが、驚きと恐怖に見開かれた瞳を向けたアルアは叫ぶように言った。

「……お、お前らは誰だ！ 父さんと母さんは……父さん……父、さ……」

言うが、その言葉は最後まで続かない。

無邪気な子供の顔が、悲しみと絶望に歪む。

ミフィアたちはただ見ていることしかできない……大事な人の死は、本人が受け止めなければ無駄なものとなってしまふのだから。

ちゃんと受け止めて、次へつないでもらうしかない。

だから口を出さない。ライナも、それを知っているようで気だるげな表情でアルアを見ている。

そのアルアは、がたがたと震える。

だって両親は——……

「あ、う……あ、そんな……とう、母、さ……っ

うわあああああああああああ、殺されっ……あああああああああああああああっっっ！？」

悲鳴をあげる。悲しさに、絶望に、怒りに恐怖に心を支配されて泣きそうな面持ちで、ただ狂ったように叫ぶ。

なんせ、目の前で殺されたのだ。

暴走させるために。自分のせいで、母は無残に殺され、父は血塗れの姿で二度と動かなくなってしまった。

そのことに怒りも悲しみにも感じず、なんと思っただろう？  
これが普通の反応なのだ……いや、こんな反応をする事態が起  
ること自体異常なことだが。

ひくひくと身体を震わせ、キツとミフィアたちの方を睨む。

「父さん……母さんっ……」

お、お前らが……父さんと、母さんをつ……！  
殺してやるっっっ！！」

憎悪に燃えた瞳を向け、立ちあがり彼は手を組むと詠唱しようと  
する。

しかしその前にライナが動き、アルアの組まれた腕を掴んで地面  
に倒してしまう。

「遅せえよ」と言われたアルアは、そのまま地面に倒れ伏したま  
まの態勢で子供とは思えない、恨めしそうな視線でじっと見つめる。

「……なんで、なんでよ……なんでこんなこと……僕が何をしたつ  
て言っんだ！」

アルアの表情は、大きく歪んでいた。今にも泣き出しそうなほど  
に。

……いや、既にその呪われた漆黒の瞳からは、暖かい涙が多く流  
れ出していた。

怒鳴られ、ライナは肩をすくめるのみ。

ミフィアは暗い表情で何も言わない。

「ひぐっ、ぐっひうっ……」と嗚咽を漏らしながら、少年は地面

に顔を伏した。

「もうやめてよ……もうやだよ……父さんと母さんが、僕のせいで……  
……  
こんな、僕のせいで……どうして。もう嫌だ……もう……もう」

顔を伏せたままふるふると震える小さな背中を、ミフィアはどこか悲しそうな表情で見つめていた。

ライナは何かを言おうとするが、ここは自分が言う、と手で制する。

少しの間間が空くが……

ミフィアは息を多く吸いこむと、意を決したように口を開いた。

「……嫌？ 確かに、嫌になる気持ちはわかる。けれど、そんなことを言っても事態は変わらない」

「……っ、ひぐ……」

「逃げたいなら逃げればいい。死にたいなら、死ねばいいんだ。そういう世界だからね、僕は止めたりはしないよ。それで君の気が済めばだけど」

「お、お前らが殺したいんだろっ！？ 化け物の僕をつ………だから、父さんと母さんは……  
殺せばいいじゃないか！ 僕は化け物だ！ 化け物の僕なんか、生きて意味なんて……」

「……そう、だね。化け物の僕たちなんか……生きている意味なんて、ないかもしれない。  
けれど——……」

言葉をきる。

僕たち、という言葉にアルアは顔をあげ、驚いたようにミフィアたちを見る。

ミフィアはライナに視線を送ってなんとなく伝えたい言葉を送信。ライナは呆れたようにこちらに視線を返すが、やれやれと言った感じで別に断るような感じではない。

(……ごめん、ライナ。僕よりもアルアと同じ『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者の君の方が適役だと思うから……お願い)

心でそう訴えるミフィアに、ライナは応じるしかなかった。ほあくため息をつきながらも、しっかりと行動してくれる。ライナは軽く指で右目の瞼をあげ、アルアに見せた。呪われし朱の刻印を……

「……っ！」

アルアが息をのむのがわかる。コクンと、小さく音を鳴らした喉はまだ細く、子供らしさを感じさせる。

その子供がこんな世界を知るのは……あまりにも、酷だった。しかし世界は容赦なく女子供関係なしに絶望の道を歩ませる。それこそ、真の地獄といえるだろう……

その地獄の象徴の一つとも言える呪われし瞳をもつ黒髪の青年は、眠そうな……しかし、どこか悲しげな表情で少年に告げる。

「俺もな、お前が言ったようなことを何度も考えた。  
こんな化け物、死ねばいいって……さつさと死んで楽になりやいい  
って。」

俺が生きてるだけで、大切なものたちが傷ついて……殺されて……  
おまけに化け物だって蔑まれて。

生きる価値なんてないんじゃないかって、考えたよ。

どうして俺なんかがここにいるんだ？

どうして俺を作った？

そう、何度も考えて考えて……けれど答えが出ない。

泣いて、叫んで……でも」

言葉を切ると、ライナは手を目から離す。

その瞳を今度は悲しげに細め、真っ直ぐにアルアという名の少年  
を見据えた。

「なのに、まだ俺は生きてる。」

生きてる意味なんじゃないのに……馬鹿みたいだろう？ 死ねばいい  
んだ。

生きる意味なんて、まだ見つけてないんだ。

だったらなんで、生きてる必要なんてある？

生きることを望まれてなんかいないのに、嫌われているのに。  
人を傷つける、害なす化け物なのに。

それならいつそ死ねばいいんだ。

何度も、何度もそう思ったのに……」

ライナは、また言葉を切る。

そして哀しそうな、しかしどこか嬉しそうな……そんな表情でわずかにほほ笑んだ。

表は、そう見えはしないだろう。面倒くさそうに顔を歪めたとか思えないだろう。

しかしミフィアは……心の中で、そんな表情をしているライナを感じ取った。

彼が本当は人を、人間たちを好きで嫌いになれないというのを、垣間見た気がした。

「でも、その度に生きてくれている馬鹿がいるんだよね……

化け物だって知ってるくせに俺を欲しがるもの好きの王様やら、無理矢理化け物なんかじゃないって説得するやつやら。

それどころか、最近は俺を奴隷だのなんだのっていじめる趣味のやつだのいて……

おまけに弱ってる残念で迷惑なやつまでなんだなんだ言うてくるしさ。

……その度に、俺は気持ちが悪くなる。

俺にも意味があるんじゃないか、生きてていいんじゃないかって……だから俺は……俺の大切な奴らが幸せに生きられるような、そんな世界をつて……」

何かに気がついたように言葉を止めたライナはそのまま、面倒くさそうに頭を掻いてアルアをしっかりと見据える。

ちよっぴり、視界の端にいるミフィアの様子に微笑んで。

「ああ、俺なんか馬鹿なこと言い始めたな。つまり俺が言いたいのは

は……」

「僕が残念な奴って言ったら殴るからね？」

「って大事なところを遮んなよお前……」

「あー、ごめんね。ちよつとほんとにライナ、馬鹿なこと言ったからそーいうとこ訂正してくれる？」

あまりにも暗くシリアスな雰囲気になんて耐えきれず、ライナの発言を餌にして遮った。

結局はミフィアも、同じ考えなのだ。

だから少し恥ずかしくて……遮った。

もちろん先に言ったシリアスな雰囲気や、残念な人発言のこともあったが一番はこれのせいだった。

急にぶち壊されて本当に面倒くさそうに顔を歪めるライナ。

内心笑いながらも、ミフィアはアルアに向き直す。

「お、お兄さんも……僕と、同じ……？ それじゃ、僕を助けたのはお兄さん……」

ライナをしっかりと見て、呟いてからアルアはまたも言う。

「で、でも……僕に生きてて欲しい人なんて……」

「お前の父さんは、最期になんて言った？」

「あっ……」

ミフィアはそんなことを知ってはいなかったが、二人の表情から

どんなことを言ったかは容易に想像できた。

……きつと、生きると最期に彼の父親は告げたのだ……  
生きてくれ。お前は化け物なんかじゃない……

自分が死ぬのは、お前のせいじゃないと。

アルアは、その言葉を思い出したのかまたも涙をこぼす。

ミフィアは言うべきことを考え、呟くようにして言った。

「たしか、この少年を助けてって頼んだのはククって言う少女だったっけなあ」

「っ！！？ クク！？ ククがここに……」

「ここには、いないんだよなあ……はあ、大変。少年を連れていくための餌として、貴族の館に監禁されているらしいし……助けに行かないと……」

「ぼ、僕も行きます！」

ひとり言のように呟くミフィアに、しっかりと反応するアルア。

内心面白い、とかちよつと黒いことを考えていたりする。

こんな残酷なことを、そんな風にして面白がるだなんて本当に思考力が低下しているようだ。

キレの良い彼の思考は、いまだにずしりと押し掛かってくる異常な疲労に遮られている。

何故だかはわからないがほんの少し黒い思考が上がってくるのだった。

少しそんなぼやけた思考を展開させているうちに、ライナが口を開く。

「ほらなあ？ まだ死ねねえだろ？ 死ぬのって結構大変なんだよ。」

死のうと思うとやんなきゃいけないこと意外にあるし。ふわああ、そういうことがあるから俺は眠……

ふわ、マジで眠くなつてきちゃったぞ……ンなわけで、お休み。見張り頼むわ」

「へ、へ？　ククを助けに行くんじゃ……」

「それはまだ、後。待ち合わせしてる奴が一人いるんだよ……だから、来たら起こしてくれ。ミフィアもそれまで休んどけ……クク救出はそれから……」

「えっ！？　……まあ、フェリス来るまで暇だけでもね」

地面に寝っ転がるライナを見てため息をつく、あ、そか。と忘れていたのを思い出す。

アルアを見ると、『？』マークを頭の上に踊らせてこちらを見据え。

それに苦笑して、忘れていたこと……“自己紹介”を始めた。彼にとって“自己紹介”とは、敵以外の人には大体する基本<sup>ベシツク</sup>そのものである。

それはあくまで、礼儀を知る彼にとっての基本なのだが……

「忘れてた……自己紹介するよ。」

僕はミフィア・レル・エフィリア。『<sup>イーノ・ドゥーエ</sup>殲滅眼』保持者」

「ミフィア……さん？　いの、つ……え、って？」

「イーノ・ドゥーエ。ちょっと見て」

「……？」

ミフィアは、一度目を閉じて開く。

するとそこには朱の十字架浮かびがっており……

アルアは驚きに表情を変えた。

「あ、あるふあ……………」

アルファ・ステイグマ

「違う。これは、『複写眼』じゃなくて、『殲滅眼』イーノ・ドゥーエって言うんだ。

朱の五方星じゃなくて、十字架だろう？　それだけじゃなくて能力も全然違うんだ。

イーノ・ドゥーエ

この南大陸には『殲滅眼』保持者はあまりいないらしいよ。それ故か、『複写眼』アルファ・ステイグマの特殊変形版とか思われるんだけど。

イーノ・ドゥーエ

まあ、僕はそんな『殲滅眼』の中でもかなり特殊なんだけどね」

「…………じゃあ、ミフィアさんも僕たちと同じような目に……………」

「君らよりかはまだマシな方だと思う。僕は暴走なんてしたことはないから…………人は、あまり殺したことはない。一回だけあることで殺してしまったけれど……………」

そう言うミフィアの表情は、酷く辛い顔だった。

まるで自らを責めているような表情。それは、『まだマシな方』とは思えない惨劇を体験したように思わせた。

そう…………あの時。あんな時が無ければ僕は——

疲れているせいか、ネガティブな思考だけが生み出されていく。アルアはただ、心配そうな表情をするだけだった。

少し経った頃、ライナがいきなりがばっと身を起こす。

「ら、ライナ？ どうしたの、寝るんじゃないのかい？」  
「……大きな戦力？ それもあの二人に勝つためには……うわあ、  
今から鍛えてどのくらいかかるか……」

その眩きだけで状況が理解できた気がした。

「……ああ、そつか。僕調子悪いし一つ大きな戦力必要だもんなあ」  
「だろ？ 『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者だからある程度の魔法ならまだ使える  
だろうし……でもなあ、うーん……」

「あ、あのお兄さ……」

「ライナ・リユート。ライナでいいよ」

「じゃ、じゃあライ……」

「ああ、やっぱり時間無いから先生にしとけ。そういう気持ちの面も  
きつと必要だから」

「え？ ……え、え？」

理解できずにオロオロするアルア。

ミフィアはただ微笑むだけで、なにも言わない。

「じゃ、始めるぞ。特訓だ」

眠たげな、しかしいつもよりかはやる気になっているライナの声  
が静かなこちら周辺に響き渡った。

第二十三話 幼き悪魔と刻の破壊者（後書き）

H・23・10・3 ずらしました

『ちよつとしたお知らせ』から変更。空白のページだったため、更新したかどうかは分かりづらいですね。

今回は前後篇です。

書き方を変えてみたので、読みにくいかもしれませんがそこはご勘弁を。時間があり次第、他の回も編集しようかと思えますので宜しくお願い致します。

それと、またも更新が遅れてしまい、申し訳御座いません……  
それでは前半、どうぞ。

「——アルア、今お前は弱い。一人で兵を相手にすることすらできないくらいに」

そう、厳しさをわずかに含ませた声で言ったのはライナだ。

豪華な馬車が置いてある草原に、二人の青年と一人の少年。

そのうちの一人、ライナがしつかりと緩んだ瞳で少年、アルアを見据えていた。

アルアは突然のことで、わかんないと言ったような表情をしている。

もう一人の青年、ミフィアはその二人をいつも通りの表情で見つめていた。

「えと……あの、一体何を……」

「あ、説明しないとわからないか。」

「そうだったな……まあいいや、ちょっと俺考えてっからお前説明して」

「ええー」

分からずおろおろしているアルアを見て、説明の必要性を悟ったミフィア。

ライナが説明するのかと思いきや、ずばっとお前がやれと言われってしまった。

ミフィアは半眼で少しライナを睨んでから、アルアに向き直って説明を始めた。

「えつとね……君は幼馴染のククを助けたいと言ったよね？ でも、敵は強い。その敵に、何の訓練も受けていない君と僕らで……どうなると思う？」

「あ……」

どうやら気がついたようだ。そう、今の彼は役に立たないどころ

か足手まといとなってしまう。

そのことを悟ったアルアは、少しすまなさそうな表情になった。しかしミフィアは対照的ににこにこ笑顔のまま。アルアはキツネにつままれたような顔になり、そのまま固まってしまった。

そのアルアにライナは声をかける。

「おいおい……まあ、いいや。とにかく、あれだ。俺たちはお前を鍛えねえといけねえんだ」

「き、鍛えてくれるんですか!？」

「いやまあ、うん。とにかく、君が考えるのは……えっと、強くなることだけだよ」

「は、はい!」

途中ライナの師、ジェルメ・クレイスロールの話も織り交ぜながら、そんなこんなでライナとミフィア……もとい、魔法戦闘講師の授業……ではなく修行が始まったのだった。

#### 一時間目——ライナ・リユート先生の魔法基礎講義

「取りあえず、まずは魔法の基礎からだな。よし、やるぞ」

「はいっ!」

元気よく返事し、目を輝かせるアルア。その様子にライナは、

「……なんか弟子つて、いいかも」

まんざらでもない様子で頭の中に魔法の知識を浮かび上がらせる。

それは魔法の基礎の基礎とも言える、最も簡単で最も重要な部分だ。

「えっとあ、まずお前は……考えるときに何を使う?」

子供でもわかるように、選び抜かれた言葉。アルアはうーむと唸るように顔を少し伏せ、答える。

「頭、ですか?」

「そう。俺たちはその頭ンの中にある脳で者を考えたり、身体に指令を与えたりするんだが……実はその脳って怠け者でさあ、ほとん

どの力を発揮してねえんだ。で、その発揮してない寝てる部分をいくつか起こしてやるとなanteーか世界の気の流れ？　だとか言われているのが見えるんだ」

「あ、それって、眼をよく凝らすと見える、金色でふわふわのものですか？」

そんなことを、あつさり言い放つ幼い少年。

それを聞いてライナはパチンと指を鳴らすと、正解といった。

「そう。普通ならそれが見えるまで……脳を起こすまで、瞑想やらなんやらして一年はかかるか。でも俺たちは、この特殊な『瞳<sup>め</sup>』のおかげであつさり見えちゃってんだなあ。まあ、これで一般魔導兵の訓練を、一年分ぶつ飛ばしましたー。優秀優秀。てなわけで、次に進みまーす」

眠そうに言うものの、普通はあり得ないこのスピード。

これが特殊な『瞳<sup>め</sup>』を持つ者の力であつた。

尤も、ミフィアは特殊な『瞳』を持ちながらも魔法の構成は見えたりしないが。でも、不思議とその金色のふわふわを喰らっていることが分かるのだから結局は似たようなものなのかもしれない。

つまりはこういうことだ。特殊な『瞳』を持つ者たちは、本当に強大な力を持っている。普通の人間が努力して手に入れたものを、あつさり超えてしまうのだ。

だからこそ、忌み嫌われた。

化け物と呼ばれ、蔑まれ、迫害されて生きてきた。

この力のせい……大切な人間までもが巻き込まれ、不幸になり、自分自身も嫌になる。世界が。全てが。

此処にいる三人は……特殊な力を持って生まれたばかりに、心に深く傷を負うことになってしまったのだ。

しかし、どこかノリノリでライナはアルアに教えていく。

「んで、そのキラキラでふわふわなのが一体何なのかって言うと、さっき言ったように世界の気の流れ……あるいは精霊とかだな」

「せ、精霊さんなの!？」

その言葉に反応するあたりが子供らしい。ミフィアはそんなアルアを見て、微笑んだ。まだこの少年は五歳児らしい心を持っている。大丈夫だ。五歳児らしくない話し方、表情、仕草でその時を過ごしたミフィアからすれば、そのことは幸せといえるものだった。あの地獄。大切な人に裏切られ、そして全てを失ったあの時の記憶が頭の中に浮かんで消える。

その点、この少年はまだ子供らしい笑顔を顔に浮かび上がらせていた。キラキラとした目の輝きに少しばかり目を細める。だが、それは決して悪いものではない。むしろ良いものだ。両親の死体を目の前で見ってしまった少年がここまで表情を残しているのならば安心できる。

ライナはそのことを深く考える前に、アルアという少年が目を輝かせた理由……精霊、についての言葉を紡ぎ出す。

「研究者によつては、のことだけど、そこら辺は実際まだ分かってねえんだよなあ。でも、これはわかってる。そのキラキラでふわふわなものがある法則に従って動かすと、様々な現象を引き起こすってことが……あ、分かりづらいか。まあ、つまりはそのキラキラでふわふわなのは並べ方次第で火やら雷やらを生み出せるってことなんだが……」

そう言いきるライナの顔は、どこか生き生きとしていた。まるで自分の趣味を話しているかのような。その彼の指に光が灯され、高速で空に光を刻んでいく。

他の者の目からしたら、きっとその光景はライナが次々と光の文字を生み出し、描いて<sup>えが</sup>いるようにしか見えないだろう。しかし、実際は違う。アルアの言う『キラキラでふわふわなもの』——世界の気の流れ、あるいは精霊を精密に並び替えているのだ。それは他人の目で見れば美しく見えるものだ。しかし、魔法の使えるものにとつては戦闘の象徴に他ならない。

紡ぎだされる光の文字。この世界の魔法を使えないが為に訓練を受けていないミフィアには見えることのない金色の粒子が、ライナ

の指先に干渉され次々と形作る様にアルアは見入っていた。

いや、ただ見つめるだけではない。その瞳は既に描きかけの魔法の構成をしっかりと見据えていた。慣れていない手つきで、手を躍らせていく。真剣そのものの表情からは先ほどのほんわかな子供らしさを感じさせない光が宿っている。

——ああ、そんなにも幼馴染を救いたいんだね。

ミフィアは子供らしさを捨て、勉強に励む幼き少年を見て感心したように腕を組む。疲れにぼやけた視界をはっきりさせるように、大きく息を吸い込むと吐き出した。少しの眠気が掻き消され、空へ溶けていく。

これで何とか意識を保っていることが出来るだろう。彼はいつの日にか、疲れを無理矢理にも封じ込める術を手に入れていた。本当は今こそ、休養を取るべき時なのだ。実際彼だってゆっくり休養を取っていたい。しかし、事態はそう軽いものではない。なんせ人の命がかかっているのだ。しかもまだこの少年と同じように幼い、十歳にも満たない少女。

そのことを知っていながらも、自分一人がゆるゆると休養を取るわけにもいかない。いつも眠い眠いと言っているライナも、本当に疲れがにじみ出ている。それはフェリスによる虐めもあるだろうが、それだけとは思えなかった。精神的な苦痛。そして、ライナたちが顔をしかめるほどに厄介な相手。こんな状況ならば希望も何もかも捨てて逃げ出したい。

だが、彼は逃げない。ミフィアも、そして恐らくフェリスも。この自分たちより遥かに幼い少年も。逃げてしまつたら全てが終わる。これまでのことが全て無駄になる。そんなものは認めない。決して認めない。だからこそ、彼らは戦うのだ。生きるために。幸せをつかみ取るために。

そうだ。その通りだ。だから、今という時が存在しているのではないか。ミフィアは思う。だからきつと、今幼き悪魔と呼ばれた少年のしていることは無駄なんかじゃない。強い厄介な奴相手に、無

謀なんて言葉すらも通用しない。確かな意思と、決意がアルアには満ちている。だからこそ今、魔術の天才とまで謳われたライナに魔術を教わっているのだ。

これはかなり幸運なことなのだ。ライナは性格こそこうだが、ものの凄い使い手なのは言うまでもない。その男に、男の得意分野である魔術を教われるということはなんと恵まれたことだろうか。それだけに、この少年はガスタークの二人との戦いで大きな活躍が期待されるかもしれない。

そこでライナは、高速で動かしていた手を止める。ぴたりと制止した腕の近くにある光の文字は、まだ未完成だ。しかしアルアは止まったにもかかわらず、その先までぐいぐいと描きこんでいく。「ほう」と小さく声をあげたのは『複製眼』<sup>アルファ・ステイグマ</sup>の性質をあまり知らないミフィアだった。しかしそのことに気付いていないかのように、この少年は腕を躍らせ続ける。その様に感心するミフィアの姿があった。

そしてアルアはその魔法の文字を――描ききった。何の迷いもなしに。まだ粗くはあるが、完成された魔術。常人なれば此処まで行くのに何年かかるのか、想像もつかない。きつと途方もなく長い道のりだろう。だからと言って、長年自らを虐げてきた軍の者たちを尊敬する気はしない。でも、そんなミフィアでもこれだけ出来てしまった優秀すぎる子供に拍手を送ろうかとも思った。

「我・契約分を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」

そうアルアの小さな口から放たれた言葉とともに、彼の頭上に小ぢんまりとした犬のような獣が姿を現した。その姿は、まるでアルアそのものを表しているかのようだ。その脇に座っているミフィアは微笑を浮かべる。これだけで終わるはずがない。何かしらライナは仕掛けるだろうと、知っていたからだ。その様子はライナの表情を見た瞬間に悟ったものだった。しかし、そうなるとはアルアは予想もできていないだろう。

そして、案の定ライナは何かを仕掛ける様子を見せた。

見た目的にはとても不思議なものである。何故なら、彼の動かす指はただ速いだけでなんの統一性もないからだ。だがそんなことをライナは気にもせず、少しの間で適当に、しかし綺麗に並べられた文字を描き綴った。

「我・契約分を捧げ……えー、なんだか取りあえず、光を闇が覆っちゃう」

寝癖まみれの黒髪を片手で掻きむしりながら、呪文なのか何なのかよくわからない言葉を呟いた。するとその適当な魔術から放たれた真つ黒なものが、アルアの小さなまりとした光の獣を黒く黒く塗りつぶしていく。

光の獣は、あっさりそのまま消滅してしまった。どこかアルアを思わせる獣が闇に消えていくその光景が、少しばかりショッキングだった。と、後にミフィアは語る。

しかし当の本人は、そんなことを全く気にしていなかった。硝子のハート状態のミフィアには少しグッサリと来る。尤も、彼だけだろうと思うが。語られた人物が苦笑する他なかったのは仕方のないことだろう。

「凄い！ 先生今、魔法作ったでしょ！」

「お前を教えるのは、本当に楽だなあ。それも正解。今は俺が即席で作ったやつ。今のでわかったと思うけど、魔法ってーのはこういう形式で作られてんだよ。お前の言うところの、キラキラでふわふわなものを良い感じに並び替えてやると、力が生まれる。さらに最後に呪文を唱えることで、より強くこれから起こそうと思うものを思念できる。その大きさの値ってのが一般で言う、魔力って奴だな。……これが強いほど起きる現象が強く、大きくなる」

なんてことを、あっさりと言ってしまふライナはやはり魔術のエキスパートなのだ。普通なればそう簡単に魔法を作ることなんてできない。これはやはり『複写眼』アルファ・ステイグマ保持者の特権だろうか。それとも、彼の才能によるものだろうか。この世界の魔術について知ってはいても、それほど深く知らないミフィアには見当もつかないことで

ある。それほどにも難しいことをしているようには思えないが……  
やはりこの説明は普通の人間には理解しがたいものだろう。

きつとそのことにはアルアの理解力が高いこともある。ミフィア  
ももちろん理解力はずば抜けて高いが、流石にこのことについては  
首をかしげるほかない。

そして魔術の天才による講義は、続く……

なんか、別人書いたんじゃない？　と思える回でした。私って、書く前に読んだ小説によって書き方が左右されるのですね……風変りな作者で本当にすいません。

今回はまだミフィアの魔法講義についてはありませんでしたね。取りあえずライナの魔法講義から始めましょう。それではまた～

久々すぎる更新ですよ皆さん！

本当に申し訳御座いません……

最近こちらにはこれず、どの作品も更新が遅れていると言った状況になってしまいました。

すいません……

あ、それと今回のタイトル見て「あれ？」と思った方は前の回へどうぞ。

一つ回をずらしたため、分かりずらいのですが一話分ずれているのです。気付かないで来た方もいるかと思ったので、ここでお知らせさせていただきます。

今回は……長くお待たせいただいた割には短いです。はい、すいません。ミフィアの講義はまた次の回へと持ち越しです。

更新不定期になりがちですが、どうかこの作品をお願い致します。

「だから、僕の魔法は、弱いんですね……<sup>イメージ</sup>思念の力が弱いから」

そう、言ったのはまだ年端もいかぬ少年、アルア。

魔法基礎講義——後編

「ああ。そうだな、それに付け加えて言うと、まだ精霊の並べ方もちょっと甘いな。とにかく、魔法ってーのは思念の力と並べ方に左右されっから……各国の魔導学者たちはその研究に命をかけてるんだ。そのキラキラでふわふわな精霊さんの並べ方はそれこそ無限にあつてさ……だから法則を変えるだけで模様、記号、命令の意味が変わつてくつから国で魔法の形式が全然違うんだ。ま、それは逆に言うとその形式を理解してりゃさっきの俺みたいに即興で魔法を作れるんだけどな」

あつさり言うライナに、ミフィアは呆れかえったかのような表情を隠さず見せた。そんなことをあつさり言えるのは、『<sup>アルファ・ステイグマ</sup>複写眼』保持者で天性の魔法のセンスを持つ、ライナの特権だろう。言われたのが魔導学者だったならば、ただの嫌味にしか思えない。だが、これが彼については基本中の基本……定義の一つにでも収まつてしまふのだろう。これだから魔導オタク……ではなく、天才は怖い。

しかし、アルアはそんなミフィアの状態もいざ知らず、神妙な表情で頷く。よく理解できるものと、半眼になるミフィアの姿がちらりと見えた。そして彼が半眼で見据えたその先……金髪の女の姿も。その姿はまるで何かを待っているかのようだ。アルア達はこのことに気付いていない。そのままオタクっぷり……じゃなくて、天才っぷりを生き生きとして發揮しているライナが、滑稽で仕方がないと言った表情もその女からわずかに見受けられる。無論、それを知るのはミフィアだけなのだが。

そのことも知らず、アルアはライナに言葉を投げかける。

「でも、その即興の魔法は学者さんの作ったものには……」

「うん。まるで及ばない。それどころか、自己流の魔法じゃ実戦で使えるようなものなんて、まるで生み出せないよ。今お前が写し取った魔法、エスタブル王国って言う国の魔法なんだけど……出来が良いの、わかっただろ？」

「ええ……凄く効率よく、綺麗にキラキラが並んでますね」

そんな高度なことを、教育される身とはいえすらすらと並べられるのはとてつもなく凄いことだろう。どこかライナに似ているとは思うが、アルアにもライナと同じように天性の魔導的センスが備わっているのかもしれない、なんてミフィアは思う。そのことは少し羨ましい。何故ならミフィアにはどうあってもこの世界の魔法を使うことが出来ないからである。多くの種類があり、膨大な力を持つミフィアの使える魔法たちだが、それ以上にデメリットが大きすぎるのだ。代償をなしに魔法を展開していける者たちを時折うらやましく思う時がある。

「ああ。かなり完成度の高い魔法だと思う。それこそローランドの魔法と同じくらいに……完璧な高率で描き上げ、より短い手順で、より大きな力を……しかもその魔法に対応する呪文も、<sup>イメージ</sup>思念しやすいよう考え尽くされてる。制度に関しては、俺の住んでる国と同等か、それ以上かもなあ……<sup>いっちょ</sup>稲光なんか、所々綻びがあるからいじって使ってるし……」

「いづ……ち？　って、何ですか？」

アルアが疑問符を頭の上に浮かばせると、ライナは「いやいやこちの話」と言ってさりげなく話を逸らした。何とも言えない逸らし方である。正直、後に教えることになるのだから今言ってもいいだろうが……きっとライナの配慮なのだろう。これほどにも頭がよく、飲み込みも早いアルアでも子供だ。いきなり詰め込まれたら混乱するに決まっている。いや、そうでなければいけないのだ。

「まあ、これで三年分はぶっ飛ばしたんじゃないかな。あとはとに

かく魔法の習得、訓練に実戦訓練だな。お前は俺の魔法を見るだけで覚えちゃうだろうし……これは思ったよりも役に立ちそ……」

その時だ。「危ない！」と声が響いて、美しい金色の帯のようなものが太陽の光にあたって煌めき、地に降り立ってあつという間にアルアを小脇に抱えてしまったのは。

アルアは驚いてライナやミフィアに助けを求めるが、ミフィアはただくすくすと笑い、ライナは呆れた顔をするのみだ。アルアはうるたえた表情で、彼を抱えている金髪美女は、無表情。

「お帰り、フェリス」

ミフィアはくすくすと、そのまま降ってきた美女……フェリスの名を呼んだ。

相変わらず無表情の彼女は、どこか楽しげな雰囲気をおぼせる。それが逆に怖かったりするが、他の人が気づくことは無いだろう。

ライナはフェリスの表情が読めるような感じをさせるが、この距離では分からないようだ。まあ、気付かない方がいいのかもしれない。その表情は……きっと、アルアにあることないこと吹きこむような意地悪で悪戯なものだったからだ。

案の定、フェリスはそのような言葉をアルアにぶつけた。それに動揺するアルアに、反論しようとするライナ。いつも通り過ぎる光景に、ミフィアはふつと笑みを漏らす。その表情には嬉しげなものと、悲しげなものが二つあった。しかしその表情と、意味に気付く者はいない。それはあまりに一瞬で、見ている人間がいなかった他、その理由がわかるほどの手掛かりがなかったから。もし、仮に気付くものがいたとしたら……彼の心の奥深くを、知る手掛かりを得ることが出来ただろう。

だが気付く者はいない。彼自身も気づかない表に出てきた表情に着目する理由を今持っている者はいないから。転生者であるといえど、記憶のないままこの世界に迷い込んだのだ。傷つくのも当然であり、転生者としての感性は持ち合わせていないも同然なのだから。天才であっても、心の深くは普通の人間と寸分違わない。

そう——この完璧な天才、『凄まじき才能を持つ者』も、実際はただの人間にすぎない。『イノ・ドゥーエ殲滅眼』という『アルファ・ステイグマ複写眼』以上に化け物じみた特異な瞳。そのこととある有り得ない現象によって刻まれた深く大きな傷。通常の、魔眼保持者以上の傷を、ある一つの“さい化け物”は持つていた。

和やかな景色の中、一人の青年の心の奥深くでは——げんざいかこ光と闇が渦巻いていた——

「あの、ふえ、フェリス先生、ご指南お願いします」

何処で子供には難しい言葉を覚えたのか、という疑問はなしにアルアはフェリスにそう言った。一方のフェリスは、ぎりぎり残っていただんこのストックを口に含んでいる。アルアがいつになく緊張した表情で訴える中、金髪美女は日常と変わらぬ行動に身を移していた。つまりところいつも通りの姿というわけである。ライナはなんだかんだ言ってアルアのその意見にはなにも言わず、むしろ良いことだと首を縦に振る。彼女はそのことを知っていながらも、慣れた手つきでだんごを取り出すとまた一つ、流麗な手さばきで、というのはおかしいがとにかくだんごを口に運んだ。

緊張した面持ちとはこのことだろうと言えるアルアをフェリスはみると、良いだろうというように一つ頷いた。その後だんごを口に含んだまま身を翻し、ついてこいと言わんばかりに足を動かす。その動きは子供にとっては早く、理解し難いものであるがアルアはあっさり理解し、早歩きでついていく。

そのことは、明らかにこの少年の理解力が高いことを示していた。ライナが苦笑を浮かべたのは言うまでもない。あの授業のスピードは、ライナが魔術の天才である他に、アルアの理解力によるものであることがここではつきりとわかってしまったのだ。アルアはライナと同じく“魔術の天才”の一人なのかもしれない。こればかりしは、様々な才能を持つミフィアであっても実現出来ぬものである。ミフィアには褒め称える選択肢以外は無いようだ。

手伝えるものがあれば手伝いたい、抗い様のない眠気と疲労が平和な景色の前で強く飛びだしてくる。流石にこれ以上は、持ちようがないのだ。今になって疲労の波が打ち寄せ、ミフィアを飲み込んだ。

ミフィアは無言でフラフラと、力ない様子で歩んでいく。ライナはその光景を訝しげに見つめるが、そんなことは今のミフィアには気にもならないことである。優しい風がミフィアの長い結われた珍しい紺色がかった黒髪を攫っていくも、なにも思わずただ無心で機械のように動くだけだった。限界だ。ミフィアが空中に力ない動作で手を掲げると、淡い光が舞い集まり、一つのテントのようなものが現れた。そこまでミフィアの体力を消耗しない、しかし実用性に優れているモノ。眠気のため本気で式を編んでしまい、まるでそのテントが瞬間移動してきたかのような……そんな錯覚を思わせる速度で生みだしてしまった。だがミフィアは気にせずテントの中に入り、瞬時に生み出されたソファアのようなものに倒れ込む。普段はこんなこともしないのだが、本当に疲れがたまっていたのだろう。倒れた瞬間気絶するように眠ってしまった。

ライナはそれを見て仕方ないなというように、笑みを小さく浮かべる。そして彼自身は馬車の座る部分へ寝転がり、アルアの悲鳴をBGMに寝入ったのだった。

## 二十六話 目覚めし前世、そして和やかな日常（前書き）

お待たせいたしましたー！

今回からミフィアの魔法講座……と行きたいところですが、長かったので一度切らせていただきました。

本当に待たせてしまい申し訳御座いません。二学期行事多すぎて……  
それでは、大して進んではいませんが今回のをどうぞ！

## 二十六話 目覚めし前世、そして和やかな日常

暖かくも暗い、闇の中。

ゆらり、と闇は揺れながらミフィアを抱え、赤子をあやすように優しく、優しく包み始める。

——懐かしい……感じ……？

光景はまったく違う筈なのに、いつの日か感じた、包むような優しさ。母親に抱かれたものとは、少しばかり違う。そんなことがぼんやりと、ミフィアの頭の中に浮かび上がっていた。

——これ、は……現世で感じたものの、ではない？……これは、僕の前世の記憶の一つというのか。

暖かくまた瞳を閉じてしまいそうな気分にも駆られるも、なんとか留まる。この記憶はきっと、大事なものだ。前世の自分でも記憶にとどめているか微妙な……しかし、とても大事であろう記憶。自然にそう感じるからこそ、この記憶がかなり必要となる所以なのだろう。

ミフィアはじつと、じつと見つめる。闇の底を暴こうとするかのように。その先を見据え、何か自分の知るべきものを知るために。

その、刹那だった。

ノイズがかかったように聞きづらい声。しかし、これは紛れもなくこの大切な記憶の一部の声であり——……

『き……は、たいせ……なひ………だ』

聞こえない。ノイズに隠されて、なにを言っているかもわからないのだ。どうにかして聞きたらと、ミフィアは神経を張り詰める。

『きみ……は』

『君は、彼らの世界の、大切な光だ』

そう、しっかりと聞こえ、頭の中で……一人の、何歳ともつかない男がこちらへ向かって笑いかけた気がした。

その髪と瞳の色は、前世にはあり得ない水鏡色であり――……

\* ・ \* ・ \*

瞬間、ミフィアは身を覚ました。

あまりにも突然のことで、その体制のまま何もできやしなかった。だが、すぐに状況を理解し身を起こす。

「……夢、か」

小さくため息をついて、呟く。これはいつものようなものとは違うが、紛れもなく前世の記憶であろう。しかし、あの髪と瞳の色は何だったのだろうか。前世ではないはずのあの色、そして“大切な光”。謎は残るのみであった。

「エルファも言っただけだけど、光って何だろう。それも今ではなく、前世の記憶でそう？ ううん、よくわからない」

天才とまで謳われたミフィアであるが、手掛かりが少なすぎる。

彼が真実を得るためには情報が必要だ。そのことにミフィアは、ただため息をつくのみだった。最近はそのような不測の事態が頻繁に起こるため、睡眠時でさえゆっくり安心して過ごすことができない。まあ、今はそれを気にしている意味は無いだろう。何故かそのことが自然とわかり、苦笑する。とにかく時期ではない。そのことさえわかっていれば、少しでも気が休まるということだろう。

自分が知らないところで自分に気を遣っている、ということは傍から見ればかなり不思議極まりないものであるが。

「ふうー、っと。さて、アルアは今どうなってるかなあ？」

少しばかり忘れていたが、アルアの修業が気になるところである。あまりの眠気に気にも留めることは無かったが、確か悲鳴が上がっていたような、そんな気がするのである。実際その通りなのだが、彼に真実を知る由は無い。ということ、気になってそわそわしながらテントのような建物からそっと、身を滑らすように出たミフィアであった。

少しでも身を休めることができたためか、身体は先ほどとは考えつかないほどに軽い。夢を見たにもかかわらず、ぐっすりと深く眠ることができたようだ。そのためか、ミフィアの気分は身体同様に軽い。

……しかし、現実問題そうはいかないようだ。

「ぎゃあああああああああああ！？ ゆ、許して！ フェリス先生助け、ひに”ああ”あ”あああああ……」

出た瞬間に幼い少年ということを示す高い悲鳴。どうやらあれは気のせいではないようだ、と今更ながらに確信したミフィアであった。

ちなみに今、アルアはフェリスに腕をひねられて押し倒されている状態で気を失っていた。アルアの頭の上にぴよぴよと星が回っているのは見間違いか、はたまた現実か。とにかくどれほどこの修業がつらいかは、ぼろぼろなアルアを見ればわかるだろう。

「あ、えつと……大丈夫、夫？」

「どう見たって大丈夫じゃないってこと、わかると思うぞ……」

呆れ半ばに応えたのはライナだ。相変わらずの眠そうな表情は、ちよつとした憐れみが混じっている。そこでミフィアは無表情で腕をひねり、押し掛かってぼこぼこ殴ったりするフェリスを想像して顔を苦くしたのだった。アルアに同情、その一択しかない現状にミフィアは従う。

アルアの首根っこをつかみ、ひょいと持ち上げたフェリス。彼女はミフィアを一瞥すると無表情でズバツと言った。

「やつと起きたかこのねばすけめ」

「寝起き直後にその言葉はきついなあー……」

寝起き直後のその一言は、容赦なくミフィアに痛恨の一撃を喰らわせた。そして彼は、ライナがフェリスに起こされることによつてちよつとのやる気もなえてしまうことを、自らの身をもって思い知ったのだった。

そこで噂のライナがミフィアに尋ねてくる。

「そついやお前さ、アルア起こす方法なんかいいのねえか？ 無理矢理殴って起こすのも可哀想だしさあ」

その後小さく「特にフェリスから殴られて気絶した後だしな……」と付け足したライナはフェリスに殴打されることとなる。

「うーん……そうだ、まずは『キズぐすり』を……」

「ミフィアそれ世界観違う……って、俺何言ってるんだ？ じゃなくて！ とにかく他にないのかよ？」

フェリスに殴られるも無意識に世界観の違いを示すライナ。その決死の行動に、ミフィアは少しばかり感動したのであった。ちなみにだが、ミフィアもその『キズぐすり』の存在を無意識に示した存在である。現在、此処には世界の枠すらも無意識に超えた会話をする二人がいるのであった。

「そうだなあ、回復魔法使うとか？」

「はあ！？ そんなんあんのかよ……お前の魔法って既に遺物レベルだぞ？」

「あるけど、その代償に僕の体力が削られんだよね。回復した分だけそうなるから、自分自身にかけても意味のない、というか逆に損するそんなやつ。でも今回はアルアだから大丈夫かなー、と」

「……よしとけ。今は結構大丈夫みただけどさあ、お前丸一日寝てたんだぞ？」

「へーそうだったん……っ！？」

頷きかけ、丸一日寝ていたという異常さに驚くミフィア。彼は、てつきりに三時間くらい寝ていたのかと思っていたのだが、違ったようだ。珍しくそのことは予想していなかった。

あー、だからフェリスがあんな様子でねぼすけって言ったのかと思いいながらも、次の策を考えようと頭を動かす。

「そうだ、だんご！」

「む、だんごだと？」

手をポンツと打って言うフェリスに、その言葉に反応するフェリ

ス。ライナといえば眠そうに頭にハテナマークを浮かべるのみだ。  
ミフィアはその様子を気にもせず、良い策だと明るい様子で生き  
生きと話す。

「フェリスのだんご、美味しいから食べさせたら起きるかも知んな  
い！」

「おい、そりやねえだろ普通……疲れてるんじゃないか？ やつぱ  
り少し休んだ方が……」

「いやさ、どこかで聞いたんだよ。だんご食べさせれば体力が回復  
するって……あれ、どこで聞いたんだっけ。わかんないけど、なん  
か自信ある」

「ふむ、だんごは万能だからな。余命一カ月と言われた老人がだん  
ごを食べたら二億年生きたとも聞くしな」

「どんな化けもんだよ……ってかミフィア、フェリスに毒されてき  
……ぎゃああああああ」

「ふん。よしミフィア、アルアにだんごを食べさせてやるのだ。そ  
してこの変態色情狂に、だんごの素晴らしさを見せてくれると  
いい！」

「……僕ただ一つの案として言ったのに……」

嘆息して、ミフィアは少しうなだれた。

フェリスにだんごをとえ言われたものの、フェリスはだんごを食  
べきってしまいストックがないため此処はミフィアがどうにかしな  
ければならない。病み上がり状態で本調子ではないが、まあここは  
『式編み』を使うほかないだろう。

「えーっと……そうだなあ、美味しそうなんだんご美味しそうなんだん  
ご……フェリスに食べさせられたときの味思い出して……うーん……  
……」

うんうん悩みながら、式を編む。その指はだんごの形をくるくる  
と形作りながら迷うように動いていた。元から式編みについて気にな  
っていたライナは、ずっとそれを見ていたが次第に面倒になって  
目を逸らす。いくら待ってもだんごは姿を見せてはくれない。それ

を見かねたのかフェリスがだんごの触感など、ミフィアに言った。そのおかげで式は完成し、空中から光を纏ったものが出てくる。皿にのせられた、だんご。フェリスはその様子に感動したような感じで、小さく声をあげていた。ライナは『複写眼』アルファ・ステイグマで見ているも構成が複雑すぎてその瞬間では読みとり切れず、諦めたように頭をかき欠伸をした。

ちなみにその後残りのだんごを食べたフェリスの感想は、「ウィニツトのとネルファのだんごが混じっていて微妙な味」だという。しかし常人から見れば普通とは比べ物にならないので、OKをもらってからアルアに食べさせることにした。気絶している子供に無理矢理食べさせるなど、人間としてロクデナシに思えるが仕方ない。

「む……みゆ、っ!?!……ごくん」

無理矢理詰め込んだためアルアの反応が少し悲しい物となったが、これも仕方ないの一言で片づけておくとしよう。なにはともあれ飲み込んでくれたので、あとはのどに詰まらすことに注意しながら様子見。

……その瞬間、アルアは起きた。

だんごの美味しさ、というよりも少しのどに詰まらせかけたために。

「……にゅっ!?! ……ぷはあ、先生、なんだかよくわからないんですがのどが詰まりかけました」

あまりにいきなりだったので状況を説明してしまうアルア。

「えーっと……美味しい?」

「美味しいですけど、それよりものどに詰まりかけたあの感じがシヨッキングで」

そりや死にかけたらそうなるわな。ライナは心の隅でアルアを軽く憐れんだという。ちなみにミフィアは何だか必死によくわからないことをしていて気にもとめない。

「取りあえず、疲れはとれた?」

「甘くておいしいですね、怪我の方はどうにもなりません精神的

には取れたような気がします」

完璧に説明してくれるアルアに、心底感心したライナである。フエリスはだんこの素晴らしさがなんとかー！と叫んでいるだけだった。ミフィアの方は「出来た！」となにやら喜んでいる。アルアはその様子にぎよっとして、

「ミフィアさん何やってるんですか？」

流石に尋ねる。ミフィアは嬉しそうに顔をほころばせて先ほどのだんご……とはほんの少し違うものをさし出した。

「怪我が治るだんご！ 見た目は餡乗せだんご、でもなんか傷が治る……はずのやつが出来た！」

「確証は無いのかよ……」

「だってまだ食べてないもん。ささ、食べてみて！」

「あ、はいっ」

無理矢理ずい、と差し出されただんごを戸惑いながらも受け取る少年。そしてぱくり、と一口口に含んで飲み込むと。

「……っ！ 何ですかこれ、身体の痛みが引いてきます！」

「その名も『ヒーリングだんご』っ！ ……ってダサいけど、気にしないで。美味しい？」

「はい！」

その勢いのある返事にぼんぼんとそれを生み出しては何かをするミフィア。ライナはその様子を不審げに見て、尋ねた。

「お前、何やってんの？ どうやってたら傷とか引くんだよ」

「えつとね、傷に貼ると治るとか言う薬草ってあるでしょ。その食べられる奴生み出して、砂糖とか蜂蜜とか色々加工したのを使ってそれを生地に練り込んだんだよ。式編み効果により回復力の凄く高いから、傷とかは即効効きます。ただしその代わりに普段よりも少し僕の体力が犠牲になっちゃいますえへへ」

「……よしとけ。お前体力減ってテンション変になってるぞ」

「あはははは、なんかテンション高いです。今なら何でも出来そうな気がするよ！ 昼寝とか」

「誰でも出来るだろ！　つーか俺もしたくなってきたな……」

昼寝の場合話に流されるライナであった。その横でアルアは一生懸命に口を動かし、『ヒーリングだんご』を頬張っている。フェリスはいつも通り華麗に、残りのだんごを食べていた。

そこで頑張っているアルアがテンションが変になっているミフィアに訊く。

「ミフィアさんっ、このだんごどうなってるんですか？　次々生まれてくるし、体力がなんとか……ですけど、もし僕にできるなら教えてくれませんか？　ククを助けたいんです！」

「ん？　……えっとお、これはごめん、君には出来ないよ。でも魔法ならできる……かも」

「出来ないんですか……でも、魔法ならって、ライナさんと同じ国所属なんじゃ……」

「ああ、言ってなかったけど僕はライナの国とは違う魔法を使うんだ」

瞬間、アルアの表情が驚きに染まる。同じ所属だというのに、ミフィアの使用する魔法はどの国の魔法とも構成が全く異なる。それどころか、全然違うような世界にある特殊な魔法なのだ。彼はその反応に苦笑する他ない。

「確かにミフィアと俺たちの国は同じだけさあ、コイツの使う奴は特殊すぎて意味わかんねえんだよ。その気になれば出来る気がしないでもないけど、めんどくせえし展開早いからなあ。教えるんだつたらそこら辺なんとかしねえとムリだろ」

「あゝ、うん。分かった、意識してやってみるよ。じゃあ、早速だけど……やる？」

「……はい！」

アルアの、元気な声がこの草原に響き渡って何重にも重なって返ってくる。強い返事にミフィアは少し口元をゆるめた。まだ全開とは行かずとも、この少年がいればそれなりに有利に進めることができるであろうガスターク二人との戦い。そのことを知っているなら

ば、十分戦力となり得るこの少年を育て上げる方を優先するだろう。  
「さて――まずは、ローランドでもよくつかわれる『稲光<sup>いづち</sup>』と似て  
る、雷の魔法でも教えようかな？」

ライナとフェリスが見守る中、転生者による特殊な魔法講義が始  
まったのだった。

## 二十六話 目覚めし前世、そして和やかな日常（後書き）

次回に魔法講座持ち越しです。次こそは早めに更新出来ればいいのですが……

## 二十七話 ミフィア先生の上級魔法講座（前書き）

どんだけ読者様お待たせしているんでしょね……

こんな作者に、どうかギガデインもしくは大規模破壊魔法喰らわして下さい。

不定期更新すいません

## 二十七話 ミフィア先生の上級魔法講座

「さて、じゃあアルア。まずはこの魔法——デインって言うんだけど——が、どんなのかを知らせるために使ってみるね。いい？」

「はい！」

「じゃー行つくよー」

間の抜けた声で宣告？ をしたミフィア。彼の唱えし魔法、デインはこれもまたDQの魔法であり、選ばれし勇者しか唱えられない魔法だというのだが……これは、どうなのだろうか。

上級魔法講座——前編

なにはともあれ、目を閉じたミフィア。瞬間彼の周りに魔法文字<sup>ルイン</sup>が巡り始め、彼は小さく呪言を呟いた。

『デイン』

どこからともなく一瞬にして魔法陣が展開され、それと同時に電流がバチバチと迸る。そのことに、軽く眼をみはったフェリス。馴れたように頭を掻くライナ。そして、驚きの表情を大きくあらわにするアルア。全ては、一瞬で起こったことだった。

たった一言、呪言を唱えただけで魔法が展開され形となる……そのことは通常この世界では有り得ないことであつた。しかし、転生者などという異例中の異例であるミフィアには通用しないことだ。そもそも前世の記憶を少なからず受け継いでいるということから世界の枠に適用していない存在なのである。

そのことは、彼自身も自覚はしていないものなのだが。少し前に告げられたばかりなので、いまいち実感がわかないのだ。

取りあえずそのようなものは置いとくとして、彼の放った魔法――

「『デイン』は先ほど言った通り電撃を放つ魔法である。ある世界では魔物が使えるも、人間はいわゆる“勇者”と呼ばれる者のみで使用できる選ばれし魔法。そのデインよりも効果が強い『ライデイン』、『ギガデイン』などがある。それらもデイン同様、勇者しか使えない特殊な魔法である。はたしてアルアに使えるのかどうか……の前に、ミフィアが使えることに疑問を持った方がいいかもしれない。

だが、そのことを全く知らないアルアたち。アルアに至っては既に目がきらきらと輝いており、興味があるということとをありありと周りに知らせている状態だ。ライナもなんだかんだ言って興味はあるらしく、少なからずこちらを気にしていることはわかる。フェリスは相変わらずの無表情で先ほどの『ヒーリングだんご』を頬張ってはいるが。

例によつて例のごとく、アルアは好奇心旺盛な子供の姿を見せる。その純粹無垢な瞳で、ミフィアと雷いかづちが落ちた辺りを交互に見つめていた。

「み、ミフィア先生、どうやっているんですか！？ アルファ・ステイグマ『複写眼』でも速すぎて見えませんでした！」

見えなかったというのに嬉しそうに訊ねるアルア。あ、もう先生なんだ……とミフィアは心の中では思ったものの口には出さず、いつもとどこか違うテンションでうーむと唸る。

「そうだなあ、遅くすれば見えるかなあー。ライナも見えるかどうか試してみてくださいませんか」

「お前本気でテンション大丈夫か？ ……まあ、いいけど。だんだん馴れてきたし……めんどくせえけどな」

「よーしやるーかなあー。頑張つてオリジナル詠唱とかぶち込んだら大丈夫かな？ 努力はするよ」

そう言ったきり、ぶつぶつと妙なテンションで呟く。訝しげに彼らはミフィアを見つめ、やがてミフィアが「整いました！」と言うと神妙な面持ちになる。

「そうだなあ、適当な詠唱入れるからよろしく。出来るかわかんないけどやってみようっと。んじゃあ行くよー」

テンションのおかしいミフィアが、手を天へとかざす。その瞬間にアルアが小さくのを鳴らし、眠そうにライナが見つめる。それを確認したミフィアは、ようやく口を開いた。異様な空気が、あたり一面を浸す。

『光に魅せられし精霊たちよ。我が声に応え、力を与えたまえ……  
全ては万物により、集いし世界の聖域。闇に抗いし力。夜闇を照らし、罪人を裁くためのその力。我が前に現れ、罪ある者達へ聖なる雷を与え給え。——“デイン”』

刹那、先ほど放たれたものよりも数倍大きい雷光が迸り、大きな音を立てて地に深き穴が穿たれる。同時に、あたり一面に何とも言えぬ焦げた臭いが広がった。

目を閉じたまま詠唱をしていたミフィアは気づいてはいなかったが、実際にこの目で見ていたアルアたちには容赦なく大きな衝撃を喰らわせた。結果、アルアは更に興奮しライナは小さく顔をしかめるといふ事になった。フェリスといえば相変わらずのだんごタイムである。

結局写し取れたのかというと、何とかライナが解析できたという返答である。よってここからは、自分の魔法の癖にわかっていなかったミフィアに代わってライナからの説明となる。

「あー、めんどくせえけど説明してやるよ。よく聞いとけ、アルア。ついでにミフィア。まず言うと……この魔法は、どうやらミフィアにしか使えないらしい」

度重なる衝撃とともに、アルアは疑問を吐き出す。

「えっ、何ですか？ ライナ先生は解析できましたし、だとすれば複写できるはずじゃ……」

「ああ、そうなんだよなあ。俺もよくわかんねえんだが、この術式

自体に意味わかんねえ何かの力が働いているみたいなんだよ。まるで『勇者の遺物』そのものが力となつて混じりこんでいるような感じだ」

「ん？ 僕それは初耳。そもそもこの魔法自体いつの間にやら覚えていたものだし」

「はあ？ お前、そりやなんなのよ……こんなもんは一世紀に一回出るかどうかの大発見物だぜ？ もういつそお前が大発見物のようにしか思えねえよ。……つたく、なにやら物を出すとか、そんな力もろもろどつから持ってきたんだよ？」

前世からです、とは流石にいえなかった。とはいえほとんど記憶の無い彼には何か良い言い訳を考えられるわけもなく、ただ「あはは……」と笑うしかない。正直教えていただきたいくらいのレベルだ。

そんなミフィア張本人までもスルーされ、ライナの仮説が展開されていく。

「つまりはだな、アルア。俺達の言う『勇者の遺物』とは取りあえず通常じゃありえない現象を起こすものなんだが……わかるか？」

「えっと、取りあえずは。先生達はそれを探し求めているんですね？」

「ああ、その通りだ。『遺物』は一つ一つに尋常じゃない力を秘めていて、俺達にやどうにもできねえ。現時点ではな。『複写眼』でもその存在は解析できねえ。だから、今んとこではこの魔法自体どうにも出来ないんだ」

ふむ、と一つ、フェリスが相槌を打った。自分とは無関係だというのに珍しい、とライナが驚いていると、その瞬間でフェリスの手には何か長いものが握られていたように見え、また刹那の間に消える。明らかに握られたのは長剣であると直感し、静かに視線を逸らすライナであった。

こほんと静かに咳払いが届けられると、ライナの仮説が再開される。

「とにかく、この『遺物』と思しき力はどうにもできねえ。それさえどかせえば何とかなるかも知れねえが、そもそもどかせるかもいじった後でこの魔法が機能するかもわかんねえんだよね……実際に唱えてみるから、見てろ」

一つ、言ったライナは面倒というように頭を掻いてから、指先を宙に掲げ光の文字を描き始める。その速さと言えば相変わらずの高速で、指先さえ霞んで見えるほどだ。瞬く間に複雑な魔法陣が構成され、静かにライナは呪文を口にした。

しかし、呟いた瞬間急激に、光を持っていた魔法陣は光を失い始める。そのまま魔法陣は溶け出すように地へ吸い込まれ、わずかな余韻とともに、消えた。

衝撃、と言った表情を浮かべたアルア。わずかにフェリスもふむ、と呟き、ミフィアは自分以外の者が異世界の魔法を使うところなるのだと、強く実感したのだった。ライナは大きく息をついてめんどくさそうに目を細める。

「ま、こういうわけ。結果的にやこの魔法は使えないわけだ。他の奴はよくわかんねえけど……やってみないとわかんねえな」

「成程。この魔法は、なんでだか僕以外には使えないんだねえ……はあ。めんどいなあ、他のも実践しなきゃいけないの？ 絶対なのかい？」

「なんでお前がめんどそうにすんだよ……解析する身にもなれよつて。お前の魔法複雑すぎんのだよ」

「なら！」

「嬉しそうに止めようっつー表情するのやめろ！」

漫画であるのなら絶対ライナの頭にあのマークが浮かんでいる、と思わず考えたミフィアである。そのことが余りにも面白かったので、笑いながら「冗談冗談」と言つと、むしろいらついたようなライナの表情が見えた。無駄にテンションのおかしいミフィアには格好の獲物というべきか、ずっと笑ったままだ。

結局ほつとかれ、ミフィアの笑いがまあまあ収まったところでよ

うやく話が進められる。茫然としていたアルアにもようやっとわかる話が回ってきた。

「あははっ、あふう……はは、ごめんごめん。何だか急に可笑しくって。めんどくさいけど、他の魔法も適当に唱えるから、解析お願い。あれ、ライナのめんどくさがりがうつっちゃったよ」

ぶくく、と吹き出すミフィア。追いついていけないものがほとんどのものの、一人追いつけたであろう者がいた。

「そうだな。やはり、この変態色情狂であるこの男のそばにいと悪いものが感染<sup>うつ</sup>ってしまうようだ。アルア、この男の変態<sup>うつ</sup>ぷりを感染<sup>うつ</sup>させぬよう、私はだんご神の名のもとにこの男を殺してやるからな！」

……訂正、誰もついて行けてはいないようだった。

## 二十七話 ミフィア先生の上級魔法講座（後書き）

何だかミフィアの性格の書き方が、変わっているような気が……  
他の魔法がどうなのかは、決戦にて明るみになるはずです。

随分と遅れ、年内には投稿しようとしていた物がついには新年迎えての更新となってしまうました。

次こそは早めに更新できるといいなと思っております。次辺りが終わったら新章突入になるかと思しますので……

なにとぞ、この小説を宜しくお願い致しますm（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5974t/>

---

伝説の勇者の伝説 ～欠片を失った光にうつるもの～

2012年1月2日16時47分発行